

【翻 訳】

ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク ホガース銅版画の詳細な解説 第二分冊

リーペンハウゼンによる完全な複製

ゲッティンゲン, Joh.Chr. デイーテリヒ出版社 1795 年

吉 用 宣 二

ホガースはいまだかつて到達されたことのない存在である、遠い時においてもなお賞賛が狭められることなく彼に与えられるだろう。 チャールズ・チャーチル

前書き

ホガースの作品についてのわれわれの注釈の第一分冊への前書きはいくつかの予言で終わられていた、しかし予言の一つも、残念ながら！ 実現されなかった。第一分冊の後で第二分冊はすでに前年の聖ミカエルの日 - 見本市 [1794 年 9 月] に現れることになっていた、そして別の分冊の後で*当世風の結婚*の解説を含むことになっていた。それらは当時現れなかった、そしてそれが一年半後に現れた今、それは「当世風の結婚」を含んでいない。われわれは今この誤りの理由を短く知らせること、そしてそれによって読者に可能な限り多く弁護することを読者に対する義務と考える。われわれが、読者は何についても時間がなくて困るということにはなかった、そしてその過失自体をこの謝罪から知ることになるだろうと確信しているにもかかわらず。昨年の復活祭の見本市の後、作品に取り掛かり始めたとき、芸術家 [リーペンハウゼンのこと] は延期するわけにも修正するわけにもいかなかった彼の他の仕事のために、六枚のホガースによって銅版画に彫られなかった、そして高度に仕上げられた版画、結婚を表している版画を聖ミカエルの日までに完成することは不可能であるとすぐに分かった、しかし六枚の他のホガースの通常の手法の作品ならばおそらく可能だろうと。だから変更され、選択はわれわれがここで読者に提出している六枚の版画になった - *情婦の生*。さてこれは本来*当世風の結婚*の一つの織物全部であるので、この歩みによって第二の予

言の実現がかなり配慮されたのである。しかし第一の予言の実現のためには救いはなかった。障害が生じた、そして障害はまたわれわれの弁解をもたらすのである。すなわち銅版画を作ることと折り合わない病氣[リーベンハウゼンの病氣については何も知られていない]、描写、少なくともこの種の作品の描写と折り合わない虚弱さ [1795 年 5 月 10 日のエッセンブルク (Eschenburg) への手紙。彼は自分の仕事を「駄作 *Machwerk*」と呼んでいる]。 - あの病氣が根本から除去されたということ、それをわれわれの複製をオリジナルと並んで比較しようと思う誰も疑わないだろう。しかし虚弱さは！ それは、とわれわれは恐れるのだが、正当に、至るところに見出されるだろう。一方で、この虚弱さ、生を通してわれわれの忠実な同伴者であるそれに責任を負わせないように、 - 虚弱さにその罪はない -、われわれはいくつかの見解を前もって述べなければならない。

ホガースについての考えをある種の評判あるいはわれわれの第一分冊によって形成したわれわれの読者たちの幾人かは、ひょっとしたらこの第二分冊によって当惑を感じるかもしれない。これは完全にはわれわれの責任ではない。ホガースによって表現された、情婦の生とその上ロンドンの情婦女の生はちなみにとても多くの気分的な気まぐれ[*Mutwille* 悪ふざけ]を約束している。われわれ自身はそう考えた - 当時は。しかし違っていることがわかってくる、そしてわれわれは確信とともに、彼の価値のあるすべての作品の中で、これらの六枚の版画は、本来的にいわゆる笑わせる題材の一番少ない量を含んでいると主張することができる。その原因は一目瞭然である、主要な主題はそれと調和しない。というのは、一人の無邪気な娘の物語、貧しいが正直な両親の娘の物語、彼女はロンドンで幸福を探すが、経験のなさからとても深い墮落に陥る。彼女は笑いのための題材ではない。ホガースはまた、彼のすべての陽気さにもかかわらず、そこから一つの物語を作ろうとするためには多すぎるほどの感情と趣味を持っている。それどころか自分自身と人間の本性に対してのそのような匿名誹謗文書を彼は人間として - 私は「正直な男として」と決して言いたくない - 書くことができない。だからこれらの版画の解説者が時おりとても真剣に語り、あちらこちらで彼が第一分冊の前書きの中でアイルランド氏に非難した誤りに陥るように見えるにしても、これは虚弱さではなかった。一方それが虚弱さであったとき、彼は少なくとも誠実に、決してそれから癒されないことを願う。また彼は、彼の感情が彼を完全には欺いていないなら、今なおこの点において少なくとも方法において [in modo] アイルランド氏と際立って区別されること、そしてだから彼の当時の判断に矛盾しなかったことを希望する。しかし彼が恐れていることは、彼を本来は決して離れなかった主要題材への憐みのこの感情を、副次的な物事の描写の際に、それが作り出されてはならなかった作り出されるべきではなかったところで、静かに片づけるよりもむしろ無理やり窒息させたということ、そして自

然に微笑む代わりに自分をくすぐることによってとても不自然な楽しい気分へ自分を刺激したということである。彼は彼がこのことを特に恐れているその個所を示さない。趣味の良い読者はそれを容易におのずと見出すだろう。これを理解することはひょっとしたらその理由を虚弱さの中に持っている。ひょっとしたら（これが彼にとってとても好ましいことであっても）しかしまたただ弁解である。

さらに彼は、憂慮すべき題材について心に持っているいくつかの言葉を失ってはいけない。これらの版画にはいくつかの稀な物たちが現れる。それには例えば、*第三の版画* としていくつかは (!) *第六の版画* での王政復古-ほうき [Restaurations-Besen] がある。そのようなものを説明しなければならないことは議論の余地のないことだ。絵画の解説者にとって危険な状況というのではないが、最高度に不快な状況である。それらを多義性の保護のために描き入れる画家は何も気にかけてはいない。いったいどうしてあなたはそのようなものを描くことができたのかと彼に尋ねると、彼は常に、有罪認定の赤みが顔の中に上昇する一方で、答えることができる、私がそんなことを述べたといった誰があなたに言うのですかと。だから描かれた二義性は、それが描かれたままであるかぎり、その本質の中にいつまでも留まる。しかしそれは、*祈祷師* - 私は解説者のことを言っている - がそれについて言葉を語るとするに、*単純な猥談* [simple Zote] として現れる。そして最後に哀れな解説者が自分ができるすべてのことをしたならば、憂慮と苦労と不安を十分に耐えとおしたならば、彼はまだ承認しなければならない、最後にはひょうきん者 [der lose Vogel] について何か、あるいは生来のもの [in der Haut] について何か感謝として彼の後ろからぶつぶつ言われることを。それは嫌悪すべきことだ。一方われわれはとても適切に [so ziemlich] その件から身を引いてしまったと思う。飛び越えることによってではない。それは何でもないことだから。また直接的に指摘することによってでもない。それはとても適切ではなくとても適切ではないことであったから。そうではなく賢明に（その言葉を許されよ sit venia verbo）それを避けて行く [darumherumgehen] ことによってそしてわざとらしい指揮 [gesuchte Direktion] とともにわざと無視する [hinwegsehen] ことによって。女たちの集まりの中で常にただ一人の、まさに同じ女性を見るひとは、常にただ一人の、まさに同じ女性を見ない人よりもほんの少しももっと多く自分の秘密をばらしてはいない。一方は他方と同じくらい良く問題を解決する。代数学の中ではそれはとくに知られている物事である。またわれわれの前書きのこの段落全体は弁解としてあるばかりか、またあれらの個所のための解説手段としてある。というのは、ごみは、人々がごみがどこにあるのかをおおよそ [obiter] 知っていれば、容易に見出される。

ちなみにわれわれは読者に喝さいと同様に励ましを感謝する。それでもって読者は第一分

冊を栄光に浴させたのである。その両者は確かに最もよく利用されるべきである。とりわけわれわれは、最大の喝さいがいい加減さに誘うべきではないということと同様に、とても厳しい非難が憤慨に誘うべきではないということ断言する。いずれにしてもわれわれのところでは作家の職業は一つの固有の事柄である。それはたいていの場合に内的な価値よりはもっと多く博愛的な言語に基づいている、そしてひょっとしたらもっと頻繁に、その事柄をもっとよく理解している人たちの友好的な沈黙に基づいている。われわれは一方でわれわれができたすべてをした、ひょっとしたらあちこちで、今まで見逃されてきたことを明るみに出した。しかしおそらく、フォルスター [Reinhold Forster 博物学者, 「自然地理学についての観察」1778年], ヴェンデボルン [Gotthard Friedrich August Wendeborn 1742-1811 説教者], フォン・アルヘンホルツ [Johann Wilhelm von Archenholz 1743-1812 歴史家] とキュッター [Karl Gottlob Kütter 1755-1805. 旅行作家] などが沈黙している限り価値を得たとて多くのことを書いた。

意味を狂わせるいくつかの誤植をわれわれは示した、われわれが完全な印刷の後ではじめて、予期していたよりももっと多く見出した他の誤植を読者は親切に許してくださるだろう。それには *dem* のかわりに *den, daß* のかわりに *das, zeitlich, geistlich* などが属している。ひょっとしたら印刷された誤りはもっと重要だろう。それらはひょっとしたら、著者がしたいように自分の本を回転させたり、裏返したりしても、常にそのような状況を呈するだろう、それらの誤りを著者の眼に対して覆い隠す何かはそれらの誤りと彼の眼の間にあるかもしれないという状況を。そのようなことを見ることは、まったく、となりに立っている人たち、ありがたいことに誤りが決して欠けているわけではない人たちにとってふさわしい。しかし人々が、773 頁の下から 15 行目にある性急さの誤り、われわれがその全紙の印刷の後になってはじめて微笑みなしにではないが発見した誤りをそれに数え入れないように、われわれはそれをここで訂正する。もちろんそこでは化石になった *versteinert* の後ろに一つの終止符がなければならぬ、そして次の双対文は *Alles Luce* などの言葉で始まらねばならぬ。構成が今そのようにあるように、それはほとんど、それほど良い状況のもとではないにしても、シェークスピアの「三人の魔女たちがあらゆる方面から現れる *Enter three witches solus*」[マクベス] を思い出させる。 - 次の分冊はそれがいつ現れようとも、風刺的気分の名作、八枚の版画の中の放蕩者の生を確かに含むだろう。[第三分冊「放蕩者の道」。正確に一年後、1796 年 4 月に現れた] 最初の版画はすでに完成に近い。[「第三分冊の最初の版画はいまや完成し、本当にうまくいった」とリヒテンベルクは Eschenburg に書いた, 1795 年 5 月 10 日]

ゲッティンゲン 1795 年 4 月 18 日 G.C.L.

THE HARLOT'S PROGRESS [売春婦の経過]

情婦の道

第一の版画

現在の六枚の版画によってホガースは最初に大きな名声を確立した、その名声を彼は、たくさんの今は忘れられた人間たちの異議にもかかわらず、常に弱められずに、それどころかこの時間まで十全に享受してきたのである。それが受け入れられた時の喝さいは描写できないくらいである。彼はそれに千二百の予約注文者を獲得した、それはコーヒーカップの上に心にとめるために描かれ、そして扇子 [Sonnenfächer] の上に表現された。暑さの時に影を作るためにそして困難の時に見るために。当時の一番小さな頭脳もこれらの作品の人物たちを自分たちの不滅の思い付きを支えるために引用した。セオフィル・シバー (Theophilus Cibber) [1703-1758] はそれをパントマイムとして舞台にのせた、そして別の人たちは版画の中の個々の出来事を引き延ばしてオペレッタにした。自然に従ってよりはこの欺くことのないカメラ = オプスキュラの中で人間を模写することは彼らにとってもっと容易だった [この原則にリヒテンベルクは忠実だった、彼がギャリックの人間表現を一つの別の自然として研究し、描写し、このコンセプトに従って世界絵地図 Orbis pictus を起草したとき]。それは当然である。これは残念ながら世界のこの紙の地図帖の特権である、宇宙が本と絵の商売の中に入って以来、数千の作家や芸術家たちが自然の直接的な光線のために眼をくらまさせられているということは。[リヒテンベルクはここで 1795 年にドイツの作家たちに、自然に従って働かないという古い非難をしている]。彼らはこの光線が一枚の全紙 *Bogen Papier* によって反射されると、まったくよく見るのである。もしその反射が常に最初の反射であるならば、そして版画 [Blatt] 自体が常に、われわれの偉大な芸術家がここでわれわれに差し出しているこれと同じくらい平らで、きれいで鏡のように明るければ、幸いである。

その作品は表題をつけられている、*The Harlot's Progress. Die Fortschritte der Buhlerin. 情婦の進歩*。私はそれをわれわれの表題の中で *情婦の道* と名付けた。私はこのとても分かりやすい表現の中でいくらか聖書の形式 [Harlot は文字通りに翻訳すれば、娼婦 Hure である。ちなみにホガースのタイトルは、Bunyan の *The Pilgrim's progress* の意識的なパロディである。カレンダーでの解説の中ではリヒテンベルクは Hure という言葉を一貫して使用した] が十分にふさわしく、英語のものと比較して正確さの点で欠けているかもしれないものの代理をすることを希望する。ホガースがここで与えているものは生全体ではない、そうではなくただいつでもその生の各々の期間からのただ一つの場面である、その場面は人目を惹く

ニュアンスの差によって先行するものと区別されるのである。彼の女主人公の純粹な、優しくさえある無垢でもって彼は始める、そしてとても深い墮落で終える。これが情婦の道である。－ ここで少なくとも！

この版画の主人公はヨークシアの貧しい村の説教者★の娘である。この最初の版画の上に父と娘が見える。前景の彼女はまさに、表題に見られるように、彼女をあの地方から連れ出したみすばらしい馬車から離れ、そして立っているところ。父は背景に、騎乗するというよりはむしろ、ただ馬上に。その娘はどのようにそこに立っていることか！ 彼女はもちろん、見てわかるように、高い美しさではない。ホガースは美の画家ではなかった、彼はまた彼の全生涯において、私が知る限り、ただ二人の人によって美の画家とみなされただけである。そのうちの一人は彼自身である、そしてもう一人は彼自身の妻 [ホガースは 1728 年にジェーン・ソーンヒル Jane Thornhill (1709-1789), イギリスの歴史、宮廷画家の Sir James Thornhill の娘と結婚した。リヒテンベルクは明らかに 1775 年に彼女と個人的に知り合った] である。しかし高い美しさの娘に欠けているものはより高い健康、子供らしい単純さ、優しい無邪気さによって大きな利益とともに補われる。彼女の行儀のよさは、見られるように、粗野な、清潔な、実直な村の娘の行儀の良さである。その娘から何かが作られるだろう－そしてそれはまた起こるのだ。彼女の骨格はケレス [農耕の女神] とポモナ [果実の女神] の仕事によりいくらか横に広げられているように見える。忘れな草、ヒバ菊、堇と恋した熱狂の他の茂みの花を集める場合には鑄造物はもっと繊細になっただろう。一方彼女はまだ十代の深いところにいる★★。そしてまだ成長している。また確かに彼女の衣服の裁断の仕方

の角ばったところは村の仕立て屋の責任に入れられるべきだ。

★ 本来はいわゆる副牧師 *Curate*、みすばらしい存在であり、彼らは、ジョンソン博士がその言葉を定義しているように [ジョンソンの英語辞書]、代わりに礼拝を行うために一人の別の人によって借りられる。－ 教区の魂はそれで通常悩まないことになっている。(それが配置 [Anordnung] を支えている) それに対して構成要素 [副牧師] の肉体は、行事 [Einrichtung] が異なっていたら、悩むだろう。私はこの構成要素を引き続いて何度か校長 *Rector* と呼んだ、というのは、彼らは実際に多くの分野においてそのような名前であるからだ。これについての嘆きはイギリスでは一般的である、そしてホガースは彼の風刺でもってここでとても正しい。

★★ *She is in her Teens* とイギリス人は 12 歳と 20 歳の間の娘について言う。その間に入る七の数字はすべて *teen* で終わるので。 *Thirteen* – *nineteen*。(dreizehn neunzehn)。 *Miss in the Teens* はギャリックの有名な劇である。娘が十代になり [zehnen] 始めるときは、彼女の乳歯が生え [zähnen] 始めるときよりももっと危険であるとみなされている。

彼女の衣服の中には、それは彼女の存在全体と同じように滑稽なほど単純であるのだが、少しの嘘もない。何も高すぎはしないし、何も外に出すぎて建てられていない。帽子とコル

セット，スカーフはそれらに委託されたものを守り，装備している，忠実に，見せびらかすことなく，できるだけ小さな費用で，ミツバチの巣のように。前者の中には占められていない階層はない，後者には空白の歩廊はない。前者のもとでは静止している顔は，雄弁な沈黙でもって，一般的に理解されるように，どの人にも開かれて，一人で話す，そして説明を必要としていない。それに対して後者については，ただ推測だけが許されているので，フローラ〔花と豊穡と春の女神〕はほとんど余計な保証をした。そして彼女の小さなバラを前方に刺した。無邪気さを持った若い盛り。そこから防備施設〔Fortifikation〕が通常の仕方で，三か四層の塁壁をもって平行した足まで下方へ続いている。司令官が買収されなければ，側面から出陣のための希望がある。－ 側面に針のキスと小さなはさみがぶら下がっている，そして右の腕から一つの小さな花がぶら下がっている，おそらく泣きながら別れを告げているかわいそうな母によって最初にそこに掛けられたもの，途中での仕事と元気づけるために。腕の姿勢の全体的なあきらめと視線の中の内気さの多くは正装の婦人の上品な時計の反射の責任である，その善良な子供はその婦人と関係づけられている。高貴な生まれの方たち〔Ihro Wohlgeborenen〕が誰であるのかを読者は当時，知ることになる。まだわれわれは無邪気さと関係していなければならない，そしてすぐに哀れな父に移ろう。

そこで彼は忠実な家室，みすばらしい白馬★の上に座っている，その馬はもうすでに十六年前から彼に可能なことをすでにした（もちろん別の神の被造物がもっとよくすることができると），一人の妻と十人の生きている子供たちといっしょに，彼らみんなが所属している豊かな国の中で150ターレルの収入のもとでその哀れな騎手を支援すること。本当に悲しい姿！ 膝のところの革は重い仕事の中でひざまずいて擦り切れ〔durchknieen〕，そして自然によってただおまけに再び継ぎを当てられている。首の形と，牝牛の何かと物彫り台の何かを持っている脚の位置は事態を少しも良くしない。またその馬が自分の騎手の姿によって，時には起こるように高められたということも可能ではない。この騎手自身は高い教会の奉仕の中にいた，彼の忠実な四本足の従者が同様にすべての高い厩舎の中にいるだろうように。彼もまた老いていて，こわばっていて，荒廃している，そして重い仕事の中で — （公平なる天よ！）－ ひざまずいて膝を痛めた〔durchknieen〕。そしてまさに彼の友人のように，おそらくもっと柔らかな寝床への希望もなく。乾ききる口と干からびた手の指のところの光沢〔Lichtblicke〕を見るがよい！ その手の中には手綱よりはむしろ生きている自然の全般的な友の大鎌が期待される。彼は彼の役職の僧服でそこに座っている，それは街道でまだ尊敬の念を当てにすることができた，家の中の唯一の服である。その尊敬の念を人々はその服のもとでの無垢の身分には拒否しただろう。ズボンさえも例外とせず。それらは確かにひざのところが損なわれている〔durchknieen〕。そして高い長靴のつま先は飾りであるばかり

か、同時に嘲笑とぼろ切れ餌食 [Lappenfraß] に対する保護である。世界の中のすべての飾りはそのようなものであろう、飾りと保護 *Decus et tutamen*。雨で洗い流された、色あせた、櫛ですき取られたかつらはここでは大きな意味を持っている。宗教改革が、最後に常に自力で何とかするトンスラ [剃髪した頭] にかつらを許したということは宗教改革の美しくないところだ。そしてもしそれが起こるならば、かつら自身の、代理されることがむつかしいトンスラから、すべてを償っただろう頭巾を取り去ったということは、宗教改革の美しくないところだ。聖職者のかつら (*The Clergyman's Wig*) がイギリスでは何であるか、ドイツでは少しも理解されない。何でもないものか？ - 違う！ おお！ 私に多く反論しようとするひとがいれば、私は、ドイツでもかつらが何であるのかまったく知られていないと率直に言う。われわれが持っているものはかつらの単なる標本である。短くその事柄について片づけると、尊厳と印象を顧慮すればかつらはそこでは完全に古代人のひげである。ただ髪は否定的な側にある。形によれば？ よろしい、私は少なくとも聖職者的な形を描写したい。花の中では明らかに、リンネ的。どの人も玉ねぎがどのように花咲くのか知っている。小さな花たちは一緒になって、空洞の玉ねぎの茎の上に突き刺されたように、高くそしてしっかりと座っている、一種の天球である。今、空洞の茎から首をないものとして考えよ、そしてあの天球から、仮面を受け取るために必要なくらい多くの前部の花をないものとして考えよ、そして上部の、一つの帽子を受け取るために必要とされるだけ多くの花をないものとして考えよ - しかし仮面と帽子な想定しないで -、そうしてイギリスの聖職者のかつら *Clergyman's Wig* の形と色さが得られるのだ。私はそれが混乱した空想であるのか、あるいは私のもとでの詩人の才能の病的な変化 *Metastase* [それによって語り手が一つの事柄に対する責任を他者に転嫁する語りの文彩] であるのかどうか知らない。しかし私はしばしば、美しい夏の夕べに、空洞のあるやせた茎をもはや明瞭に見ることができないときに、花咲いている玉ねぎの畑をイギリスの教会-集会 [Konvent] とみなさずにはいられないのである。今われわれの哀れな男の散水された羊の毛皮の上に最後の視線を投げかけよ、その白馬に。ホガースはここで心に語りかけている。そして天よ、われわれが、そこに導く最小の列の一つの別の方向を与えることからお守りください！ ホガースは、と私は言う、正直者にとってブラシをかけること、こすること、くしけずることのためにどれくらい多くの費用が掛かるかを知っている世界中の人々の心に語りかけている。その正直者が常に借金なしには、決して公的に自分の身分と団体のみすばらしい表章を置くことができないという事態に至る前に。彼が永遠の裁き手の眼の前でしばしば今の司令官よりもっと多く敬意をはらうかもしれない団体の。ここには真剣さがある、忠実な読者よ、そしてそれ故に私は、あなたに少しだけ時間をお願いする。おお！ 格子戸のある門のもとでのレオノーレのヴィルヘルム [Leno-

rens Wilhelm。Bürger の有名な物語詩 Leonore からの近衛歩兵。彼の花嫁を墓地に馬に乗って連れて行く] のように、おかしな姿で、この死の人物 [Toden-Figur] が広間のテーブルクロスのところ、司教があるいは校長 [Rektor] が彼らのテ = デウム [ラテン語による神への賛美] を賞味する *schmausen* ところへ馬に乗って行くならば、あるいは物彫り台のところで道を越えて疾駆するならば - 司教たちが迅速な四頭の馬の馬車に乗ってテ = デウムを駆ける *rennen* ところ - そして彼らがこの絵の中のその男を見るならば、彼らの肉と、彼らの血と、彼らの団体のその男を、(彼らのかつらのこと言えるだろう)、もっと大きな収入の中の彼のテ = デウムを生涯、渴望しなければならなかったその男を見るならば、金持ちのイギリスの中で貧しい聖職者の存在はもっと良くなるだろう。 - しかしそれはポエジーである。それをやめよ - これらの日々の中で。

* ルケット [André Roucquet 1701-1758 細密画家、芸術作家、30年間ロンドンに滞在した] は言う、イギリスの聖職者たちは通常、白馬に乗っていると。だから白の上の黒。Roucquet はホガースを知っていたので、そしてホガースはおそらくその発言を知っていたに違いないので、気分的なイギリス人が悪ふざけから信じやすいフランス人に冗談 [Schnurre] を結び付けたということが最高にありそうである。これは同時に一つの推定上の試験の役を演じる。ホガースの自分の作品についての注釈は、彼がそれを残したならば、どのような結果になったかについての試験の。

わかりきったことだが、ポエジーをやめよ。というのは、哀れな牧師とその娘のところになれわれはまだしばらくとどまらねばならない。その老人は彼女を、世界のための歩行能力を自然から受け取った最初の子供として都市まで同行した。彼女は荷車の上に、彼は哀れな白馬の上に。彼は二つの荷車 [Stoßmaschine] の間で選んだ、そして自分で一番快適なのではなく、一番安価なのを選んだ。彼らはちょうど、Woodstreet の鐘 - 亭 *Glocke (the Bell-Inn)*、有名なワインの家に着する。老人は推薦状の宛名を読む、*To the Right Reverend Bishop - London*。(ロンドンの尊ぶべき神に敬虔な司教様に)。それが空砲で [blind geladen] なかったならば、当たることができる推薦状。彼は眼鏡を所持していない、そして宛名を調べるのに苦労する。この瞬間を白馬は彼が途中でしそこなったことを取り戻すために利用する、そしてががつと陶製の容器の中の藁の束をつかもうとする。それはここで売られているのだ。花の植木鉢、鉢、平鍋、その他の何であれ、すべてが空っぽに、その飢えている馬に向かって落ちてくる。とても縁起が悪い! おそらく、もしそれが話題になるならば、空の鉢のための勘定は、拒否された途中のいっばいに詰まった鉢がかかったよりももっと多くなっただろう。そして馬車 [Stossmaschine] のとる節約すべてよりも、そして(希望は計算に入れず) 神に敬虔な人への手紙の価値全体よりももっと高く。しかしわれわれはこの悲嘆の場面から離れなければならない。まだ多くのことがなされなければならない。

だから、さようなら、哀れな二人よ、われわれはすぐには再会しないだろう。まだしばらくは君の共同の運命の少ない衝撃を忍耐強く耐えなさい、それらの衝撃はまだ戻ってくるかもしれない、それだけが終わりをつくる自然の大きな慈悲の一撃の時まで。それは君に、良き老人よ、君の愛しいマリアを待っている言葉で表すことのできない不幸の眺めを免れさせるだろう。まだ君はそれを知らない、君がヨークから君の忠実な従者とともに先導した行進は苦悩の行進だった、その行進によって徳は、それ故に君の娘の至福は恐ろしい墓に運ばれる！そして君は、忠実な白馬よ、君の側面に私はまさに君の騎手の拍車のすぐ後ろに、重要性の小さな点を見出すのだが、その小さな点は芸術家にとって鉄筆での一つの圧力を要しただけだが、君にとっては君の貴重な血を失わせたのだ。白馬よ、私を信じよ、私はそれを発見したときに君のために三倍も多く感じた。われわれの別れのすぐ前に君と君の主人の間のこの**接続詞**を発見することは残念である。しかし自分を慰めよ。君たちの間の平等は君が思うよりもはるかに大きい。彼もまた彼の全人生の間、君が持つよりももっと無慈悲な騎手を持っていたのだ。そしてそれは芸術家から一つ以上の銅版画を必要とさせただろう、その哀れな犠牲者をここで今聖職者的な *Copri-Miseria**で覆う傷跡を表現するために。

* *Copri-Miseria* 悲嘆のふた。イタリアの一種の外套（明らかに、*現世的な外套*）の意味深長な名前。

われわれの女主人公、善良な正直な村娘、彼女はだからヨークシアの出身でロンドン、旅館「鐘亭」で降りる。健康な田舎の植物はその**素朴な**地面から途方もない庭の中に移植される。ヨークシアでは知られていない、千倍もの形の肥料塩〔*燐 Düngsalze*〕と昆虫の真つただ中に。彼女は不幸にもすぐに一番下劣な花壇に陥る。見渡す限り。彼女が根付くことができる前に、彼女に昆虫が（私はここで**上品な**時計を持った良き生まれの婦人について語っている）、有毒の一刺しを与える、それは彼女のまっすぐな成長をこの時間では少なくとも、永久に墮落させるだろう。これは以下のように関連している。

ホガースはヨークシアからその娘を来させる。なぜヨークシアからなのか。芸術家と作家は後世のために意味のない線〔*Strich*〕を作らない。ヨークシアは（私はここで統計学者とともに語っている）とても美しい娘を供給する。読者はそれを馬についてすでに知っている。そして馬車は、この地方のとても貧しい、醜いというのではない生き物を乗せて、毎週、ウッドストリート（*Woodstreet*）の鐘亭に立ち寄る、あるいは少なくともそこで言葉をかける。これがその場面である。その場面をさらに詳しく描写するためにいくつかの言葉を。玄関口の上に**チェック模様のます目**〔*Feld*〕がある。それが何を意味しているかは、しばしば最近でもまたイギリスの月刊誌の中での不和のリンゴ〔女神たちの間に争いを引きおこし、トロイ戦争の原因となったリンゴ〕であった。その論争はしかしいま決定されたように見える。

それは、強い飲み物が給仕されるすべての家が必然的に掲げなければならない記号である、そのようなチェック模様のます目を掲げている Warren 家 [おそらく有名なイギリスの商人でロンドン市長のサー・ラルフ・ウォレン (Sir Ralph Warren) 1486-1533] はもちろんこの時間までそのような居酒屋主人への自由を与える独占的な権利を持っている、そして税金を集める人の負担を軽減するためにこの紋章ます目をドアの上方、戸口に大きく描かせることは慣例である、彼らとその家を遠方でも認識できるように★。それはわれわれの芸術家の作品の中ではさまざまに現れる、そのような家の中で通常、見出される人間たちと同様に。その家の中庭は、見られるように、惨めな片隅にある。隣近所に良い側面を持っている家が立っていても、それらは少なくともこの場所に尊敬に値する家を示さない。例えば、歩廊のある左手の家は自分の隣人に容易にはもっと悪いものを示すことができないだろう。通りすがりに述べると、一部は支柱の上に立っていて、一部は棒にぶら下がっている歩廊の上に、二つの逆さまにされた鉢が見える。これは昼でのそれらの通常の滞在であるように見える、そこで新鮮な空気を吸い込むために。夜にはそれらは家族に仕えるためにふさわしく戻る、その家族の数はそこ上にだから同時にそれらの鉢によって記される。張り渡されたロープにはシーツ類が、あるいは今朝水の中にあつたものが掛かっている、肉体での将来の使用のためか、あるいは単に製紙工場の周辺地域 [in limbo] 中であるのかは、一つの作品からはおそらく決定されない。そこの上から見下ろしている娘は長靴でないならば、少なくとも硬い長靴下 [Steifstruempfe。この個所はドイツ語辞書〈DWB〉の中でその言葉の唯一の証拠資料として仕えている] を身に着けている、その長靴下は水と強く混ぜられているように見える。おそらく何かの流れ出ているのだろう、そして彼女は通り過ぎる人たちのために良い成功の希望とともにこのしづく浴を眺めているように見える。

★ これについての最新の研究がジェントルマンズマガジン 1784 年 9 月号 797 頁にある。[Mr Urbarn Candide と署名された投書]。

この惨めな片隅に、このすべての悲惨にもかかわらず、いくらか位置をずらされたふくらはぎとともに玄関に立っているのが見られた男が行く。髪袋をつけた従者を、とりわけ見られるように、とても従順な従者を後ろに立たせているという状態がすでに少なからぬことを推測させる。彼もまたここにやってきた、ヨークシアの娘を乗せた馬車の世話をするために。そして荷下ろしをする際に先買いをするために。自分の後ろの衛星の他に、髪袋をつけて、彼は cul de Paris [18 世紀に女性の服において現代的であった尻詰め物 Steißpolster] をつけた盛装の婦人 [Staatsdame] を前に持っている。彼女は明らかにその男に属している。その男は誰だろうか。これを読者は詳しく知ることになるだろう。

一つの足を中庭に、もう一つの足を家の中に置いている男、左手は杖で支えられており、右手は個人経営の商店に取り組んでいる、その男は評判の良くないチャーターズ大佐 [Francis Charters] である。どのような敏捷さでホガースが顔や形をうまく捕らえたかを知っている人を、この版画の上で最大の悪党のうちの一人の人相と姿が保存されているのを見ることは喜ばせるに違いない、彫刻用鑿が永遠にしたそれを。われわれのドラマの中には行動している人物のもとに、絞首台で死んだ二人の人物が登場する、しかしこの人間はそこにはいない。まるで彼がそれほど絞首刑に値しなかったかのように。とんでもない。彼は、彼が絞首台に通じている無数の詐欺術、彼が名人であった詐欺術にとっても賢明に、絞首台自体をだまして [schnellen. prellen の意味。18 世紀に慣例であった] 自分の利益を得る術を加えて研究していたので、縛り首にされなかった。この獣がベッドで死んだその日より絞首台が価値を侵害されたときはなかった。われわれの読者の中で、ポープ [Alexander Pope 1688-1744]、スウィフト [Jonathan Swift 1657-1745]、アーバスノット [John Arbuthnot 1667-1735]、そもそも当時のイギリスの古典作家たちを良く知っている人たち、あるいはこの偉大な民族の精神と性格をまた彼らの刑事裁判所が毎年提示している奇怪な事件の中で研究することに喜びを見出した人たち、彼らにわれわれはここで何も新しいことを言わないだろう。詐欺師 [Gauner]、売春婦猟師、悪党そしてチャーターズ大佐は同じことを意味していた。ポープは、急いで事柄から離れるために、一度言う、

Charters and the Devil ★

チャーターズと悪魔。それはほとんど会社商売 [Compagniehandel] の社名のように聞こえる。彼らはまた互いに交際のようなものを持っている。われわれの日においてはフランスの *Charters* ★★ があの本当の商店の売り台 [Comtoir : Comptoir] と持っているような交際を。そして私は、ナント [Nantes フランスの都市] と Bourdeaux への彼の一番新しい手紙のいくつかにチャーターズ兄弟 & カンパニー [Charters & Co.] と記すことは悪魔に不名誉になことをしなかったと思う。

★ 道徳エッセー 書簡 III v.20

★★ Orleans 公爵、以前は *Duc de Chartres* - Nomen et Omen 名前は運命である、すべてを言う。摂政 [Regent] 公爵 [Philipp von Oleans 1674-1723, ルイ 15 世の摂政] を思い出せ。彼は自分を *roué* [放蕩者] と呼んだ。彼はしかし *rouable* に死んだ、彼の同名の男がイギリスで単に *pendable* に死んだ一方で。[言葉遊び。Roue: 車輪, *roué* (それから派生された): 放蕩者, *rouable*: 車輪の刑に処されるに値する, *pendable*: 絞首刑に処されるに値する]

この生き物のもっと近い描写に。われわれはポープのあの箇所へのノートで始めたい。冷たい散文で。

フランシス・チャーターズ *Franziskus Charters* 一人の男。彼はすべての種類の悪徳のゆえに卑劣な男だった。旗手としての彼は詐欺のゆえに連隊から追い出された (*drummed out of the Regiment*), 太鼓を打って追われた [*getrommelt*]。その後すぐに似たような違反行為のゆえにブリュッセルから追い出された, そして最後に同じ原因からジュネーヴから太鼓で追い出された。賭博場での百種類もの詐欺の後で, 彼は最後にお金を途方もない利子で貸し出し始めた, 何かがあるべきように正しくならないと, 大きな罰金を要求した, そしてなされた仕事のために賞金を。この利子, 罰金と賞金を彼はまとめて新しい資本にした, そして最後に支払いの期日が来ると, 彼はその時を素早くつかんだ。悪徳と同様に彼の隣人たちの欲求や愚かさに対するこの飽くことのない注意深さによって彼ははかり知れないほどの財産を獲得した★。彼の家は絶え間のない売春宿だった。彼は二度強姦のゆえに告訴された, 罪ありとされたが, 容赦された。同じ性質の第三番目の裁判の時に彼はそんなに容易には逃げられなかった, 彼はニューゲートにぶち込まれなければならなかった, そして大きな金額を払わねばならなかった。彼は 1731 年に 63 歳で死んだ。彼の埋葬の際に民衆は大きな暴動を起こした。民衆は死体を棺から引きずり出そうとした, 最後に墓の中の彼に死んだ犬を投げつけた。有名なアーバスノット博士は素晴らしい墓碑銘をもってこの怪物を世界の中から恥ずべき不死へと太鼓をたたいて送った *trommeln* (というのは, その時に実際に少し太鼓がたたかれたのだ)。その墓碑銘はとても有名である, しかし多くの読者のゆえにそれはここで間違った場所にあるのではない, と私には思われる。翻訳はわずかの個所で字義通りではない。

★ 彼の毎年の収入は六万ライヒスターレル [Rtr] と評価された。

ここに

彼の生の中ですでに始められた腐敗が

続いている

FRANCISCUS CHARTERS,

彼は屈服されることのない不変性をもって

そして

ただ彼によってのみ達成された

生の同型性ととも

老いと病弱にもかかわらず

すべての悪徳の絶え間のない実行

を固く持ち続けた

人間ができる悪徳の実行を
浪費と偽善だけを除いて
浪費から彼を
飽くことを知らない吝嗇が守った
偽善から彼を
比類のない恥知らずが守った
彼は道徳の
変わることをない墮落によって
たいそうユニークだった
財産の蓄積において
たいそう幸福だった
というのは
商売なしに
本当の意味の正業なしに
公的なお金の管理なしに
そして国家の中の買収に値する地位もなく
彼は獲得した
あるいはむしろ彼は作り上げた
王侯の財産を
彼は彼の時代の唯一の人間だった
実直さの仮面なしにだますすべを知っていた人間
自分の根源的な卑劣さをいつも保持していた人間
彼がまだ年に六万ターレルの主人であったとき
彼が実際にしたことのために
毎日、絞首台に値した人間
ついに
彼がすることができなかったことのために★
絞首台の刑を宣告された人間
これを正当な憤懣とともに読む君よ
放浪者よ
彼の生が君にとって役に立たないと考えるな
慎重さがこの極悪人の狂った策略を許した

将来の時代に明白に
 証明と手本を与えることを
 計り知れない財産が全能の存在の眼の中では
 まったく取るに足りないものであるかを
 全能者が財産を
 一人の男に与えたとき
 ひょっとしたら
 世界が存続して以来
 最大の悪党であった男に。

★ この個所の解説を善良な読者は私に贈るだろう。墓碑銘への導入部はすでに、その解解のために必要であるものを含んでいる。

それを私は墓碑銘と言うだろう。君にとって土が軽いものでありますように *Sit tibi terra levis*. Charters, 君の死んだ犬と一緒に！

それは本当だ、われわれがすでに思い出させたように何か太鼓でたたかれた。しかしアーバスノット博士の大きな分別のある性格を観察するならば、－ 彼の著述は全然決まり文句商売ではない－、彼の詩的形式による証明は彼の力の何も失わない、そして散文の価値を持っている。

なぜそのような墓碑銘を教会墓地で読めないのか。墓地を散歩し、そこに石の歓迎の証明書を読むとき、われわれすべて人たちの母が彼女のもとに置かれた釘づけされた木箱に対して展示している証明書を読むならば、信じざるを得ないだろう、彼女はとても豊かな善良な母であるに違いない、将来いつか彼女自身の手段から欠陥を弁済する用意がある母であるに違いない、あるいは、多くの喪中の家によって完全に惨めにだまされる単純な母に違いない。私は告白しなければならない、墓碑銘を読んで当惑したことは稀ではないと、どれが一体栄光の側であるのかほとんどわからずに。というのは、本当に！ 墓が領収書の文面によれば受け取ったすべてを少しの割引なしに提供する世界よりももっと幸福な世界はない、あるいは、絞首刑にされないすべてが、同じ世界からこちらに引き渡されているようであるような見本－材料 [Probe-Gut] である世界よりももっと幸福な世界はない。

まったくわれわれのところでのように *Tout comme chez nous* [Nolant de Fatouville の *Arlequin, Empereur dans la Lune 1684* から] のゆえに、まだいくつかの行を。チャーターズの死の数日後に、言われているように、エジンバラの新聞に、泥棒、新しい本、万能薬について発行される手配書の中に、読者を元気づけるために、部分的には質問するために、部分的に

は質問されるために、次のような感動的な記事が載ったそうだ。

エジンバラ近郊の Stennihill, 1732 年 5 月 22 日★, 「昨夕 5 時と 6 時の間に, われわれの忠実な夫であり父である, Amsfeld 出身の故人の Franziskus Charters 大佐★★は 62 歳の年齢で完全な衰弱の後で彼の苦勞の多いが行動的だった生を喜ばしい永遠と交換した。宗教と祖国は彼の中に勇敢な擁護者を, みなしごは善良な父をそして貧困は飽くことのない慈善家を悼む。その地方を悲しみに包んでいるこの重い打撃をわれわれ, 彼の打ちひしがれた遺族よりも深く感じているものはいない。われわれの友人ばかりでなく, 世界もまたこの喪失に与える関心を確信して, われわれはすべてのお悔やみの言葉をしないように願う。

Helena Charters

N.Charters, Weems 伯爵夫人

- ★ そのようにあの年のジェントルマンズマガジンの中では場所と死亡の日は述べられている, 上のように 1731 年ではなく。
- ★★ どうして太鼓をたたかいて追い出された絞首刑に値する [pendabel] 旗を持つ人 [Fähndrich] がまだ pendabel な大佐として死ぬことができたかということは, ただそのような何でもできる人についてのみ理解可能である。

六万ターレルの収入の重さのこのチャーターズはこの汚い片隅に赴く, ただヨークシアからの娘 - 郵便馬車を待つために。彼の後ろの男はチャーターズがたいていは一緒に連れている John Courlay である, 特に家のための何かが調達される場合には, 一種の猟犬。この高貴な二人の唇の周りには愛撫するもの [Kosendes] の何かよりはむしろ本当に味わうもの [Kostendes] の何かが漂っている。それはとても吐き気を催させるたぐいのものなので, それだけでもう名誉を重んずる実直な男の手を刺激して, 動きを速め, 拳を握りしめ, 調べもしないでそれに殴りかかるようにさせることができただろう。彼らはまた無垢な存在に対して自身の姿を信用していない, そして自分とこの哀れな経験のない村娘の間に横領する手段を挿入することを必要とみなした。これが良い生まれの人 [Ihro Wohlgeborenen], 一人の老いた狡猾なおとりの鳥である, そいつはふだんは猥談小唄を口笛で吹いているか, そのような場合には素朴な田舎の森の調子を歌うすべを知っているのだ, 空の小鳥の自由な飛翔をロンドンのかごの方に誘うために。評判の良くない女, 縛り首にされないが, 絞首台での死よりは, 不名誉さにおいてはただ数段だけ少ない死, しかし他のすべての点においてはもっと厳しい死を死んだ。それはつまりあの日々においては一般的に知られていた, 嫌悪されたマダム・ニーダムの肖像画である, 通常 *Mother Needham* (母, ニーダム) と呼ばれていた。彼女は *Park place* にふしだらな家を経営していた, 私が間違っていなければ, *St. James's street*, 都市のメインストリートにぶつかる袋小路。彼女は母と呼ばれていた, 彼女の生徒

たちの徳と名誉が彼女自身のそれよりも気がかりであったから。この母をポーブもまた永遠化した★。彼は彼女を敬虔なニーダムと呼んだ。売春仲介の女、娼婦の女経営者を敬虔と呼ぶことは、そのように機知的な男にとってあまりに日常的な冗談であっただろう。否！ 彼女は本当に敬虔だった、そして敬虔さを、それが数千のひとによってなされているように、正しく、時計に従ってなした。彼女は毎朝毎晩祈りによって、最善の処方箋に従って自分を洗った、そして彼女は大きな洗濯物を持った。他の時には彼女は売り台・カウンター〔Comtoir〕にいた、あるいは仕事していた。ひょっとしたら、彼女はたえず教会もうでをする女であったと信じるひともいるかもしれない。そのようなことはポーブの思い付きの価値をもっと下げるだろう。というのは、たえず教会もうでをする女である、娼婦の女主人よりももっと日常的なものが何かあるだろうか。否！ 彼女は実際に彼女の祈りの際に時おり考えたそうだ、そしてそれは特別な相違 *differentia specifica* である。だからその思い付きはポーブにふさわしい。もちろん明白に彼女について彼女はしばしば泣きながら天に懇願したと言われる。彼女の商売を祝福することを、彼女が - 将来いつか、そのような恥辱から解放されて、- 完全に精神と真理の中で天に仕えることができるように。これはたえず教会もうでをする女であったか。一方この善意から出た願いは彼女に天によって拒絶された。彼女は捕えられた、さらし者にされた、そしてすでに二度目に（三回、彼女は手術に耐えなければならなかった）下層民によって、完全に類似したことわざ「私は裏切りを愛するそして裏切り者を憎む」に従って、とても虐待されたので、それが三度目の試みに至る前に、死んだ。 - それは絞首刑こされること以上のことだった。

★ Dunciad 悪人列伝 Lv. 323

ここに彼女は立っている。もちろん強く、風雨にさらされて。漆喰は落ち始めている、意味深長に彼女の頭に土台として仕えている飲食店の壁際でのように。一方他の刺激に逃走を可能な限り困難にするために、彼女は頭-抜け穴を - それを通り刺激は逃れるのがつねであったが - 絆創膏を貼ってふさいだ。そしておそらく色あせたものを再び新しくした。私は間違っているかもしれないが、私がこの鼻を見れば見るほど、眼鏡をかける強制〔Brillenzwang〕と嗅ぎたばこのことを考えることをやめることができない。ちなみに、顔が、特にすべての中で一番美味しい口が多くの地方での五十年間の実践が残したぞっとするような痕跡を覆い隠すためにすべての可能なことをしているようすが見られる。彼女の心をその哀れな娘の心に指先でもっと近づけるために彼女は手袋を脱いだ、というのは、これが起こる情熱的な文彩は、子牛の皮を通しては作用しないからである。そのようにその哀れな小鳥は磁気的な眠りの中に沈む、その眠りの間にその小鳥は誤って考えられた盛装婦人か

ごの中にはめこまれる、そのかごはしかしチャーターズの茂みへの裏口をもっているのだ。そうして - すべてが失われた! - そしてまた、これが起こっている間、われわれの良き老人は一つの宛先の研究をして降りることを忘れていた。だからここでもまた壊された商品はひっくりかえされたのだが、その哀れな男はそれの勘定を払わねばならない、その商品を司教区は元通りにつなぎ合わせないだろう。一つの推薦状はそんなに多くのことをすることができるのだ!

この最初の場面の本質的な内容についてはこれくらいに。装備についていくらか。右側の下の片隅の蓋の上に M.H. と記された一つの相当なトランクがある。それは娘の嫁入り支度の品を含んでいる、彼女の恥と墮落との婚姻の際の。ホガースはつまり彼の女主人公に世界の中の何も正当化できない一種の慈悲の選択 [Gnadenwahl] とともに *Mary Hackabout* の名前を与えたのだ。それは彼女の性格よりはむしろ彼女の将来の運命を表現している。それを彼はするべきではなかっただろう。英語の動詞 *hack* は女性について使用されると、女性に浴びせかけられるすべての可能な侮辱を表現している [ジョンソン博士は書いている、*hackney* 貸し馬車, *turn hackney*, あるいは売春婦]。 *Maria Jedermanns* [みんなのマリア] はまだとても穏やかな翻訳だろう、英語の言葉から離しておくのが困難な醜い副次的概念から自由な。その副次的概念には鞍や物 [Zeug] の概念も混じるそうである。芸術のそのような作品にこれは何を意味しているのか。そしてその娘が *Hackabout* という名前であるならば、哀れな罪のない父はなんという名前だろうか。ドイツ人たちが詩人たちの自分の主人公に対するそのような背信行為をまったく許容しないか、あるいは嫌悪とともに許容するということは本当に彼らの趣味にとって名誉となる。自分の主人公のために注意を引き起こすために小さな称号を買わねばならない作家に災いあれ。ホガースはこれをまったく必要としない。彼はその娘の物語をそのように貫徹する、そして彼女の生をたいそう明瞭に描写するので、最後に人々は彼女を *Hackabout*★とみなすことになるだろう。鞍職人がスザンナ自身を [ダニエル書。バビロンの、美しさと神を恐れる気持ちによって有名なユダヤ人女、入浴中に二人の不公平な裁判官によって姦通の罪を着せられるが、彼らはダニエルによって化けの皮をはがされる] をそのトランクにくぎ付けしたにしても。そうしてそれは正しいと私には思われるのだ。ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語ではそのような名前はおそらくまだ通り抜ける、そこでは人々はそれらの意味に慣れた、今やおちらこちらで洗礼名の価値を受け取り始めている博士 *Dokor* や修士 *Magister* の称号に慣れたように。多くの *Theophilus* という名前の *Theophilie* [ギリシア語で *Gottliebe* 神の愛] は、肉体となった *Benedictus* [祝福された者] という名前の「祝福されていること」と同じ足の上に立っている。 - スピノザ。 *Pandemchen*★★はひよっとしたら、ホガースが彼の意図を明るみに出そうとしたならば、最

も適切な名前であっただろう。その名前は私が知っている限りカレンダーの中には書かれていない – それは女性カレンダーであるに違いない、そして私はそれを読まない。トランクのすぐとなりには哀れなガチョウがいる、首の周りの宛名によってほとんど絞殺された（おおよそ馬に乗った説教者が彼の宛名によって絞殺されたように）。彼女の名前は、*To my loving Cosen in Tems-stret in London* である。（*Tems 路地の中の私の親愛なる従弟に An meinem liven Fetter in der Tems-Gase*）。通常のように姉妹的な結びつきの中のやや年を取った自由裁量の中の新しい正書法。いまこの *Pandemchen* はいったいどこへ行くのか。というのは、*Thamesstreet*, ロンドンの最も荒れ狂っている、人の群がっている街路の中の一つには、心と口を持った宛名を書かれていないガチョウを喜んで受け入れる親愛なる従弟 [live Fetter] が数千も住んでいるから。その哀れな動物はだから、良いマリーちゃん [Mariechen] やおそらくその馬車の中の君の哀れなヨークシアの同行の女たちのように宛名を書かれている、その同行の女たちはもっと進み続けようとしているが、彼女たちにも親愛なる従弟は欠けていないだろう！ さらに地面の上に一つの宛名が書かれた包装された箱がある。われわれはそれにただ言及する、オリジナルの作品の上のその宛名はここでのように故意に読むことのできないものであったと読者に言うために。それはだからただそのような機会には常に起こる一般的なことである。たとえば一つの箱、それは最後に字を読むことができない忠実な馬車の下僕が、あるいはそれと関係を持たない狡猾な泥棒が調達を引き受けるまで、忍耐とともに毎日その速い、とても速い *cito, citissime* の実現を待つのである。

★ *Kate Hackabout, Käthe Hackabout* は、1730年にはとても評判の良くない、公的な人間 [das Mensch. Mensch は18世紀に中性名詞、字義が悪化して使用され、社会的な名誉を失った女性でないにしても、低級な人物を表すとされていた。複数形は *Menschler*] だった。彼女についてはただ、彼女が公的な振る舞いのゆえに逮捕された、そして彼女の兄弟が同じ時に絞首刑にされたということが知られている。

★★ ギリシア語の *πανδημος*, すべての民族であるもの。その名前が該当する人たちでさえも彼らの運命を我慢のできるものとみなすだろう、*Venus Pandemos* も *Venus Uranis* と同様に存在していたということを彼らが知るならば。新しい神話学、明白に正しい神話学は弁解を与える。[*Aphrodite Pandemos* (大衆の), ホメロスによればゼウスと *Diane* の娘、アテネで崇拝される。プラトンによれば *Aphrodite Urania* に対して地上的な。ヘシオドスによれば、*Uranos* の海に投げ出された精子から生まれた天上的な女]

第二の版画

ここよりも高く *Pandemchen* は上昇することはない。それは彼女の銀の時代である。お茶

のテーブル、やかん、他の何であれすべてがこの金属からできている。彼女の黄金時代を彼女はヨークシアで失った - 黄金なしに。銀のもとでのロンドンでの銀の時代、そしてそれはずっと多くの価値がある。 - 若い娘にとって。そして何人の男たちがもっとよく考えるだろうか。おお、親愛なる黄金の時、世界における君の信用はもっと良いものであろう、君が君のものをただ一度でも哲学-[フランス革命後のインフレ時の] シニヤ紙幣や紙のお金よりももっと鳴り響くもので支払うならば。ライオンは残念ながら！ 君の道徳-子羊と遊ぼうとしない。そして君の道徳-黄金は - 君はそれを知っているか - 計算用ペニヒ [Rechnenpfennig: 線が書き入れられたそろばんの上であちこちに押される、計算のための補助手段] になってしまったのだ！

チャーターズによってひょっとしたら投げ捨てられて（というのは、彼のもとでは娘たちは大きなファラオゲームの台の上のカードの運命を持つのだ。それはほとんど過ぎ去ってしまった。しかしその代わりに彼女たちは新たに別の男のところに達する）。いま旧約聖書からの一人の金持ちの罪びとが彼女たちから暴利をむさぼった。彼女はここでポルトガルの寺院からのひとりのユダヤ人 [スペインとポルトガルから追放され、クromウエル下のイギリスで 1665 年に定住権利を得たユダヤ人] の愛人として現れる、彼は彼女を、見てわかるように、ユダヤの豪華さでもって扶養している、すべてが少し豊かで、少し重い、また時として、その娘のように少し中古のものである、しかし正直に言ってつねにいくらか価値がある。しかしこれについては次に。尊ぶべき人は尊べ。モリー・ハックアバウト [Molly Hackabout], だから前へ。

この人物を後生だから第一の版画の彫刻の絵と比較してほしい。ロンドンの路面凍結の上でどんなに早く足 [Fuß] から小さな足 [Füßchen。縮小語尾-chen がついている、性的なニュアンスがある] が生まれることができることか！ そこでそれらは、ゆっくりとした - 忠実な - 重いそして良い動物のように、繊細な紡錘状の巻き糸である、すべては平行で、静止と運動に対して無関心な。ここで彼女は座っているにもかかわらず、可動性のための生きている絵ではないか。エナメルから彫られたような、グレーハウンドの子犬、それは静止しているよりはむしろ三つの足の上に漂っている、そしてそれが使用 [verlaufen] できない力を少なくとも震わせて [verzittern] いる。常に空気と地面の間に分割されて。そして彼女の顔！ それは戯画か。 - どうして、おお！ 今なお人々は君を、善良なホガースよ、カリカチュア画家と呼ぶ、君を魂画家と呼ぶ、しかし自分を慰めよ。君をそのように誤解する人たちはとても普通の人間たちである。ギリシア的な石-顔、盲目の眼球を持ったそれを何かの隠された見本に従って墨の皿から苦労して舐めてまとめること、それを君は彼らと同じくらい良く理解しているだろう、そして数千の君の同郷人、すべて忘れられた彼らがそれ

を理解していた、一方君は残っている、そしてこれからも残るだろう★。

- ★ ホガースの芸術家性格については彼の生の中で詳細に論じられるだろう。テキストの中の発言は古代の、あるいはラファエロ、ドメニキーノ [Domenichino 1581-1641] やダヴィンチ、グイド・レーニ [Guido Reni 1575-1642 イタリアの建築家、画家] などの不死の作品の感情豊かな賛美者や模倣者に当たるのではなく、美のおしゃべり屋とぞんざいな仕事をする人の大群に当たるのである。彼らは吐き気を催させるような通人 [Connoisseur] 鼻かぜをベルヴェデーレ絵画館の中で捕まえたか、あるいは単にそこから伝えた、そしてすべての人にとって芸術と人間本性の真の知識を永遠に墮落させたのである。

私は顔に注意を向けさせた。それを完全に理解するために、われわれはこの場面全体を最初にちょっとした輪郭の中で与えたい、それから細部描写を付け加えたい。その娘はこのユダヤ人の愛人である、彼女のために、彼の売り台・カウンター [Comtoir] から遠く離れて、そしてまた彼の正直な妻から離れて一つの部屋を借りた、そこで彼は彼女を状況の判断に従って、一日を 24 時間と計算して一日のどの時間でも、訪問することができるのである。今朝彼は朝食のために乗り入れた。確かに乗り物できた、というのは、徒歩でのそのようなかつら、そのような上着の袖、徒歩でのそのようなシャポーバ [Chapeau bas 帽子を取る] をロンドンの新約聖書からの [街頭の] 不良少年はまったく我慢しないからだ。ロンドンで徒歩で人目を引こう [prangen] とするものはすべて、自分をさらし柱 [Pranger] に置くのだ、とりわけ都市の一番仕事で忙しい場所で。しかしそのだまされた詐欺師は早く来すぎている。手形の支払期限 [Sicht. イタリア語の vista から] が要求されなかつにしても、少なくとも予期されていた。そのようにこの手形の呈示 [Präsentation] は拒絶証書 [Protest] で終わる。金庫は惨めな状態である。夜一緒にいた愛人はまだ存在している。そして彼は、あえて支払いについて話すことができるまえに、両替 [wechseln] されなければならない。その後ろで彼は、ほとんどズボンなしにというのではない [サンキュロット、フランス革命当時の共和派の暗示] が、ドアの方にゆっくりと歩いていく、ドアはさらにちょうど悪い側に開く、その口から推測すると、まだ手馴れていないように見える侍女の保護のもとで。この退却を覆い隠すために (偉大な軍の司令官たちが勝利することと同じくらい困難であるとみなした一つの術)、モリー [Molly] は彼女の砲兵隊全部を動かさせる、そして一つの地雷を爆破する。彼女は貸方と借方 [支出と収入 debet と credit] のようなものの話し合いをした、そしてユダヤ人が破壊工作をされた地点に立つ瞬間に、地雷が爆破する。彼女は右の脚を上げ、銀のテーブルを踏みつける、ティーポットとカップ、そしてそこにあったすべてのものと一緒に、ひっくり返す。すべては鳴り響き、こだまし、反響する。熱い地帯 [Zona torrida] さえも、ムーア人は彼の同郷人、猿と一緒に震え、硬直し、あるいは逃げる。テーブルが倒

れるならば - そしてそれは確かに倒れるだろう！ - 今考えてみよ。ホメロスの中の盾は、その所持者が倒れるならば、トロイの荒野の上で、ひょっとしたら、そのテーブルのように鳴り響いただろう。そのように退却は覆われている、そしてポルトガルの寺院からの愛人は外へ。今、その顔へ。

まだ十代の娘の眼の中のもっと大きな厚かましき、情事のすべての術の中のもっと大きな熟練 - 隠れ場所の中のもまだ利用されていない貯えの意識とともに - それは他の仕方ですんなりにわずかの線で表現されることはほとんどないだろう。顔全体にしががない、際立つ影もない。しかし、「見て、ユダヤ人、私はあなたとあなたのガラクタをそれほど尊重しません、そこにそのがらくたはある」と話しているように。指をパシッとはじきながら正確に、どれくらい多く彼女がそのがらくたを尊重しているかが測定される。彼女が彼に示すのは指骨半分の少しの音である。右の眼は描写できないような嘲笑的なものを持っている。しかしその悪党はお金を持っている、そしてそれは、左の眼が明白に承認する一つの重要な品物である。その見せかけの行動はわれわれにとって誤解することのできないものだ、と私には思われる。その娘の右の翼部全体に戦争がある、そして左の翼部には平和がある、少なくともそこにその娘の不正が認識されるように見える。右の翼部の上ではひざが上げられている、実直さの上に少なくとも数ファウスト [Faust 10 から 12 cm] 高く、そして醜く、足の先が内側に位置するようになるほどに。腕は伸ばされている、カルト [Quart, 剣の交差ポジションの第四の構え] の中で指でパシッと弾くことを敵の鼻の近くに動かすために。まるでそれが嗅ぎたばこであるかのように。腕輪はない。それは夜どこにとどまったのだろうか。私はそれを時おりこっそりと立ち去る男のもとに [bei], そして彼の所に [an] 探したが無駄だった。彼女は上半身をもたせかけている、重みをかけた前進 [フェンシングの] の姿勢を支えるために、頭は後ろに反らして、軽蔑とともにその前進を支えるために。胸は突き出ている、もちろんとても攻撃的というのではないが、しかし右側の無遠慮はそれによって得をする。私はどこかで読んだことがある、包囲された敵を弾丸で責め立てるばかりか、また高度に侮辱させる仕方で、焼かれたガチョウや小麦パンを敵に遠方から槍の上で見せることによって攻撃したと。後者の攻撃は前者のそれよりももっと苦しめたとと言われる。それに応答することはできないので。そしてどの射撃も常に正確に当たったので。左側ではすべてはもっとおとなしい。腕でさえもおしゃべりさを証言しているだけだ。私は彼女を時おりそのように見た、敵が関係していないところで、そうではなくただ罪のない一番近い人が関係しているところで。

まだわれわれは頭部を離れることはできない。その場面全体が襲撃でなかったならば、本来ただ、疑い深いユダヤ人が早すぎる時の朝食にしてしまった朝食であるならば、私はその

娘の髪形をほとんど人工的な朝食とみなしただろう。壊された髪型は美しい顔に、そこからただ建築足場だけが取り去られた髪型よりももっとよく似あうかもしれない。この魅力の理由は深いところにあるに違いない、そしてまったく人間の本性の中に。というのは、女性の一番低い階級でさえも、髪型を後ろの方に差し込むよりも髪型を時おり顔の中から揺り動かすことが少なくとももっと儲かるということを感じているから。ローマの女たちはそれをとっくに感じていた。もちろん彼女たちは何を感じなかっただろうか。

Et neglecta decet multas coma. Saepe jacere

Hesternam credas ; illa repexa modo est.

乱れた髪もまた美しい、それが、親愛なる妹よ、くしけずられているかぎり。ただそのように見えることができるのだ、まるでお前たちがそのまま昨日すでに眠ったかのように★。「娘にそんなに魅力的に見えるもの、それをお前は昨日の髪型のかげらとみなすのか。汝、愚か者。そのように彼女はまさしく仕上げたのだ」。それは、眺望を美しくするためにイギリス式庭園においてまったく新しく建てられる**廢墟**である。[ゴシックスタイルの建築の流行、ストローベリーヒルのウォルポール [Walpole] の別荘をリヒテンベルクは 1775 年五月に見物した]。そこではすべての人間的な壮麗さや偉大さの**数世紀**後の虚弱さについての敬虔な気持ちを狙っている。ここでは瞬間的な計算 [髪の乱れ] は**年代順的**である、しかしただ一つの夜の中の神秘的な破壊の可能性を指している。この可能性はちなみに最高に不確かであるに違いない、さもないとすべては失われる。もっとも熱い感激でさえも吐き気を催すような冷たいかつらを掛ける台 [Perückenstock] のところで凍死する。－ 善良な若い女、彼女らの － 愛する － 夫のために悲しまないために、知性新聞 [絶対君主に仕えるために公式の出版物、その中にすべての通知が公表される] の中に真剣に参加した彼女たち (ここでは精神と真理が話題となっているのではない、そうではなくただベール *Flor* と黒が) を私はとても嘆く。天とあなた自身のためにその**言葉**を取り消しなさい。さもないとそこから何も生まれまいだろう。若い未亡人のもとでの黒とベール、それを人々はとっくに一つの壮麗な建物の焼き払われた箇所のもちろんいくらか陰気な照明として見た。その建物の最も美しい翼部が残っている。そして誰が火事の際に一番良い一番美しいものを救おうとしないだろうか。と、どの人も思う。彼女たちが喪に服さなければ、彼女たちはもう見られることはない、そうして、世界の中の**捕まえること**と**捕まえられること**による大きな結びつきはすべて － それによってすべてのものが方向づけられるのだが － ここで自分の力を失う、そして若い未亡人たちは消え、**同じ年齢のたんなるお嬢さん** [Mamsell] になる。それは良くない比較である、少なくとも**廢墟**によって獲得するものがない比較である。－ 魅力的な**廢墟**についてはそれくらいに。

★ オヴィディウス [Ovid] 愛の技法 III 153

モリー (Molly) の口が話すことあるいは話したことを表現するためにはわれわれは記号をもっていない。それを音楽の楽譜がしなければならないだろう、少なくとも四回加線して [viermal gestrichen 高い調子で]。彼女には耳が欠けている、すべてのこれらの機会の時のように、完全に。その代わりに口は二枚舌である - *Bilinguis* [二枚舌の] - ビリングズ [Billings 人名] - ビリングズゲート [Billings gate ロンドンの魚市場] - ビリングズゲート語 [Billingsgate-lanhuage]*。[この言葉遊びはフィールディング (トム・ジョーンズ) から] 一秒間に十の罵りの言葉, [不満で] 突き出した唇-拍子とともに、雷雨のように。神よ、お守り下さい! そのような雷雨と陶器のあられからお守りください! そのユダヤ人、彼はどのように振舞っているのか。真似をできないようにユダヤ的に。彼は彼の美しい女の四度も加線された高音部楽譜を深いゆっくりした鼻音の低音で耐える。そしてその点で彼は正しい。第一ヴァイオリンは、彼自身が速い拍子を提示しようとするれば、跳躍するだろう。それを彼は用心している。彼は彼女を終身年金と愛の年金 [Leib- und Lieb-Rente] の上にもっている。もちろんこの朝のための利子は済んだ。しかし資本は保持されなければならない、クライスト [Ewald Christian von Kleist 1715-1759. 軍人, レッシングとの友情] の

人々は声を見るが、声を聴かない

の文が言おうとしていることを知らない人は、まるで彼がこの口とその隣人である共鳴-鼻に耳を傾けようとしているかのように、少なくとも振る舞いなさい。そして彼はすぐにきつとそれらがどのように響くかを見るだろう。この美しい頭の中ですべては驚愕と驚きと期待である。切り整えられているわけではない自分の髪は人工的な髪の重みのもとで逆立つように見える。それによって愛の神は東洋的な青ざめた色の小さな束、魅力的であることはできない束を額の上に押し上げる時間を獲得する。*Hesternam credas* 乱れた髪もまた美しい、それが、親愛なる妹よ、くしけずられているかぎり。ただそのように見えることができるのだ、まるでお前たちがそのまま昨日すでに眠ったかのように。哀れな悪党! 微笑みなしに彼は見られることはない。というのは、驚き自体は、税を支払われていない商品 [verlizenten. Lizent は 18 世紀に税金のこと] の喪失あるいは禁じられた収益の喪失が原因である場合には、滑稽になるから。そしてこの場合はそれである。彼が機械的につかむ様子、五本の指で (それは六本の指であることができただろう★★), その指の一本の上にはエフライム [Ephraim. ベルリンの Ephraim 地区, 硬貨の小作人。それに倣って民衆の口は、プロイセンによって七年戦争の間、鑄造された粗悪な銀貨を名付けた] の祝福が、私が言うのは、ベ

ルリンの宝石商の祝福がありありと見える。彼が保持しようとするものは銀である。しかしテーブルは、それが前に伸ばす脚をもっていなければ、確かに倒れるだろう。脚を持っているすべての生きているものの特権によってもほとんど座席の中で自分をささえない椅子の所有者のように。一つのティーカップが救われている。それまだユダヤ人の右手の中に漂っている。しかし他の物たちは！ 人々はあえてそこを見ようとしない。混乱と困窮がいたるところにある。すべては上げられた膝からの逃走中である、そして自分を救おうと試みている。砂糖壺と皿と恐らくミルクの缶、それらは最初は船から飛び降りることをあえてするが、今 – もはやない！ それらの後ろから小さなふたが飛んできた、そしてすでに空気の中の同じ運命を見ている。もう一つ別のふたはそう見えるように、他の物を飛び越えるために覆いの上で殺到をする – 同じ運命の方に。ティーポットは一番落ち着いているように見える。致命的な跳躍をあえてする前に、それは最初にそれがかなりの距離をまえて投げたふたから解放されるばかりか、またそのあとすぐに自分の煮えたぎるほど熱い重荷からも解放される、とりわけ、まっすぐな道で *recta* 彼の主人の長靴下の中に、そこからさらに靴の中に。そのふたの性急な飛行から判断すれば、そして人間の皮膚を作る仕方はまったく時間がかかるので、そのふたはおそらくその終わりの前に一注ぎを速めるために、引き返すだろう！ ティーポットと話がされるならば、私はそれに叫ぶことを知っている、「それは君の信義のないいたずらだった、それが遺産に似て見えることが多ければ多いほど、一層信義のないいたずら。お前が異なった風に完全に砕けること [Zerschellung] なしに逃れるならば、注意せよ、君が少なくとも君の気まぐれのために、君の主要な終わりに、悪くにかわで貼り付けられて [geleimt], あるいはまったく切断されて [verstümmelt]. この言葉はリヒテンベルクの妻の「修正」である。「私は *verstümmelt* の代わりに *beschnitten* を置いた、彼女は *beschnitten* をいかがわしいとみなした」と 1795 年 6 月 15 日の Ludwig Christian L への手紙から], ユダヤ人-奉公人にとって君の将来の奉仕の際に滑稽にならないように、注意せよ」と私は言うだろう。

- * イギリス人にとってあるいはイギリスを知っている人にとって、この漸層法 [*Climax*] は理解できるものだ。ドイツ人の読者の故に私はただ以下のコメントをする、*Billingsgate* は本来ロンドンの魚市場である、それを大部分は女たちが世話している。魚売りの女たち [*Poissarden*]。並外れた饒舌とすべてを越えていく舌の流暢さの民衆。これよりももっと良い代表者を寡黙な魚の種族は、人々が必然的に話すことができなければならぬこの世界の中で受け取ることができなかつただろう。
- ** 実際にホガースは若いころ、商人や芸術家のために店の広告 *Shop-Bills* を [例えば、*Ellis Gambel & Hardy* のために] 彫っていたとき、商店の祝福を表すべき人物を六本の指を持つ腕で表現した。[*Ellis Gambel's Shop Card 1720* の上の天使は六本の指を持っている] 人々は当時それを間違いと言った。しかし私はキツネを信用しない、たとえ彼が若くても。しかし私はこれがつじつまの合わないもの

とは思わない。ただ数字が10を維持し、別の手がだから4を得るならば、前者は取れ一手 *Nimm-Hand*、後者は与えよ一手 *Gib-Hand* であろう。そうしてすべては正しく関連しあっている。

娘がちょうど言ったばかりのことが、彼女が指でさし示すものよりもはるかに大きかったに違いないということは、ユダヤ人の化石のようになったことから見て取れる、その化石状態から間違った端に注がれた熱いお茶は彼を起こすことができない。それをホガスはうまく作った。というのは、本当に、それを感じないひとはまたおそらくドアのきしむ音も聞かない、そして一人の狡猾な幸福な恋がたきの足音をもっと聞かない、その恋がたきの置き忘れた靴を人は後でもって行ってやるのである。

この版画の上でヨーロッパ人のうちで生きているものは、そのすべての素晴らしきもののある墜落するティーテーブルのパチパチという音に注意を払わないように見える。そのうちの三人はその際に何も失わない、そして第四の男は喪失のあまり何も聞かない。熱い地帯からの二人の指導する愛の神々、猿とムーア人は二つの彼らの手にゆだねられた心の、支え合う悲しい運動をいっそう強く感じる。そのように組み合わせられた恋人たちのとなりに猿を見ると、猿のところに矢と弓を考えないことはほとんど可能ではない、彼は逃げる。その哀れな奴はちょうど母の被り物 [Kopfzeug] で遊んでいた。ギリシアの理想 [アモル-アドニス、猿-ラオコーン] - 彼はそれの猿である - が父親的な意図で母のところに来た戦士-神 [軍神アレス、アフロディーテの愛人] の兜で遊ぶように。黒い愛の神! 彼の羊毛の髪は逆立つように見える。ひょっとしたら彼の西インドの兄弟たちの運命 [奴隷商売と黒人の搾取の暗示] についての自然-悲しみの中で彼は驚きとともに、彼はまたここで - 洗ってきれいにしなければならないことをほとんど見ない。この姿は奇妙である、そしてその姿の表現はほとんどことわざ的になった。ギャリックの姿は威厳のある姿よりは人間的な姿に属していた、そしてギャリックの魂全体は特に顔の中に表現されていたのだが、彼はかつてシェークスピアのベニスのムーア人、強い情熱的な雷のようにとどろくオセロを劇場で表現しようとした [1746年コヴェントガーデン]。それはしなやかな魂の身体的な塊なしには演じるのが不可能な役である。彼はだからすべての仮面のもとで必然的に失わなければならない、特に彼の昼からおよそ夜を作る煙突掃除人の仮面のもとで。彼が現れると、悪名の高い、辛辣な、だらしのないクイン [Jamews Quin 1693-1766]、第一級の喜劇俳優は叫んだ、*Here is Pompey, where is Tee-Kettel?* ここにはポンペイウス★がいる、やかんはどこにある? 後でもう一度ギャリックはこの役で登場することをあえてしたそうだが、(そのようなことを機知ある頭たちのあいだのある時は礼儀作法がある時は戒厳令が要求する) それから二度としなかった。

- ★ ポンペイウス [M.G. Pompejus 前 106-48]。イギリスではムーア人に与えられる一つの名前、われわれのところでは、キジ狼の狩猟犬にだんな様 [Mylord] の名を与えるように。

その忍び足で去る男をわれわれは忍び足で去らせたい。人々が彼を見るだけで充分である。その道に対して、彼の逢瀬の感傷性についてただ一つの発言を。ここには、このアドニスの方に舞い飛んで来て、退却を優しい翼で覆い、最後に隠れ穴の中にせせら笑うて入れるアモルは見当たらない。その代わりに、こん棒やフルーレ [Stoß-Degen, フェンシング] が腕の下に現れる。そのようなものは目に見えるのだ。そのようなかごの中に這って進むものは常に、自分にぶつかる最初のもは別の雄鶏であることを予期しなければならない。彼の帽子の上の帽章 [Kokarde] は見落とされることはできない。彼はだからここではただ見張りをしている。

猿のすぐ前に一つの化粧室がある、おそらく彼の逃走はその中に進む、彼は下を這って進みたくない、彼が危険を少なくともは見ないところで。そしてこのことは周知のごとく猿と子供たちにとって、他にまたここに属しているものにとって確実さと同じことである。テーブルの上には鏡がある、名刺一組と一つの仮面がある。ひょっとしたらモリー [Molly] は前夜、仮面舞踏家から戻ったのだ、そして新しく知った男を連れてきたのだ、彼は後ろで逃亡中である。右側の下の隅にあるものは少なくとも投げ出されたドミノゲームに似て見える。本当に、仮面舞踏会に対する、少なくともロンドンのそれに対するもっと大きな警告は存在しない。そのような人間たち [Menschen] (Menscher [中性名詞の Mensch の複数形。下級の人物を意味する] と私は言いたい) は、まっとうな人間たち [Menschen] と完全な平等のもとに同じ遊びの中に入れられるのだ。一つの軽い覆いによって！ そこから決して良いことが生まれることはできない。われわれはみんなあの世界における平等を希望している。ここの世界ですでに平等を探すことは至るところで、ドミノゲームにおいても危険である、というのは、平等は、ドミノが投げ出されても、常に終わるわけではないからだ、そしてそのような終わることに短い幻想の魅力全体が基づいているのである。

後ろの壁に二枚の絵画が掛かっている、それらが壁紙の中に編み込まれていなければ。というのは、少なくとも戸口側柱のはめ板が一つの絵の上に消えていくからだ。しかし厳密な遠近法はホガースの事柄ではない。ドアに一番近い絵はニネヴェの町に向かい合っている予言者ヨナを表している、彼が、虫の食ったかぼちゃがもはや防ぐことができなかった太陽光線束と殴り合っている [boxen] ところ。[「しかし主は朝の虫を手に入れた。朝焼けが始まったとき。その虫はかぼちゃを刺した、かぼちゃは腐敗した。しかし太陽が昇ったとき、主は薄い東風を調達した、そして太陽はヨナを頭から刺した、そして彼は弱くなった。その時、

彼は彼の魂に死を望んだ、そして言った、私は生きるよりもむしろ死にたいと。ヨナ記から」。そのようなこぶしはイギリスでは言葉の価値を持っている。別の絵はダヴィデ王を表している。彼の華麗さの中ではなく、彼が契約の聖櫃 [十戒の石板を収める] の前から踊って来て、窓から見ているサウルの娘のミカルによって軽蔑される場所。[主の聖櫃がダヴィデの町に来たとき、Michal, Saul の娘は窓からのぞいた、そしてダヴィデ王が主の前で飛び跳ね踊るのを見た、そして彼を心の中で軽蔑した。サムエル記。彼女の不遜のために彼女は神によって不妊でもって罰せられる]。聖櫃 [イスラエルの民の移動聖物] は牛によって引かれる、牛たちは、聖書にあるように [彼らが Tenne Nachons に来たとき、Usa は手を伸ばし、神の聖櫃をつかんだ、牛たちがわきに離れていくので] 離れる [austreten], そして聖櫃★は落ちる、あるいは落ちようとする。Usa はそれを支えようとする、そして司祭の帽子の一人の男がこの奉仕のために彼の胸に短剣を後ろから突き刺す。聖書では単に次のように書かれている、そして主は彼を打ったそして彼は死んだ。[そのとき神の怒りが彼の上に落ち、神は彼をその不遜の故に打った、そうして彼は聖櫃のもとで死んだ]。ホガースが古い聖書を現代的に描こうとしたのは、残念だ。しかし気をつけよ、良き友よ、と私は思った、君は、日曜日の信仰と週日の理性を関連させる危険な橋の上に立っている。その二つ折り判の本の一綴りも君は理解しない。それがまだ何か力を持っているにしても、つねにその大量さによって尊敬すべきものでとどまる二つ折り判の本に対して君の版画は何をしようとするのか。だれも君を聖櫃の前の Usa のように、後ろから殺さないだろう。しかし君が予期する前に、とても熱いものが君の靴の中に、ティーテーブルのもとの娘の靴の中のように、注がれないということ、私は一ペニヒでもって保証したくない。「君の棧のもとにとどまれ」は、その上に地面が静止する一つのことわざである。[靴を越えていくことを靴屋は判断すべきではない、とギリシアの画家 Apelles の言葉]。この真の言葉こそ、ここでわれわれに限界を置き、別の絵の意図をまったく完全に無視することを強いるものである。小さな預言者の平明な予言の解釈も最大の学者にとってとても多くの困難をもたらすので、一匹の狡猾なキツネがそれらについてするととも作為的な乱用は一人の取るに足らない作家にとってどんなに多くの困難を持たないだろうか。一方でただ一つの言葉、すなわち、ヨナは起こらなかつた災いについて嘆く、そして日射病 [Sonnenstich] を恐れる。光の刺すこと [Lichtstich] は少なくともここでは恐れられる、とりわけユダヤ人の頭の中の二つのダイヤモンドから。この絵についてはもうこれ以上言わない。この絵については一人のもっと元気のいい解説者はひょっとしたらもっと多くを言うことができるだろう、そして言うだろう。試みようとするものは予言者ヨナの第四章、第二サムエル記の第六章 [王たちがダヴィデ王のようにへりくだることをしなければ、おごる平家は久しからず的な、王たちの高慢に対するいましめ]

を調べてみるができる。まだ同じ壁には新約聖書からの男たちの二つの銅版画が掛かっている、かつらと低い帽子 [Chapeau-bas] を身に着けた男たち、だから学者たちの。一番高いところに掛かっている人は最初の印刷の中では有名なクラーク博士 [Samuel Clarke 1675-1728 イギリスの神学者、ニュートンの自然哲学の信奉者で、ライプニッツとの文通がある] であった、そして一番下の人はウルストン氏 [Thomas Woolston 1669-1731 理神論の代表者で、新約聖書の奇蹟をアレゴリーと比喻として説明した] である。後者はユダヤ人に対してキリスト教の弁護を書いた、そして前者は、ここで推測のための素材を与えることができるさまざまなものを書いた。彼らはしかし言及されないうままにとどまらねばならない、ホガースが彼らの名前を消すことによって、彼らの言及されたくないという願いを明白に認識させたので。

- ★ われわれが読者に原稿を見せることができるならば、彼らはわれわれがここで奇妙な観念-連想から契約の聖櫃 [Bundeslade] の代わりにやかん [Teekessel] と書いたということを見出すだろう。おそらくわれわれがここで頻繁にティーテーブルについて利用した *fällt, fallen* [倒れる, 落ちる] という言葉も責任がある。

第三の版画

モリー [Molly] は落ちる - 落ちる！ ますます速く！ これはわれわれの芸術家が表現している六枚のうちの彼女の旅の第三の駅である。その旅の三分の二はすでになされている。第二の駅からわきの方への快適な混乱を持った夏の道が存在した。もちろんすべての食器類にとってそうであるわけではないが、恥ずべき年代記 [おそらくフランス王たちの愛人の暗示] は一方で、そこから出発し、うまく到着した女たちについて、それどころか奥方について語っている。恥ずべき年代記？ - おお、尊敬すべき歴史、とても古いわけではない歴史も、この郵便局 [Posthaus] から最後の逗留をした副-女王 [おそらく Nelson の愛人であった Emma Harte の暗示] を知っている。

しかしここではすべてが失われた！ 彼女は、バゼドウ [Johannes Bernhard Basedow 1723-1790 神学者、啓蒙教育学] がかつて冗談の中で比喩的に自分自身について言ったことすべてを真剣に成し遂げた、そして観衆と結婚した。彼女はここでは、第三の位階の燃えている心のための小さな消火施設のもとの主人公として現れる。なんと落ちたことか！ *Fuimus* [fuimus Troes. われわれはトロイの人だった, ウェルギリウス「アイエーイス」から], 至るところに！

ふだん、われわれは舞台の装具の描写を最後に取っておく。装備はそこでは些末なことで

あった。人物たちは家具の価値を説明していた。ここでは家具が人物を説明しなければならない。完全に魅力に欠けているわけではない一つの若い女性の身体はある時は飾られている。その身体を飾らないものをその身体が飾る、そして両者に、人物と衣服にあちらこちらに欠けているものを別の性の愛しい青春は見ない、あるいはそれは容易に一つの布切れで覆われる。その布切れを人は、それを全体のための大きな利益とともに喜んでなしで済ます個所から奪い取るのである。そうしてそのような生き物はまだ長い間一緒に歩む。常に[immerweg]目に見える衣服の不足を目に見えない衣服の費用で繕う、そして美の衰退を実直さの費用で繕う、最後に全体が繕われ [geflickt], あるいは誤って繕われ [verflicken], 自分の修復を一つの短い死の後で再び受け取るまで。そして Hackabout として死んだものが母ニードム [Needham] としてふたたび現れ出るまで。しかしお金がばかみたいに安くて、それ故にすべてが恐ろしく高価な、ロンドンの住居とその家具を繕うことはそんなに容易ではないし、そんなに必要ではない。というのは、部屋の中から人々はそのようなものを路上の目の前に持っていかないからだ、そして眼の人々が道路から部屋の中に運ぶものは、聖別なしに、幻惑なしに来ることはない。

舞台はドルリーレーン★の中にある。左手の下の隅にある★★錫製のジョッキから見られるように。その小さな部屋は高いところにあるに違いない、というのは、ここで見られるほど多くの空を部屋のドアを通して見ることは、ドルリーレーンにおいてはおそらくただ煙室のとなりにおいてのみ可能であるから。それをまた部屋のドアの向かい側の窓が証言している、そこでは光は決してガラスが欠けている個所、臨時に [ad interm] いくらか空気が入れられた個所を通して入ることができない。その舞台はそもそも自分の光を主にただ、そこからわれわれが中を見ている側面から受け取る。そしてホガスはそれを通して光が来ることができる穴を考えることを完全にわれわれの建築的な能力にゆだねる。 — 何という変化か！ここでもまたお茶が飲まれる、しかしどのようにして？ 明らかにカップとティーポットが見えなければ、ここでは靴が修理されていると思われるだろう。軽い小さな脚の銀のテーブルはもうない、その代わりに雄牛を担うことができるようなはきものを持った別のテーブルがここに植え付けられた。おそらくそのテーブルがここで果たす仕事はそれが果たさなければならぬ唯一の仕事ではない。その強い、その際にいくらかずんぐりした形からそのテーブルが時おりは肉をたたくことに使用されることはありそうである、あるいは洗いや桶のための台座として、あるいはさもなければ宿を見つけることができない疲労した客のための台座として仕えなければならないということはあるしありそうである。銀のテーブルをひっくり返した同じ脚と同じひざは一方でここでもまた再びある、しかしテーブルをひっくり返そうとしていない。むしろ脚はテーブルの木組みに自分を支えているように見える。銀のやかんもなく

なった。そして惨めなブリキの測量容器 [Maße] に場所を譲った、オナガザル [Meerkatze : 海の猫] が Lamdkatze [陸の猫] に場所をゆずるように、侍女と黒人が侍女のいくらかを、黒人のいくらかをオナガザルのいくらかを同時に持っている雑種に場所を譲るように。テーブルの上にはただ一組のティーカップが見える、それから別の一組の上半分が見える、その中にはおそらく砂糖が入っている。そして一つの小さなパン、一つのナイフ、そしていくらかバター。それに一人の作家が皿を供給した。すなわち、その半分が横たわっている全紙の紙はロンドンの司教ギブソン [Edmund Gibson 1669-1748] の教会書簡 (pastoral-letter) の一部である、その誠実な男が当時の彼の教区にとっても親切に書いた書簡。それらは明瞭に書かれた宛名にもかかわらず、香辛料小売商が最後にそれに切手を貼り、その処理を引き受けることに一致するときまで正しく役所に到着しなかった。

* ロンドンの一つの長く狭い道路、そこには世界的に有名な劇場があるばかりでなく、そのほかに銅版画が表しているそのような舞台が数百も集まっている。これらの舞台の上では年から年中、とても有名な作品が上演される、それらの作品は通常、主人公の病气、ドルリーレーン・フィーバー (ドルリーレーン高熱 *Ague*) で終わる、しかし殺人、殺害で終わることも稀ではない。そのとなりのとても多くの作品でのように - 世界的に有名な劇場での。

** その言葉は *John Dry (?) in Drurylane* である。第二の言葉はわれわれの手写本の中ではとても不明瞭に書かれている、しかし第二の文字は *c* よりむしろ *r* であるように見える。われわれが目の前に持っている複製は、そうしようとしても、信用されないだろう。というのは、それらはこの難しい箇所にも何も持っていないからだ。われわれはそれゆえに判読に進んだ。Dry は英語では明らかに乾いたと同様に喉が濁いたを意味している。このホガース語 [Hogathisch] が補修されているかどうかはいくらか強制的に容易に決定されることができよう。

ベッドの隣に一つのみすばらしい編み物椅子、それにもかかわらず部屋の中で唯一の椅子、小さなテーブルが朝食の際に、あるいは洗い桶の際に仕えるとすぐに。それ自身は今一種のテーブルの仕事に取り掛かっている、そして燭台に高められた一本の瓶と前夜とても低くされたスープ皿を持っている。そのスープ皿は、今から名誉とともにただベッドの架台の下で仕えることができるほど低くされた。椅子の背もたれの上に昨夜の小さなコートが投げかけられている、おそらく偽の金のついた赤い布、それは素晴らしく見える、とりわけ隅の第四の大きさのガスランプの好奇心と空想を鼓舞する光線のもとでは。そのようなものが掛かっているところで、すべての位階のロンドンのならず者たちは太陽光の中の鏡の前のひばりのように罨にはまるのだ。

この椅子の向かい側に、からの黒ビールのジョッキのもとに、化粧品箱 [Toilette] がある、山羊の脚の代わりに象の脚を持った化粧品箱。それは本来はこの部屋のすべてのようにあらゆるものに仕える折りたたまれた翼部付きのテーブル [Flügelisch] である。鉢自体よりも

もっと新しい一つの部分をもったポンチ酒鉢の方に、一つの三角形の鏡の断片。それもまた全体よりもっと新しく、立てかけられている。両者、すなわち部分と断片は芸術ではなく偶然の作品である。前方にここにもまた外部からの噛み傷に対する戦争のための武器★がある。内部からの噛み傷に対して - ここではそれから自由であることはないだろう - 鏡のすぐとなりには武器がある、火酒の小さなグラスと火酒の測量用杯。その小さなグラスは、見てわかるように、同様に恐ろしい身体切断によって強制されて、それが空ならば、逆さまに立つ運命を持っている、それが満ちていれば、別のものによって支えられる運命を持っている。それは通常は人間においては反対の事情にある。グラス [es] は人間に仕える、そして人間はグラス [ihm] に仕える。さらに周りにあるものは、おそらく化粧用器具である、ヨークシアではひよっとしたら健康な自然な果実でとどまったであろうその顔をその早い時期の崩壊の後でまだ短い間、欺瞞的な蠟製の果物に変えるために。小さな手紙、*To Md Hackabout* が引き出しの中から突き出ている、おそらく思いを吐き出している原稿の中の小さなため息。

★ 第一分冊、「巡業する女優たち」を見よ。

後ろの壁に、ドアの隣に、すべての種類のを掛けるために輪のある一本の結び紐が見えるが、今は何も掛かっていない。それはコート掛けであるように見える。また一つの *Fimus* 「われわれはトロイの人だった」。ひよっとしたらそれのかつての内容は単に質屋によって保護されているか、あるいは部屋の隅によって分散させられている、あるいはそもそもただ瞬間だけのために借りられているものを短い間だけ掛けるために仕えている★。

★ ロンドンでは衣類に対してお金を借りられる普通の質屋のほかにも、お金に対して衣類を借りることができる質屋も存在しているとわれわれは断言された。後者の質屋によって創意に富んだロンドンは路地を早朝までランプによってばかりでなく、またプリンセスたちや盛装の婦人でもって照明を施すことができるようにされるのだ。それは素晴らしく見える、そして模倣に値する。

その婦人の経済的な状態に光を当てる家具についてはそれくらいに。そこにまだ散らかっている他のものは横たわっている、ぶら下がっている、そしてその女主人公に一段階もっと近く関係している他のものたちの解説に仕えている。そしてそれらの意味はその人物の歴史と一番多く織り込まれている。その人物の歴史に対する読者の好奇心をわれわれはいずれにしても、われわれが恐れるように、あまりに長く張り詰めたままにしておいたのだった。

午前の 11 時 45 分 [*Drei Viertel auf Zwölf*] である。そして朝食がされたばかりなので、まだとても早い、非-時間 *Unzeit* の時間★によればおおよそ七時。われわれの女主人公は起き上がった、そしていくらか疲れて重く左腕で身を支えている、左手に彼女は腕時計のバンド

の一番外側の端のところで時計を持っている，頭部を聞き耳をたてているように傾けて。おそらく忠実な時計の針は時間を繰り返している。時間を？ ああ残念ながら，ちょうど時計が打って告げただばかりの惨めな 11 時以外の何もない。世界全体のすべての時鐘付き懐中時計が君に何の役に立とうか！ 君の実直な父親の戒めが再び新たにされて君の魂の中に鳴り響くそのような時鐘付き懐中時計は君にとってははたしなくもっと多くの価値を持つだろう。しかし時が告げられるのを聞け。多くが失われた，しかしすべてが失われたわけではない。正義は目覚めた，そしてすでに君の頭の上に漂っている死の打撃をまだ押しとどめている。ドアが開かれる，そして Sir John Gonson**が彼の従者とともに部屋の中に入ってくる，そして彼女は逮捕される，ひょっとしたら時計は昨夜の獲物だった，そして盗まれた男自身が最初の原告だった。魅力的な生き物，その上の半分はここではペチコート（布切れの山の上に支えられて現れるのだが，彼女はおそらくこの施設の女大統領である。彼女の鼻は苦しんだように見える。それが内的な火事による心の要件 [おそらく梅毒] においてか，あるいは affaire d'honneur [名誉のかかった争い] の中においてなのか - その場合，鼻は目と歯のために介添人をつとめた [sekundieren] -，それはわれわれには知られていない。ここでわれわれは読者にいくらかの涙を請わねばならない，読者たちをとっても多く喜ばした哀れな奴のために，しかし今はいなくなってから長くたっている哀れな奴，フィールディングの「トム・ジョーンズ」***の中の陽気な滑稽な半分ラテン的なパトリッジ (Partridge。ヨーロッパヤマウズラ) のために。というのは，フィールディングが断言しているように [[この妻はとても愛らしい姿というのではなかった。彼女が本当に私の友人，ホガースの版画のモデルになったかどうか，私は未決定のままにしておく。しかし彼女は作品「情婦の道」の第三の版画の中で彼女の女主人にお茶を給仕しているあの若い婦人に瓜二つである]]，殉教者のそんなに評判の良くない家の名誉は，このヒラメ****の顔から彫られていたようである！ 君の熱狂的ではない苦悩から視線を離せ，良い奴よ，というのは，私には思われるのだが，私は君のお好みのリフレインが私の上でささやくのを聞くのだ，そのリフレインでもって君は多くの観察を終えた，そしてそのリフレインを君は常に適切であると思っていた，おそらく君がそれを理解しなかったが故に。

Infandum, Regina, jubes renovare dolorem

君は命令する，女王よ，言語に絶する苦痛を名付けよと [ウエルギリウス『アイネーイス』から]

* 第一分冊「真夜中の現代的な会話」を見よ。

** アイルランド氏が常に書いたように，Gonston ではない。Sir John Gonson は大きな公正さをもった当局の人物だった，特にいかがわしい家の抑圧を心掛けていた。彼は有名な Fielding [Henry

Fielding 1748-1755 年, 判事] が短い期間, それからその義理の兄弟の Sir John Fielding [-1780] が長く, 彼の仮面がはがされたにもかかわらず, 名声とともに占めていた重要な地位 [仲裁裁判所判事] を占めていた。今私が間違っていなければ, その地位は Sir Samson Wright によって同じ信用とともに管理されている。これらの名声のある人物たちの主要な仕事はすべての種類の犯罪者たちを部下によって探し出させることである, あるいは彼らが部下たちの前にもたらされたならば, 尋問し, 状況の判断に従って彼らを釈放するかあるいはオールド・ベイリー [Old Bailey] での本来の裁判のために管理下に置くことである。Sir John Gonson の熱意と活動は当時, いくつかの詩の中で賞賛された, その中には成功したサッフォふうの頌詩 [終わりの短い項をもったサッフォー的な詩節の中の三行詩] もある。Loveling 氏の *Ad Joannem Gonsonum*, 騎士 [equitem] に。それは次のように始まる。

Pellicum, *Gonsone* animosus hostis

Per minus castas *Druryae* tabernas

Lenis incedens, abeas *Diones* Aequus alumnis

すべての娼婦の気性の激しい敵, Gonson, Drurylane のあまり純潔ではない飲み屋の中で君は売春仲介の女たちを待ち伏せする, ビーナスの弟子の女たちを落ち着いて回避する

これがわれわれの芸術家に最初の大きな好評を手に入れさせた版画であるということは言及されるに値する。この版画が現れた日に会議が大蔵省であった。その卿の一人が版画を道の途中で買い, それを持って行った。他の人たちは Sir John Gonson 氏との大きな類似に驚いた。そうして彼らは会議の後でそこへ行き, その作品を買った, そのように Hogarth の幸運が作られたのだ。

★★★ トム・ジョーンズ *Bock II Chap.3*

★★★★ おそらく古代人の *Rhombus* [菱形], 周知のようにとっても美味な魚。ひょっとしたらエグ [Rochen] との比較がもっと適切だっただろう。というのは, そのもとには, エイを商いする美しい女性たちのように見える種 [Species] が存在するそうなので。

今もっと理解できるものとなるその版画の他の装具について。ベッドの架台の頭部壁に, あるいはむしろ仕切りの頭部壁に - その下にベッドの架台があるのだが - , ベッドの天蓋と地面の間に恐ろしい尾 - 懲罰用の鞭 [Edukations-Besen 教育ほうき] - のある彗星が漂っている。われわれは彗星についていくらか後で考えよう。それがこの版画の中のすべての生きていないもののうちで, 懐中時計 (時計もまた死ぬことができる) の次に見る人の眼を引きつける最初のものであるにもかかわらず。われわれは彗星を恐ろしいと呼んだ。単に言語慣用のために, というのは, 道德の蒼穹のこれらの彗星たちはあのシステムにほとんど害を与えないからだ, 空の彗星が世界のシステムに害を与えないと同様に。ニュートンが, その尾を持った空の彗星がひょっとしたら強化する蒸気 [Duft] をシステムの中に扇いで入れるかもしれないと推測したように, その大量の悪を持った道德の蒼穹の中の彗星が世界からぞとに向きを変える [hinauskehren] というのも推測されるばかりか, 幾何学的に証明されるだろう。彗星をほうきとしてではなく, 単に木の小枝 [波の木 Wellenholz]

の束として見るならば、それらの有用性は見通すことのできないものであろう。というのは、学校で二つの耳を通してわれわれの中に嵐のように流れ込む授業と学説の激しい川の中から何が生まれるのか人は問うことができるだろうか、もし人がその川に対してそのような柴の束 [Faschinen] でもって別の端にふさわしい時に建てなかったならば、その川がいきなりまさに再び氾濫しないように、妨げるために。

しかし教育学的な柴の束 [鞭] あるいは博愛の塵払いがどうして中に、ちょうどベッドの壁のところに入ってくるのか、と人々は問うだろう。私は告白しなければならぬが、その問題は本当に容易ではない。私はそれがもっと難しいことを願う、あるいは、とても難しいので、それが解決されることがまったくできないということを願う。おお！ それは、レンガ積み工が立方フィート [Kubik-Fuß] に従って支払われるように全紙に従って支払われる作家にとって素晴らしい題材であるだろう。しかし残念ながら問題は容易ではない、それこそまさにそれを難しくしているものなのだ。一方でわれわれはそれを試みたい。ただもう一つの小さな序論。われわれはここでわれわれの芸術家の場合にはじめてある個所に立っている、われわれがしばしば、そしてこれらの版画においては二度戻らねばならないだろう個所に。すなわち、道德自体が道德的に考えることを禁じるどころ、おしゃべりな解釈学が沈黙するところ。あるいは少なくとも無言の態度をとり、通り過ぎるものにベルを鳴らすところ、あるいはもし道德がついに話すことを強いられるならば、少なくとも私は口がきけないということ以上に何も言わない、そのような個所に。

世界賢者 [哲学者] は失明することは半分の死であるととっくに述べた。そして実際に自然はこの意見を是認しているように見える。その意見はまさに哲学者の発言の場合に必ずしもその事情ではないのだが。私はつまり、この嘆きの谷の中の何かある悪に対して、見ることができないということに対してよりもっと大きな補助手段が存在しているのかどうか疑うのである。太陽が姿を現さなければ、よろしい、われわれは明かりをつける。それは些細なことである。白内障が窓を閉ざすならば、再びよろしい、眼医者がよろい戸を開ける。人間が近視の人 [Myops] になれば、あるいは人間が宇宙 [Universo] から彼の鼻の先端以外に何も見ないならば、あるいは人間が老眼 [Presbyt] になれば、そして教会の塔を明瞭に見るが、彼の前に立っている彼に一番近い人を見ないならば、商売全体は、ガラス研磨工に支払われる 12 グロッシェンで片づけられる。明かりを引き寄せる人 [Licher-Zieher], 眼医者とガラス研磨工のこの大きな三重の同盟の助けでもって、人間は今まで絶対的なと同様に相対的な盲目性ととても強く戦ってきた、少なくとも防衛的に戦ってきた、そうして盲目性がそれでもあちこちでする干渉はほとんど話す価値のないものとなった。それどころか攻撃的に戦ったこともあった、そして将来いつか、兄弟の眼の中の破片を月の中に見るといふ希望。

この見ることは奇妙ではないか。われわれはすでに月との遠隔図版 [Telegraphik] を完成しなかったか。そうしてわれわれは正確に計算すると、常に1と2分の1秒後に知ることができるのだ、もしその上で新しい山 [monte nuovo] が生まれたならば、あるいはリスボン [1755年地震] かメッシーナ [1783年地震] がその終わりに達したならば。しかしああ！ 他の五つの感覚に眼鏡が存在するならば！ [「Telegraphの代わりにTeleskopeと言われなければならないだろう。少なくとも私はそう書きたかった。しかし今一度訂正されるべきならば、私はむしろ眼鏡という言葉を書きたい。それは本来私の意見を表現している」1795年5月10日のEschenburgへの手紙]。しかしそこでもみすぼらしく見える！ そこで老眼 [Presbytie] はますます多く近視 [Myopie] の中に沈んでいく。遠視は近視となる。そして近視はすぐに完全な盲目の中で死ぬ。そこに明かりをともしることができる人は、あるいは白内障を抜き取ることが、あるいは眼鏡のレンズを研磨することができる人は！ おお、それは賢者の石であろう、私は老年の石のことを言っているのだ。それなしにはいかる知恵も可能ではない。人はそれを数千回も試みた、しかしどのような成功でもってか？ 精神は、最初は先行して積極的に、そして肉体は後ろから弱く、[マタイによる福音書] その行進を開始した。それから肉体の惨めな強要された積極性が続いた。その肉体の後ろを精神は惨めにのろのろと進んだ。そして最後に - 行進はもうなかった。そして精神と肉体、眼と眼鏡は失われた。 - たいていは、眼鏡にとってひどく残念なこと。しかし、われわれは - と私には思われるのだが - ベッドの壁の懲罰用の鞭 [Edukations-Besen] について話したのだ。それは眼鏡なのか、老眼のための？ 本当のことを言えば私自身それを知らない。私は、眼鏡が、それが眼鏡であるならば、鼻に使用されないということだけは知っている。私はこれで私の義務を果たしたと思う、私は私の著者のとげのある [epineuse] 個所について、私自身ももう理解しないところまで注釈したと思う、そしてそれは一人の誠実な注釈者がすることができるすべてである。一方でおしゃべり的なことでこの場所に欠けているものをわれわれは読者に十倍 [zehnfältig] も別の個所で補うことを約束する。そこではおしゃべり性は半分も必要ではないだろう。そしてこれはまた - 一人の誠実な注釈者がすることができるすべてである。

ベッドの天蓋の上に、まったくここが自宅であるようにくつろいで、ある悪名高い路地の泥棒 (Street robber), ジェームズ・ダルトン [James Dalton 1739年に処刑された] のかつら箱★がある。それが相続物でないならば、それはすぐに相続物になるだろう。というのは、その男はあの時期に縛り首にされたから。われわれの女主人公はどれほど深く落ちたことか。その路地の泥棒は第三の位階の悪党であった、すべての悪党名誉を持っていないやつだった。彼らは、その祖先をアレクサンダー大王まで数え入れている追いはぎ (Highwaymen) の国

家の中で縛り首にされるだろう。彼とその娘の名誉のために、われわれは仮定したい、彼は足音を忍ばせて歩くすり (Pick-pocket) ではなかった、そうではなく正直に危険とともに奪った、心に対して心を、あるいは少なくとも棒に対してナイフかピストルを。しかし徒歩で (Footpad)、だから騎士 [Chevalier] ではなく。馬は高める、悪党でさえ高貴にする - イギリスでは。地面で自分を支えている盗賊たちは常にヤフー [Yahoo ガリヴァー旅行記の第四部、「フィヌムの国への旅」。ヤフーは人間という名前の奇妙な動物種である。フィヌムはヤフーよりも優れた模範的な馬] のようなものを持っている、それに対して馬の盗賊はフィヌム [Hopuyhyhnm]**の何かを持っていると気づいたと人々は言う。ダルトン [Dalton] が乙女にゆだねたものは些細なものではない。すべての種類の状態、形と色合いのかつらは盗賊道具の重要なものである。一つのかつらの中で彼は夏に多くの地方のウサギやシャコのように見える、すきで耕された土地や切り株-畑のように見える、そして冬には雪のように見える。あるいは盗賊が一つのかつらの中で毛虫として略奪したならば、彼は第二番目のかつらの中でさなぎになり、第三のかつらの中で蝶となって正義の手から逃れる。試験や博士の学位に達することができる前に、一週間のうちに四学部すべてを通る旅 [Tour] をかつらをつけてした例がある。もちろん最後に後頭部のこれらの仮面は頭自身に不利な証言をするだろう、そしてこれはベッドの天蓋の上の担保をいっそう重要にするのである。

* *James Dalton his Wigg box* とその上書きは書かれている、ドイツ語でも普通の生活において言われるように、*Dalton*、彼のかつら箱。それは *Wig Box* と称すべきだろう。おそらくその正書法に反する誤りは *James Dalton* ではなくホガースに由来する。彼の版画はそのような不注意なことではいっばいである。われわれはこの機会にすぐにこの版画における二つの誤りを示そう。一つの肖像画の下に *Mack* のかわりに *Mac* がなければならない、もう一つの肖像画に *Sacheveral* の代わりに *Sacheverel* がなければならない。われわれは一方ですべてをわれわれの複写の中で忠実に残しておいた、ホガースのようないたずらっばい男はあちこちで少なくともその下に何かを持ったかもしれないから。この分冊の最初の版画の上のガチョウの首の宛名はこの種類のものである。

** この奇妙な民族たちの物語を知らない人、あるいはそれを知っていて、今彼らのところに行きたい気持ちを持っている人は、有名な外科医で船長の *Lemuel Gulliver* の旅の第四部の中に必要な情報を見出すだろう。

壁には絵の中に [in effigie] マックヒース [Mac Health]、当時の彼の分野における最大の道化の一人が掛かっている。彼はまた *M* を前にして *M' Health* と書かれる、後になって *M* をもった幾人かの同じような人にとってのように。有名なゲイ [John Gay, *Beggar's Opera* の作者] も、荒野のマケドニア人の *Crutius* [Rufus Curtius 1世紀のローマの歴史家] になることを自分の名誉に数えた*。彼にも彼の死の際に一つの立像が建てられた、しかしとても奇妙に、台座なしに。その立像はもちろんその支えを上から受けとった、おそらく名

前の中の彼の M が前方にあったので。彼はまた大理石あるいは金属の中でつるされなかった、そうではなく彫刻家と鋳物工の手間を省くためにそして最大限の類似性を得るために、彼はその本人自身が *[in Person]* つるされた。私がかこよりももっと多くの場所を願ったところはない。それは言い過ぎだろう。だからそのテーマをただ短く。徒歩の像と馬に乗った像 *[Statuas pedestres* そして *equestres]* と言われる、*Footpads* [徒歩で行動する追いはぎ]、*Highwaymen* [乗馬で行動する追いはぎ] と言われるように。しかし私に思われるように、世界には彫像の一つの主要な種類が欠けている、ローマもギリシアも考えなかったような彫像が。その種の彫像は主にわれわれの時代に残しておかれたように見える。それは *Statua pensilis* である。立つ *[stehen]* とぶら下がる *[hängen]* の間の一つの小さな形容矛盾 *[contradictionem in adjecto]* を批評家は名称の中に留意しないだろう。それはひとつのただ文法的な矛盾である、そしてわれわれの普通の彫像においてしばしば、もっと深く横たわっている彫像が受け入れられ *verdauen* なければならない。私はなぜ人々が、おおよそ *[cum grano salis]* 人類に貢献した人物を金属で、讚美歌集を手を持って、金属の絞首台に、金属の鎖に、例えばパンテオンの裏庭に掛けないのか、理解しない。Meudon の秘密の鋳造所 [革命の間、パリ南方の小さな町 Meudon に、軍需品の改善に従事する企業があった] はそのようなものを思いつかないのか。人は常に前を向いて働くことができるだろう。というのは、可動の四肢を持った立像を、それらが 11 月 *[Windmonat: 風の月。フランス革命暦 (Ventose)]* に永遠化するために立てられ、そして熱の月 *[Hitzemonat. フランス革命暦の第十番目の月 (Fervidor)]* にパンテオンの裏庭でつるされるように、鋳造することは、フランスの機知やフランスの芸術家才能にとって容易なことであるに違いない。

★ マックヒース *[M'Health]* は周知のように『乞食オペラ』の主人公である。

マックヒース *[M'Heath]* のとなりに、自分の名前の後ろに S.T.P と書かれている別の男が掛かっている。それは、*Sanctae Theologiae Professor, Dr. Sacheverel* *[Henry Sacheverell 1674?-1724 評判の悪い政治的な説教者, 1710 年に政府への攻撃の故に裁判になる, それはロンドンで大きな騒乱を引きおこした]* の意味である。サシェヴェレル *[Sacheverel]* の名がすでに十回も S.T.P が彼に短いあいだ与えたかもしれないものを無意味にするということは、これらの版画の解説者にとってとても良いことだ。彼は軍用道路の上で空の方に彼のゲームをした、ロンドンからオクスフォードへの道路の上の彼の対をなすもの *[Pendant]* のように。ホガースは、彼をそのようにつるしたことで尊敬に値する。— この熱狂者の裁判は最近、ドイツの新聞の中で靴屋のハーディ *[Thomas Hardy, 靴の製造者, 政治家。議会改革の先駆者。1794 年に反逆罪のゆえに逮捕され, ロンドン塔に投獄され, 同年の 10 月に*

裁判がされ、釈放された]のそれと比較された。両者のうちの誰に敬意を表してなのか私は知らない。その際に引き起こされた騒音はもちろん類似性を持っている。この側面の同じ性格はロンドンでも容易に保たれている。深いところでの騒動はもちろん常に上からの運動の結果である、その運動がどのような種類のものであれ。サシェヴェレル博士とハーディは運動を刺激した、ただ、私には思われるのだが、博士の運動はあまりに高く、靴屋の運動はあまりに低く見られているという重要な違いをともなして。サシェヴェレル博士はシオン山の番人 [Zionswächter] の一人だった、彼らについてレッシング [Gotthold Ephraim Lessing 1729-1781] は言っている、彼らは闇の中に何かがほのかに光るのを見ると、それが北極光の線条であるのかどうか調べることなしに、火事と叫んだと。[1778年「一つの寓話」] 本当はしかし博士は今度はあなた自身のパイプに火をつけた、あなたがそれをさせるべきでなかっただろう時と場所で。このパイプとともにあなたは不注意に歩き回ったので、最後にシオン [Zion] と町にほとんど被害が起こるところだった、その被害を見越して先手を打つためにその博士氏は雇われていたのだが。サシェヴェレルはなるほど当時の (1709年) 極度にトーラー党的 [保守的の政党] な考えを持った説教者であった。当時、省は知られているようにホイッグ党 [whigg 自由主義的の政党] であった。しかし彼は考えた - そしてそれはパイプ [合図] だった -, まるですべての許容された兄弟たち [1689年ウィリアム三世によって公布された寛容法は英国国教会の国教会の外部のすべての信者に、彼らがイギリス王に忠誠を誓うならば、宗教の自由と無罪放免を確約した] が省 [Ministorio] によって、そして高い聖職者階級によってさえ優遇されるかのように。闇の中のいくつかの強い移動の後で、そしておそらくいくらかめまいを感じながら、あるいはさもなければ、完全に慰められたというわけではなく彼はシオンの上で炎のにおいをかぐと思った、そして助けを求めて叫んだ。彼はつまり、片隅の教会ではなく、セントポール教会で [サシェヴェレルの説教は1709年11月5日に行われた、その説教の四万の複写が当時人々の中に広まったと言われる] 偽の兄弟の危険についての使徒の言葉について説教をした、そして省とその方針を、アレゴリーではなく、明瞭な言葉で、さんざんにこき下ろした、当時の会計主任 [Sidney Godolphin 1645-1712] をヴォルポーニ [Volpone or the Fox, Ben Jonson の喜劇 1606年] の名のもとに説教壇にもたらした。そして人民に呼びかけた、鎧と神の武具を身に着けよ、そして偽の兄弟に対して立ち上がれと。 - この説教の日のためにこの正直な兄弟はまさに意図的に11月5日を選び出した。周知のようにこれは、火薬陰謀事件 [1605年ガイフォークス为首領とするカトリック教徒によるイギリス王ジェームズ一世爆殺未遂事件] の記念日であるばかりか、慈善的な革命をもたらした上陸 [Glorious Revolution はカトリックに傾きつつあるスチュアート [Stuart] 家を1688年11月5日にイギリスに上陸したオラニエ家のウィリ

アム〈Wilhelm von Oranien〉と取り換えた]の記念日でもある。さらに同じ日に、ロンドンの下層民の正統派が、一年中静かに酵母菌の上で横たわっていたにせよ、発酵し始めることが知られている。ブドウの花が咲くときに多くのワインが発酵し始めるように。つまり、福音 [Evangelii] のために神聖な火が路上で点火される、そして教皇は絵の中で [in Effigie]、偽りの兄弟への警告のために燃やされる。サシェヴェレルの説教は、人々がふだんのように窓の鎧戸、突き出し窓の鎧戸、地下室のドア、屋台やそのような薪を火にくべたばかりか、偽りの兄弟たちの教会の椅子、すんでのところで偽りの兄弟自身を火にくべるところであったという結果をもった。 - それは恐ろしくないか。 - ひょっとしたら多くの読者は私と一緒に尋ねるだろう - この硫黄が白熱している口の上に腕くらい太い水の噴水を注ぎ込み、頭を水-栄光で祓い清めるために近くに消火ポンプはなかったのかと。ひょっとしたら、民衆はそのような要素の争いを見て、楽しさの衣服を身につけ、そして楽しい嘲笑の顔つきを取っただろう、そうしてその事態は消えていざらう。 - しかし事態は残念ながら、そのようには経過しなかった。当時の市長 [Lord-Mayor] [Sir Samuel Garrard] もまたおそらく硫黄聖人だった、そして正義の人たちの演説を印刷させた。そして今突然、至るところで燃えている。演説は彼の支持者によって天の中に高められた。議会の中の賢明な人たちは慎重さによって事態をそれがあるよりももっと重要にすることのないように忠告した。しかしそれはむだであった。サシェヴェレルは国家犯罪者として上院手すりの前に運ばれた。それは彼が望んだすべてである。事態はますます悪くなった。彼の馬車は毎日小躍りして喜ぶ人間たちの取り囲む群れによってウエストミンスターホール [13世紀以来最上級裁判官が会議をした] から Tempel Bar [かつてロンドンのシティへの都市の門] まで護送された。意見を異にする教区 [非国教徒] の家々は略奪された、許容された祈りの家は取り壊された、大法官ロード・ウォートン [Thomas Wharton 1748-1715] の家やサルム [Sarum=Salisbury] の司教 [Gilbert Burnet 1643-1715] の家も破壊で脅かされた。そして結局、このすべての騒音の後で何が起こったのか。軽罪 [Misdemeanor] の罪があると判定された、つまり絞首刑に値する犯罪者とまったく何もしないの間の中間物の罪と。それについてイギリスの法は明確には決定しない。博士氏が印章を盗んだならば、人々はあなたを縛り首にしたらう。しかし彼は三年間まるまる説教職を停止された、そして彼の作品は公開で燃やされた。 - それは今過ぎ去ってしまったのか。全然そうではない。ますます高く、ますます広がっている。そしてわれわれに思われるように、今から法に従って。軽い刑は放免以外の何物でもないものとみなされた。その際に人が自分の少しの権利を主張しようとした放免。そして生きている体のもとでその男は聖人と同時に殉教者とみなされた。神聖な火と神聖な照明が彼に敬意を払って、一つの端から別の端へとイギリスの夜を照らし、飾った。今その殉教者は彼の状

況を本当に享受し始めた。彼は勝利して国を馬車に乗って回った。オクスフォード大学は壮麗さと荘重なパレードでもって彼を出迎えた、そして人々は一日中福音のためにごちそうを食べた。イギリス貴族の大きな部分が豪華さと敬虔な美食でもって彼をもてなした、都市の市当局は音楽、騎兵隊とともに大きな公職華美 [pontificalibus] の中で彼に向って行進した。彼が通りすぎる道端の生け垣は花輪で飾られた、そして教会のドアから三角旗と旗がはためいた。そして空気全体がサシェヴェレルと教会★で鳴り響いた。その事柄は当時そのようであった。後世がその記録をいくらか修正し、判断を覆したことを人々は見ている、そしてホガースは、罪人の処刑の中で、その罪人たちの首は普通の力にとっては強すぎたのだが、その罪人の処刑の中で比類のない力を所有していたホガースはここでその聖人をマックヒース [Mac Heath] の隣でつるしたのである。そのように一つの側面は友人たちを継ぎ合わせる [Sic pagina jungit amicos]。そして実際にマックヒースとダルトンたちは彼らの尼僧たちと一緒にサシェヴェレルの変容の際に主役を演じたそうである。彼が彼の聖職者的な祝福を撒いているあいだ、これらの人たちは必要な農機具を操縦した、いずれにせよ彼を受け入れることを拒否するだろう地面を世俗的に耕すために。さらに二つの絵が同じ壁に掛かっている。マックヒースのすぐ下に一つの光臨をもった胸像、そして大きさの違う窓の下にイサクの犠牲。その最初のものに触れている解釈者はみんなおよそ、それは処女マリアであると言う。これはその事柄を短く言うならば、これらの解釈者諸氏のとても悲惨な考えである。第一にその人物は明らかに男性の顔である、だからわれわれはいきなり終わりにいる。その人物がこれでないならば、その考えは自分の中にある種の感情にとって腹立たしいものを持っている、ホガースがすべての彼の気まぐれにもかかわらず決して侮辱しなかった感情にとって。それはまた良い印ではないだろう。もちろんキリスト教世界のあちこちで尊い人物の像は多くの詩的な寺院の中に掛けられているかもしれない。そこでは神はここと同じように悪く仕えられているのだ。しかしそのようなものはあまりに不自然である。そして最初に見る時の腹立たしさはそのような日常繊細さの弱い魅力のためにすべての感情を鈍くする。一言で言えば、それは真ではない。そのものはもちろん一つのカレンダー聖人である。数字 365 を考えてみよう。このとても相当な群れの下でただ一つのはかさぶただらけのものでなかっただろうか、サシェヴェレルのように、あるいはマックヒースのように。 - イサクの犠牲について解釈者は何も言わないか、まさにとても多くの価値あることを言う。厄介な個所では、それは解釈者の流行である。おそらくその絵はポルトガル寺院からの残りだろう、そしてわれわれが上記の第三の版画でまったく偏見なしに言ったことはすでに最も良い説明を含んでいる。本当にここでその娘の物語は、この状態ではまだ幸福と称されることができ一つの方向転換をとる。彼女の上に持ち上げられた剣はまだ止められる、そしてイサクが犠牲にされ

る場所はただ単に、主は見ているという名前である [モーゼの書「アブラハムはその場所を〈主は見ている〉と名付けた。それ故に今日でもまだ人々は言うのだ、そこで主が見ている山の上でと]]。人はそれ以上に何を欲するのか。ホガスはここでそれほど深く見なかった、単に暴力的な死からの救済を考えた、あるいは特別な場合の厳格な正義の剣の一撃を押しとどめることを考えた、その力を持っているより高い善の腕によって。そのように数千の人たちが、それよりももっと深く見ることができないイサクの物語を考えるのである。その説明はもちろん、ホガスが文献学者、律法学者であったならば、わざとらしい。しかしそれはまたしばしばホガスがなかったところのものすべてである人々の聖書解説ではなかったか。人々はどれほどもっと多くを、キリスト教的に男に許さないだろうか、その性格から少しの機知的な軽率さが完全に純粋には否定されない男に。

★ この歴史が短くうまく語られているのを読むことができる一番新しい本の一つは Brunswic Lunenburg 家のイギリス王の回想, William Belsham [1752-1827] による, ロンドン 1793 年, II 完全八つ折り判 vol. I. p.60 などである。

われわれがこの奇妙な版画をその主要な内容に従って通り抜けた後で、われわれは今いくつかのペンの動きであちこちで今までわれわれから逃れてきたものを掃き集めたい。

説教者襟を持っている男の上方に博士小襟をもっているいくつかの薬瓶があり、窓の外の方を見ている、それによって中を見るのがむづかしくなる。そして別の窓際には、私が間違っていなければ、軟膏がある！ よろしい、軟膏がそこにあるので、それをそこにあらしめることは義務である。ここで解釈学がベルを鳴らす。

猫！ それがそこに探しているハツカネズミが逃げってしまったに違いないこの部屋の貧困と不潔さの印として。イエネズミとハツカネズミ [Maus] は、そう言われるように、金持ちのところではほとんど物乞いしない。そして彼らはそれほど間違っていない、とわれわれには思われる。しかし動物の姿勢は意図された捕獲の姿勢ではないし、待ち伏せしている注意深さの姿勢でもない。[猫の振る舞いは、それを猫の専門家のリヒテンベルクは見逃したのだが、真にホガ斯的である。猫は小便をしている]。だからまたその姿勢はそれがあるところにとどまってもよろしい。さらにベッドの後ろのカーテンには前の晩の翼のついた被り物 [Kopfzeug] が鉤で固定されて掛かっている。おそらく嵐に急襲されて、急いでそこに逃げ込んだのだ、アイロンかけがしわくちゃにされないように。帽子はもっと前に、立っているときに、救われたように見える。ベッドのカーテンの中の結び目のようなもの。アイルランド氏はその中に一つの顔を見ている、聖職者夫人、ヒラメとの類似性を。私はこの推測に反対するものを持っていないので、私はむしろアイルランド氏が頻繁にここにおけるほど

ホガース的な眼で見たことはないと思うのである。ウェヌス・パンデーモス [Venus Pandemos. Aphrodite Pandemos, ゼウスとディアナの娘] の祭壇 [ベッドのこと] の周囲のカーテンの中の結び目に一つの惨めな顔の形を与えることは確かにホガースの詩人と芸術家性格の外にあるのではない。その顔は視線をそらしてそこにもたらされる犠牲を嘆き悲しんでいるのである。その結び目は確かに入念に、意味がないわけではないように結ばれているように見える。おそらく、その太陽への接近の際に彗星のために必要な光あるいは自由な落下空間を獲得するために。ちなみにその顔が聖職者夫人に似ているかどうかわれわれは未決定のままにしておく。しかしわれわれはこの機会に妥当な格言「何も多すぎず(少しだけ)」[Nichts zu viel. テレンティウスの言葉。ソクラテス、ソロンに遡る言葉。Ne quid nimis] についての小さな発言で終えることをやめことはできない。われわれはここでちなみにとても狡猾なオリジナルな創造者と関係しなければならぬ。それはとても真である。しかしそれによって自分の健康な眼を損なわないようにしなさい。本来はわれわれ自身の鼻先のこちら側でそれらの浅薄な遊びをしている版画の上の物事を見ることが思わないようにしなさい。そのようなことは最近の時代の女子言者たちを思い出させる。彼女たちは針の先でもってカップの中のコーヒーの残りをかすからコーヒーを入れた女中の運命を読み取り、それから説教するのだ、「私のとても美しい女中さん、この小さな円をごらんください、それはとても明白だわ。それは馬車の車輪です、そしてこれらの小さな点、4, 8, 12, 16, 20, 24, それらは - の、待ちなさい、かわいい子よ、正しいわ、六頭の馬の足跡です。おお、もう一度その上に息を吐いてごらん、見なさい、ここに明らかに星があります。自分で突き出ている先端を数えてみなさい。だから私の美しい子よ、六頭の馬の馬車、そして一つの星、そしてここに、ああ！それは何でしょう！」 - - - しかし何も多すぎない [ne quid nimus]。ここでしかし、小さな機知の思い付き [Saillies 火花] に、真のあるいは推定上の機知の思い付きに反論されない。解釈者は明らかに自費でその思い付きをあえてした、そしてその思い付きについてわれわれは第一分冊の前書きの中でわれわれの意見を表明した。これは、人々がしたいように取ることができる解説者のスタンプを押しされた所有物である。その話題はしかし全体の中に深く察知された意味を持っている。全体のものの意味をホガースは決して隠さなかった、彼はそれをただ彼の害になる形ですることができただろう。彼が全体において欲することは、一目見てすぐに明らかである、そしてそれはそうでなければならない。そのようなものなしにはこの種のいかなる芸術作品も人々の気に入ることはできない。しかしこの全体なるものの意味を知るならば、小さな下位の困難を解明しようとする努力は観察の際の喜びを高める、そしてその喜びは全体のものとの闇を完全に破壊するだろう。人々はその版画を投げ捨てるだろう。だからわれわれの最初の分冊の最初の版画は無秩序と滑稽なコントラスト以外の何も

表していない。その無秩序やコントラストは一つの狭い空間の中の旅回りの女優たちが服を着るときには必然的に現れなければならない。このコントラストを一層目立つものにするために彼は神々のオペラを選んだ、その中では劇場でディアナ〔狩猟の女神〕が鹿を狩る、そして舞台裏では鹿がディアナを狩っている。この無秩序をことごとく唯一の絵の中で表現することは、われわれの芸術家の才能にとっては最も豊かな課題であった。ここに彼の天才は精通している。彼が翼を何かの慣例－詩脚に従って、あるいは一定のテーマに従って切り整えさせることを強いられたならば、彼は確かに地面に横たわったままであただろう。－それは彼の場合であった。例えば、ヒューディブラス〔Hudibras。Samel Butlerの風刺詩1663-78。その版画によってホガースは初めて政治的な風刺作家の姿を見せた〕においてとても明瞭に。だからあの最初の版画において計画と一定の神々のオペラを嗅ぎだす人はたしかにホガースの精神を良く知らない人である。彼の内的な強さの感情と意識にもかかわらずその契約に、粗野な野生が自分の商品をわれわれの哲学的な市場で売れ行きを良くしようとして、必然的に洗練された人間と結ばねばならない契約に順応することは、もちろん美学の裁判的な、そして私が思うように、根本的な宣言にもっと適合していただろう。しかしそれをその男はできなかった。彼はただ生産した。われわれ他のものたちはろくろにかける〔*drechseln* 技巧を凝らして仕上げる〕かもしれないが。一つだけ例を挙げると。この女優たちの版画はエンデューミオン〔月の女神に愛された美少年〕とディアナとの間の情事を示していると解釈された、自信たっぷりに、そして優越性の顔つきで。－私の友人の一人〔ひょっとしたら超反動的なケストナー Kästner か〕は、私がここで全体を挿入することができることを願うだろうあの版画の一つの解釈によって、真の優越性の顔つきではなく感情でもって、あの滑稽な説明に対応した。彼はそれをフランス革命に関係づけて解釈した、あの了見の狭い陰謀より果てしなく優れている一つの機知とともに。私はただいくつかを言及することができるし、してもよい。もっとも強い筆使い〔Zug〕のいくつかを言わないでおくことを私と同様に私の友人にもより高い種類の感情が強制する、その感情に従えば、そのような機知は今、公に表明されると、容易に誤解されるのだ、われわれが今日、われわれ自身の運命が明日には何になるのかを知ることが少なければ少ないほど〔フランス王、王妃の処刑の暗示〕一層多くわれわれの同情を要求する人物の名が挙げられなければならないので。－最初にだから祭壇のところの二人の悪魔、コントラバスと自分の周囲のすべてを石に変えてしまうメデューサの頭路のとなりの彼らは、私には思われるように、真昼の太陽よりも透明〔*luce meridiana clarius*〕である。隅に投げられた波は失われたアザラシ〔イギリスは90年代に革命時のフランスとの海戦でオランダの植民地の他に西インドのフランス領地を征服した〕を素晴らしく表現している。猫たちは、それで何をしているのか知ることなく、地球

儀を回している。司教帽子 [ランポウギク *Bischofsmütze*] は喜劇本のための袋となる。乞食たちの宝石はマルテル [Malter 穀物の量の単位] かごを満たしている。それはしかし宝石への *Assignat* [フランス革命時の紙幣] に他ならないだろう、そしてこの計り知れない財産の没落を燃えている獣脂ろうそくが脅かしている。サンスキュロット [フランス革命時の共和派] はここでは至るところにいる。一つのズボンさえもそこに投げ捨てられている。怒っている猫から尾が切り落とされる。人々が今携わっているのはロベスピエールの尾ではないか。打穀用からざお、つまり農耕は隅にある。からのトランクは何かと同じくらい明瞭である。西インドからの海の女神は一人のサンスキュロットに彼女の最後のラム酒を注ぐ、そして両者は泣く、彼女自身は陸の上に投げ出されている。かぶと、ひょっとしたらパラス [女神アテナ] のかぶとで物語を推し進めている猿は誤解されることができない。また雲の中に衣服を探すことはその意味を持っている。 - そんなように全体を通して経過する、そしてこのすべてが起こるその集まりは自称する、ローマの元老院と人民 *Senatus populusque Romanus* 「ローマの元老院は元老院と人民の協働に基づいていることを表す」と。

第四の版画

発酵の三段階の化学は周知のように言う、ワイン発酵、酢発酵、そして腐敗した発酵。しかしまた化学とはまったく別の場所でそれについて語られるだろう。似たようなものが至るところに見出される、すべての種類の有機物質が揮発性の [volantil] 私は何か知らない *Je ne sçai quoi* のある分量と、生あるいは精神、あるいはそれであるところのもののある分量と、量と同様に力の多様な関係の中で結ばれて、絶え間ない変転を通して保存される自然循環の中にあるところで。人間と国家の生は、全体的に部分的にそのような事情にある。生の最初に発酵、おお、それは人間の心をどんなに喜ばせないだろうか。そこではどんなにすべての感動と歓喜の中からぐいぐいと吸い取られないだろうか。その後しばらくしてそれはもうそうではない、 - 前の戦争の時のようではない、あるいはふだんならば年代記作者が時代のために持っているものようではない。それはもうおいしい味がしない。人々は酸っぱい顔をして痙攣的に頭を振って真ん中で中断する。人々はそれをもう理解しない、それはもうほんとうに許されていない、それは**恥**すべきことである。 - そのようにして気難し屋 [Sauertopf 酸っぱい鍋] が生まれる。何度も。年齢は注意深くする！ 用心深さは疑い深くし、不信は再びもっと老いさせる。それはダッシュ記号 [-] で額の上に計算される。そして夕食と朝食の間にぜいたくな真夜中食事が自分の脂肪から [von eigenem Fett] 摂取されるの

も稀ではない。そうして歯が次々と落ちる、巻き毛は次々と、力も次々と落ちる、それから歯も髪も力もなく、あるいはシェークスピアが言うように、あらゆるものなしに *sans every thing* [Sans teeth, sans eyes, sans taste, sans everything. As you like it から] 最後の発酵を通して腐敗に移行する。－ お！ なんと彼は匂うことか。彼をかなくずの入った箱の中に入れてしまえ！ 彼を復活耕地 [墓のこと Resurrektionsacker] にやっつけてしまえ、二度と見られぬ強力なものを。それが人間である。－ 国家や都市も違ったように経過するだろうか。太古の栄光ある国や都市の中で今まだ残っているものは、巨大な死体の上の墓石である、あるいは冬ごとに失われていく腐った沼地の周囲のみすぼらしい子孫である。

しかしいつでもそんなにゆっくりと進むわけではない、すべての段階を通して。いくらかのものはすべての発酵を、他の場合にはほとんど最初の発酵にも達しない時間で通過する。その責任が発酵手段にあることは稀ではない。有名な機知に富んだ豚の皮 [Schweinpelz] であるロチェスター卿 [John Wilmot Rochester 1647-1680] は彼の三十歳の時に老いる、三十一の時に改宗し、三十三歳で完全に人生に飽き飽きして死んだ。それはすべて可能である、一世紀も生きることができる体質の場合には。しかしこの天才は、自慢するのが常であったように、五年のあいだずっと酔っていた★。だからそれは各々の太陽年に、普通の生の測量計 [Biometer。リヒテンベルクの造語] が告げる年の三年分を過ごす。生測量計の目盛りは人間の身体の耐久性に従って分割されている。そのような国家が存在したのかどうか。二年間のワイン発酵、二年間の酢発酵、二年間の腐敗の発酵！ それは、いつでも最初に行動し、それからじっくりと考える誇り高い気性の激しい民族 [革命後のフランスのこと] においては可能だろう。

★ ジョンソン博士のロチェスター伯爵の生について。イギリスの詩人たちの生の中。

このすべては本来は君、哀れなモリー [Molly] に妥当する。君の発酵もまたとてもはやく進行する。二十年もたたずに、君はすでに第二の発酵の終わりのところにいる、前掛けをした醸造の職人がその第二の発酵を君のためにとめることは難しいだろう。

つまりわれわれの女主人公は刑務所に送られた。この客室 [Appartement] はその刑務所の食堂 [Refektorium]、あるいは本来は運動ホール [Motions-Saal] であるように見える。副次的な時間に － 残念ながらここでは一日は大部分がその副次的な時間からなっているのだが － 麻をたたいたり、あるいはこれがうまくいかないときには、たたかれたりするために。ここでもまたこの場合に、ゆっくり休む許可が与えられる、その娘の後ろの男のように。その男は、この版画を見た一人の少年が思ったように、スズメの巣から盗もうとしている。

一度それを越えて考えると、ここで人はまったく悪く取り扱われているというわけではない。その社会は小さくないし、まったく悪いというでもない、そして捕らえられて入っているにしても、人は少なくとも捕らえられた空気の中にいるのではない、ここではすべてがとても風通しがよく、高い、そしてそれはいつでもすでにかなりのことである。とりわけ腐敗的な発酵のふちにおいては！ 彼女はその列の右の翼部のところに立っている、女性側兵 [Flügelmännin] として、また垂れ付き頭巾 [Flügelhaube] を被って、そもそもとても翼を撃たれて飛べなくなって [geflügelt]。おそらく彼女は蛾として捕まえられた、そしてこの多彩な集まりに編入された、あるいは少なくともそれは色とりどりの器具 [Apparat] である、その器具でもって彼女は夜にランタンの周囲をひらひら飛んだ。しかしこの項目はもっと近く照明を当てられるに値する。尋ねることができるだろう、どのようにしてその娘はここに来たのか、そのような晴れ着で [en Cala]。彼女はベッドから連れてこられたので、そしてそのように服を着る時間はほとんど与えられなかっただろうから。彼女が被り物を四度か五度、試した、そしてこの他の衣服を平均して二度、試した - それは人が仮定できる最小限のことである - と仮定してみよう、そうするとそのために二時間か、二時間半がそれで経過したただろう。そのような商売において蝶を捕らえる人は彼らの靴に値しなかった。しかし今、ポンチ酒鉢のわきのみすばらしい鏡を考えよ、その鏡は豪華建物のほとんど五十分の一も占めていない、そしてその鏡はそれぞれほとんど数ハント [手の幅の長さ] しかない地帯 [Zone] から地帯へ、蒼穹の周囲を動かされなければならなかった、そこで多すぎるかここで少なすぎるかを見るために。多くの婦人は舞踏会のために帽子をかぶるのに三時間を必要とする、それを四本の手で、そして一つの鏡で。その鏡の中で彼女は彼女がその前にどのように立とうと、空全体を見落とすのである。そのようなことはうまくいかない、そんなに多くの忍耐は裁判所の下級役人から要求されない、そして、人々が要求しようとしても、ほとんど期待されない。というのは、第三の版画の上のある人の手に中に、第四の版画の上でわれわれがまさに醸造職人と呼んだ男が手の中に持っている道具が見られるのである。同じものが現れるところで、それは決して我慢強い心の印として現れない、人々はそれを牛革の鞭 [Ochsenzieher] と呼ぶと私は思う。だからこの謎を解くために私はただ二つの道を見る。あの最初の拘束はこの拘束と異なっている、それは例えばただ私的懲罰として起こった、しかし役に立たなかった。それはとても残念である。そのようにしてこの第二の道に来る。(これはおそらくもっとも容易な観念であるが) その娘はそうして連れ去られた、路上の空気の流れと好奇心に満ちた自然研究者の視線の列が必然的にするほど多く覆われて、そして彼女は衣服を後から届けさせた。今イギリスでは誰も聴取されることなく刑を宣告されることはないということ、人は自分が所属している場所で引き続いて姿を見られると

ということが知られている。それは自分の顔と姿にいくらか自信のある哀れな女罪人にとって重要な時点である。彼女はなるほど、彼女の行為が買収のきかない容赦のない裁判官を、正義の剣の下に彼女の向かい側に座っている畏敬の念を起こさせる男の中に見出すだろうことを知っている。しかし、彼女はまた、法学部に所属していない人 [Nonfakultist] の中に彼女の顔つき、彼女の腰、彼女の髪と彼女の行儀の良さ全体が事柄をそれほど正確に取らない裁判官、美しい娘を、彼女が一度だけ仕事に捕らえられたので、すぐに非難すべき、あるいは醜いとみなすことを誓わなかった裁判官を見出すだろうということを知っている。だからイギリスでは一人の女性が裁判官の椅子の前にもたらされるならば、良い顔つきのもとに、少なくとも礼儀正しさの形を、衣服の実質を所有しているあるいはそれに達するすべを知っている女性が裁判官の椅子の前にもたらされるならば、人々は何か偉大なものを見せられることを確信できるのだ。1775年に二人の双子の兄弟 Perreau と彼女の男友達を絞首台にもたらしたラッド夫人、彼女自身は絞首台をこの親切な助力によって免れたのだが、その彼女の名前は確かに当時のすべての雑誌の中に生きている、雑誌自体がまだ生きているとすれば。彼女の衣服全体は描写された、帯はことごとく、リボンもことごとく描写された。礼儀正しさ自体が指揮したように見える彼女の頭飾りは分析された、Perreau を捕まえたいと思った人たちの前にいわば描かれたのだ。コーディリア [「リア王」の孝行な末娘] とデズデモナーナ [オセロ夫人] としてのシドズ [Siddons]*、彼女にラッド夫人よりもっと多くの榮譽が与えられることはできなかった。それは遠くまで及んだ。だから誰がこのような娘に対して気を悪くするだろうか、彼女が試験の日に少し探してかき集めたにしても。陪審員にとってそれによって目をくらまされることは禁じられている、しかし哀れな罪の女にとって、それが可能であると信じることは、禁じられていない。打撃そのものがそれによってわきに反らされないにしても、そのようなことは民衆の中にあちこちでサマリア人 [良きサマリア人は盗賊に襲われた旅人を介抱した] を呼び起こすことができるだろう、そのサマリア人は傷口に油を注ぐだろう。というのは、ロンドンには奇妙な種類のサマリア人がいるからだ。彼らに対してそのような生き物は自分の重いラバー満艦飾でもって、優美の女神 Lulie Potocki [ポーランドの歴史家、考古学者 Jan Potocki 1761-1815 の夫人] がダンスの中で社交界の男に、最も繊細な感情に与えたのと同じくらい多く感銘を与えるのである。★★

* 今世紀の最も偉大な女優の一人、彼女の芸術と同様に彼女の偉大な、非の打ち所のない性格のゆえに尊敬に値し、実際に尊敬された。[Sarah Siddons 1755-1831]

★★ ダンスの時のこの婦人の模範的な描写を見よ、リガからワルシャワへのあるリーフランドの人の旅を見よ 第二分冊 S.197。[Johann Christoph Friedrich Schulz 1762-1798]

モリーは法廷の手すりの前で有罪とみなされ、非公式に [*privatim*] 鞭打たれる (*privately whipped*) ばかりか、厳しい労働 (*hard labour*)、麻打つこと (*to beat hemp*) の刑を宣告された。そして彼女にこの服装で始まりをさせることは罰の小さな強化である。鞭打ちの刑罰 [*Gas-senlaufen*] が彼女の仲間の女たちの口を通り過ぎていくと、彼女はもっとくつろいだ気持ちになるだろう。その壁にはいずれにしても乗馬用のフロックとお仕着せ服ではない組みひも帽子が掛かっている。－ 彼女の眼はなんと濁ってしまったことか！ 眼の周囲の青い輪を誰も、銅版画の中でも、見誤らないだろう。口は途方に暮れたように開いている、顔全体は腫れあがったようだ！ 薬瓶に手を出すようになれば、いくつかの過ちは世界の中で何をする事ができないだろうか。その哀れな心、それはなんと重いだろうか。彼女がつかんでいるハンマー！ 左手で高く上に、右手で深く下に。そのように人は打たない、少なくとも麻を－そして砂糖キビもまたそのようには打たない。ああそれは彼女には不可能である、彼女は眺めたくない、彼女は打つことができる、そして打つことができない。しかしお前はすべきだ、しなければならぬという文が、彼女の隣にブロンズの顔の中に、終止符なしに世界中で読まれ理解されることができると書かれている。そして言葉を一つの *gravi* [[「重い」の意味。アクセント記号] でもって、－私は斜めの牛の鞭 [*Ochsenziemer*] のことを言っているのだが－強調することは不可能である。その事柄はそれによって少しも明瞭にならない。それは一人の男ではないか、そのような群れのために自然によって任命されたような一人の番人ではないか。完全にウェルギリウスのところでのダプニス [*Daphnis* シチリアの羊飼いで牧歌の発明者]★のように。

Formosi pecoris custos, formosior ipse

「子豚は美しい、豚飼いはもっと美しい」

しかしわれわれの読者は誰がこの拷問吏に似ているか知っているか。一つの卵が別の卵に似ているように、スワッカム [*Thwackum*] 修士、ブライフィルとトム・ジョーンズ [*Blifil and Tom Jones*] 兄弟の家庭教師。フィールディングはそれを明確に言っている [[「教育学者は彼の姿の中に、われわれが「情婦の道」の中で厳格な教師として見る事ができるあの紳士と多く類似性を持っている」 Henry Fielding の風刺的な小説から]★★。周知のようにこの学者は少年たちの教育の際に宗教の分野を受けもっている。彼は授業を白い前掛けをして与えたのかどうか。私はこの種の授業の際にそのようなものをひどくふさわしくないとみなさないだろう。それは家庭的－暫定的なもの、期待を呼び起こすものを持っていて、そして同時に時として良心の呵責の毛皮を耳越しに引っ張る [*über die Ohren ziehen*。[*jm. das Fell über die Ohren ziehen* だまして利を得る。皮はぎ人が獣皮をはぎ取るから] の概念を思い出させる。それは威嚇 [*Territion*] として使われると害することができない。一方でこの男の

中の鉱石 [Erz] は完全には理解できるものではない。それどころか彼の上の半分はもっと深い敬意を吹き込むことができるだろう、彼に牛革の鞭の代わりに少なくともそのような名前ではない道具を手を持たせるならば。一方われわれの読者があまりに多くその男に対して反感をもたないように、そのような独裁者のもとにいる他の捕虜たちを心配しないように、われわれは必然的に述べなければならない、そのような人々は、都市が支払う顔、彼らによって無償で作られ [schneiden] なければならない顔の他に、さらに半ダースの別の顔を蓄えとして持っている、そしてそれらの別の顔は彼らから安い値段で買われることができる。これらの顔は一般に牛革の鞭なしに提供される、そしてそのうちにいくつかは、私が言われたように、鼻の下に、一つの耳から別の耳への一本の親切な横断線をもっている。われわれがここで見るものは、アントレ [Entrée スープの後、主菜の前に出される料理] のための通常の食べ物である。

★ 田園詩 V.44

★★ トム・ジョーンズ Book III chap. 6

われわれの女主人公のすぐ後ろにこの執事の女が立っている、そして別の種類の鞭を耐え忍ぶ女の頭の上に引き寄せたように持っている、その鞭はただ魂を痛い目に合わせるだけである。厚かましい嘲笑の鞭を。悪魔がまだ不確かな目的のためにこの世界の中で彼の操り人形の一つを引いたり回したりしたいならば、彼はそのための針金を、この女がレースや蝶形リボンやハンカチをここでつかんでいるのとは異なった指や異なった顔つきでつかむことは不可能だろう。それよりももっと悪魔的な顔つき [Physiognomie] は考えられだろうか。しかし彼女の表情は、そのような顔に一番よく似合う形のものである、*風刺的な形*の。激怒と火酒によって照らされて、彼女は果てしなく勝利するだろう、しかしそれはまだカリカチュアではないだろう。おお、そのようなものをまだ見たことがない人は世界の中で何も見なかったのだ。アイルランド氏が思うように、もし彼女がハンカチをポケットから引き出さないならば、彼女は確かに彼女の夫の楽しみに対する、そして彼女自身の心を軽くすることに対する機知的な平行線を、その婦人のこの花嫁用装飾品と、その婦人が埋葬された墓所の間に引く。彼女の眼は閉ざされているよりはむしろ、流れ出た。しかし顔はそれによって側面からの光の何も失わない。すべては歯-ダイヤモンドによって十分に代理される。ガラガラヘビが、眼が欠けていることが気づかれなほどもねのできないかたちで示している歯-ダイヤモンドによって。この家の中であいさつ、あなたにここで会えて果てしなく嬉しいが聞かれたならば、それはそのような裂け目舌 [Schlitzung] の口の中から出てきたかもしれない。教師 [Zuchtmeister] と女教師についてはそれくらいに。

今、列を下に走っていけ。それはなんというハンマーの演奏 [Haammerspiel] であるとか！ なんという音楽か！ それらの七つがちょうど動いているということは奇妙である。だから実際に、ド [Ut], レ, ミ, ファ, ソ, ラ, シ。右手の前の部分の二つは、計算されることはできない。というのは、それらは今度は一緒に演奏していないから。何かが修理中であるのか、演じ終えてしまったのか。(というのは、それらのハンマーは静止しているばかりでなく、また丸太の上に麻を持っていないので) 私はあえて決定しようと思わない。またその個所と他の個所の間に小さな溝が走り抜けているように見える。だからおそらくここに等級 [Klasse] があるのだろう。第一 [prima] と第二 [seconda] が。あるいはわれわれのモリーは他の人たちの手本としてテラスの上に立っている、そしてさらに柱のところで仕事している。犬が半分だけ見えるということは、本当にそのような隆起を示している、そしてより高い位階は表章なしには考えられないので、またこの隆起した箇所にも地面の中に一つの指輪が見出される、そして掛留 [遅延 Retardations] -丸太が、動きを完全に阻止するために、あるいは減じるために。しかしわれわれはわれわれの音階と槌打ち機 [Hammerwerk] に戻ろう。

われわれの基本音 Ut [ド] のとなりでレ Re, 畏敬の念を起こさせる老人がハンマーで打っている。私はかつて、謁見を表している古い銅版画の中に、一人の大使を見た、彼はちょうどそのよう見え、そのように立っていた。何かが打たれていたのではない、ひょっとしたらそれについて話されていた。本当に、この男が正直な工場 [Werkhaus] の中で上級警察監督官としてそこにいるならば、あるいは私的に [privatim] 自分の書斎にいるならば、最初の場合には人々は彼が中国の皇帝がすきで耕すように、手で打つことをしていると思うだろう、そして第二の場合には、犬が胃を痛めたときに草を食うことをするように手で打つことをしていると。その男はここにどのようにしてやってきたのか。解釈者は彼をいかさま賭博師とみなしている。彼らはそれを彼の作業機の前に地面の上にある擦りきれたカードから推測する。それは本当だ、その男はほとんど欺くことがないこの人間階級の何かを持っている。これらの毒蛇を許容する賢明な自然は通常その服装 [Aufzug] と衣服 [Anzug] の中に、鳴子 [Klapper] の個所を代表している位置のようなものを置いた。その鳴子でもって彼らはそれを知らずに周囲にいる人たちに警告するのだ。常に何かが完全に正しいというわけではない。ある時は世紀 [Jahrhuindert] に対して彫られる [schnitzern], ある時は季節 [Jahrs-Zeit] に対して。閱兵式の衣服はリズヴィック [オランダの町, アウグスブルク同盟戦争の終結の講和条約 1697 の地] の平和の時から、フランツ一世の戴冠 [1745 年, ドイツ皇帝に] の際に [賭博の] 胴元になる [Bank machen], あるいは八月の涼しい夕べの時に豪華毛皮が胴元になる。これはこの人間階級の弱い側面である。そしてどの階級が弱い側面を持たないだ

ろか。そのカードはスペードの 8 [Pique-Achte] である, しかしそのような 8 は存在しない, 一列の四枚のスペードは。それは結局, 削り落とされた 9 であろう。両方の札は言っている, 5 対 3 と。そして意味において 1 はもう一度同じくらい *alterum tantum* [noch einmal soviet] を作る。そこで確かに詐欺が行われた。おお, (第三の版画の中の) コーヒーの沈殿物についての発言が印刷されていなければ! ここではインクを苦勞せずに売る機会だろう, ある価格で! - 肉桂油のように。事柄は自分の困難を持っている。われわれはそれを越えて行ってはならない。次のように問うことができる, そのカードはどのようにここに来たのか。彼はそれをハンカチと一緒に引き出したのか, なぜそのカードは二つに裂けているのか。それはひょっとして賭博でかける際にあまりに頻繁に曲げられたので, 結局二つに割れなければならなかったのか。この機会においてイギリスの注釈者の浅薄さは理解できないと同様に描写できないくらいである。そのようなことはおそらく当時, 問いただされなければならなかっただろう。昔の資本に何も付け足さないならばいったい何のために書いているのか。外国人はここでは手探りすること以外にすることができない。そしてもし彼がその国の専門家の前で自分を笑いものにしなければ, それで喜ぶこと以外に何もできない。運を天に任せて。

その男はプロの賭博師であるよりはむしろ, 幸運を当てにする無責任な人であるように見える。後者は至るところで, だからまた賭博の中でも, 試みたのである, そして賭博の中での完全な破産によって, 彼をここにもたらした別の道に陥ったのだ。そのような運命においておそらくカードを呪うことができる, もしてまだ上着のポケットに一枚のカードを見つけるならば, 引き裂き, 自分の前に投げるすることができる, 麻を打つことを始める前に。私はもちろん彼を, 毎年少なからずロンドンの正義を困らせている悪名の高い人物たちの一人とみなしている, 英語では *Swindler* [詐欺師] と呼ばれる人物の一人とみなしている。*Swindler* (ついでに言えば), それは偉大なジョンソン博士が彼の同様に偉大な辞書の中で忘れた言葉の一つだが, それは英語では, 繊細に考え出された策略によってとりわけ主として身分と財産のある男として, 人間から財産を奪おうとする詐欺師のことである。そのようなことを実行するためには, 時おり暫定期間-妻 [Interiums-Gemahlin] が少なくとも装備品として, あるいはおとりの鳥として欠くことのできない品目である。彼女は弁才の任務を, 彼は重々しきの任務を果たす。私は恐れる, 私はほとんど恐れる, われわれのど [Ut] とレはそのようなカップルではないのかと。- 彼らの場所がそのように直接的に連続しているということ, 彼らが二人ともそんなに重く豪華で, 完全に同じ趣味に従って飾りをつけられているということ, それはこの推測を少なからず証明している。今レがドをあるいはドがレを商売において必要としているかどうか, それをわれわれは決定できない。ひょっとしたら, 罪は切り刻まれたカードの上の 3 対 5 の関係にあった。だから平等の関係から全体の重量のた

だ八分の一だけ異なっている。彼らは多くの搜索の後で、ついに盛装馬車 [Staatswagen] の中で捕らえられ、そして短い裁判の後で牢獄に入れられたかもしれない、そしてこのわれわれの女主人公の顕著な区別 [Distinktion] は第二の逮捕の結果であるかもしれない、その第二の逮捕は至る所である種の嘲弄的な言辞と結びついているのが常である。モリーがここにいることのこの理由をちょうど述べられたばかりの理由よりももっと正当であるとみなすならば、その理由を維持することができる。ここではただ趣味が問題となっている。壁に掛かっているへり飾り帽子がわれわれのレに属しているということはほとんど言及を必要としない。

レの後にミが続く、一人の子供、この版画におけるもっとも憐れむべき対象。十代になったばかりで★、この子はすでにこの屋根の下にいて、犯罪のために償いをしているが、その犯罪について彼は何もわかっていない、そしてその犯罪を犯す形式は彼に鞭でもって教え込まれたものだった、むく犬に曲芸がたたきこまれるように。徳の住所から、私はドイツの小さな町からと言っているのだが [ここでリヒテンベルクは善意から嘘をついている。当時のゲッティンゲンの性病の状態]、ロンドンに来る人の心は血を流すに違いない、彼がある晩、十二か十三歳のそのような生き物、バレエの羊飼いの女のような服装をした [[たいていはキリストの日の人形のような服装をした] と E.G. Baldinger への 1775 年 1 月 10 日の手紙] 彼らによってつかまれ、芝居がかった情愛のこもった抱擁でもって引き留められるならば。[[十歩ごとに十二歳の子供たちに襲われる] と同上の手紙]。それはすべての想像を超えている。彼らは子供っぽい愛らしい声と、明らかに暗記していることを証言している流暢さで、彼らが一言も理解していない事柄について話す。人は彼らをそれゆえに小さな商人とみなすだろう、このすべてが、ただチャーターズ [Charters] か悪魔だけが書くことができるような教理問答の中から唱えられていなければ。それは許すべからざることだ★★。哀れな娘は彼女の顔つきの中に何か良いものを持っている、そして娘が亜麻を打つ熱意はすべての指示に従う気持ちを証言している。公正なる天よ！ この娘が監獄に値するならば、彼女の無垢を熟考の時期の前に、彼女の青春を開花の前に有毒にした授業をした人たちはどのような罪に値するだろうか。

★ 733 頁上の注を見よ。

★★ われわれはテキストの中でそこまで進んでしまったので、ロンドンではこの災いを全力で防止しようとしているということを述べることもわれわれの義務である。非時間においても自由を自慢することが稀ではないこの民族において使用されるすべての力で、われわれの女王 [Sophie Scharlotte, ジョージ三世の妻] の指示に基づき、女王の庇護のもと、支援によってそこにはマグダレーナ病院が存在している、自分の状況の悲惨を感じ、自分の生き方を後悔しているこの職業の娘たちが収容されていて、始めから最善の人間に教育される。[[ここにはトリアノン [ヴェルサイユ宮殿の離宮]

以上のものがある（その離宮にフランスの故人の王女は何百万も浪費した）」とリヒテンベルクは書いたが、妻の忠告で政治的な理由から除去した] そうしてだから人間の本性の深い悲しむべき墮落は一つの側から、そして崇高な徳の墮落は別の側から再び人間性の名誉のためにその最大の輝きの中に姿を現すきっかけとなったのだ。一方でこれらの生き物たちの多くがそれを利用する気持ちをごんごんに持っていないかは次の話から判明する、ある日一人のそのような娘がおそらく善意の親戚によって力づくでそこに拘留された。彼女は馬車の中でひどく叫んだ。誘拐を推測した通りすがりの人はその馬車を止めた、そして何が企てられているのか尋ねた。私は、娘は叫んだ、彼らは私を改悛の情のある処女の病院に無理やり引っ張っていかうとしている、そして私はそのいずれでもない。

われわれは今、第四の音、ファに来た、短い丸い球形のもので、それはハンマーにもたれて休息をしている。一人の本当に小さな悪魔 [Satan]。彼女の眼、とても可愛い一組の Toll-beerchen [毒のある植物]、それは彼女の鼻からほとんど三ツォルも離れていないところで空中にぶんぶんと音をたたてる蛾に向けられているように見えるのだが、実際にはしかしそれらは陳列台の華麗な夜行性の鳥 No. 1 とその素晴らしい翼に向けられている。彼女は鋭く狙いを定めた、そして彼女が引き金を引くならば、確かに当たる。私はその娘が話すのを聞きたいと思う。ここでホガースは彼を特に特徴づけている複数の筆使い [Zug] の一つを提示した、それらの筆使いはこれらの六枚の版画にまだ頻繁に現れるものではないが、しかし、彼の天才が成熟に近づくにつれて、ますます濃厚になって現れてくる。一人のイギリスの解釈者もそれに気づかなかった。すなわちこの娘の後ろに鉄のスカーフをした有名な杭が立っている、われわれのところでもよく見られる杭。それは表題を持っている、*The wages of idleness*、なまけ者の報酬。だからファは休憩しているのだ。そのような休息を禁じている掟の板のすぐ下で。それだけではない、彼女の北側の部分が前方に身を乗りだしているのだ、南側の部分は明らかに強く掟に向かっている。それは、と私は思うのだが、すべての民族において敬意の不足として認識される。ここでこの極 [Pol] とともに一つの単なる銘文の方に狙いを定めることは二倍も不作法である。というのは、人々はこの端 [Ende] が時おり懲罰を受け入れることを知っているが、それに関して文字による警告を読んだという例を人々は持っていない。

ソ [Sol 長音階の第五音]、われわれの女主人公の 5 度 [Quinte, 五度音階] はまったく堂々とした娘である。受動的な従順さの愛好家であるならば、その人は彼女をほとんど見飽きることができない。私には人生においてただ一度だけそのような顔が現れてきた、自然の中であつたか、絵の中であつたか、村の台所の料理女として、あるいはスフィンクスとして、私は今はもう思い出すことができない。エジプト的な平行 [Parallelismus] のような、いくら

か機械的な服務敬虔さは実際にその顔の中と頭の位置全体にほとんどご誤解されないものであった。彼女のハンマーはとても重い。彼女はハンマーを、肘を腰の中に支えることなくしてはほとんど持ち上げることができないように見える。明らかにそのハンマーは、遠近法のすべての規則を考慮すれば、彼女の隣の女性たちよりももっと大きい。その中には鉛があるのだろうか。スワッカム [Thwackum フィールディングの小説の中の家庭教師。生徒を打ちたたくのが得意]はひょっとしたら彼が顔たちを持つようにハンマーを持っている[ハンマーは人間の顔と顔の表情と同じと考えられている]。

ラ La, 一人の黒人女, 哀れな人!, それに加えて, 私が君の丸さから推測するように, まったく二倍の存在。胎児にとって牢獄のなんという箱詰めだろうか! 刑務所に収容されている母の中に投獄されて, 家族全体にとって再び牢獄である世界の中で。おお! 無垢の色と自由の制服とともに生まれたわれわれは幸いなるかな! 親愛なる親愛なる太陽よ, われわれにただこの自由と健康とわれわれのパイナップル穴居人 [Troglodures]*を保持させてください。残りのものをわれわれはすぐに見つけたい。

*ジャガイモ

シ Si はその列の最後を作る。彼女はここでリア王のコーディリアのようである, われわれの最後の女だけれども, 最悪のではない *although our last, not least*。彼女は他のすべての女よりももっとまじめに働いている。また一人でハンマーを右手でつかみ上げた。彼女はほとんど見ていない, そしてほとんど何も彼女によっては見られない。しかし彼女は多くをしている, あるいは本来は, まさにそれ故に彼女は多くをしている, まさしく - 世界の中 - 大きな刑務所の中でのように。コーヒーの残りがすからのこの小さな道徳とともに次の [seconda] 二人に移ろう。

前面は明らかである, 第三の版画の上でお茶を注ぎ入れた団子鼻の怪物。彼女が同時にここに持ってこられたということは彼女が単なる世話係以上であったことを示している。彼女は彼女の女里子の運命について喜んでいるように見える。秋波を送っているように見える - ひょっとしたら, 今日初めて彼女からこの距離を保っている牛革の鞭を持って。ホガースはそこですでに彼女にいくらか多く胸を与えていた, おそらく理由がないわけではなく。ここでは彼女はまったく胸と脚からなっているように見える。彼女がそこで引き上げている盛装長靴下は明らかに彼女の性のものではない, それらは不法にまったく不作法に上に達しているので, そのうへびぎのために織られなかったので - もっと空間を必要とする第二の種類のものであったので。それ故にこの地域の中への明瞭な出現。黒, 白あるいは銀のまち [三角形の当て布] をともなって黒い! 当時の宮廷や町の流行を知っているならば, 誰

が長靴下を失ったのが推測されるだろう。そうしてわれわれは長靴下を刺しゅうされた靴と同時に、町や宮廷をだますために、少なくとも脚の周囲で、町と宮廷に匹敵することを試みなければならなかった女の獲得された所有物とみなさなければならない。その人物全体は素描の名作ではない、陰影をつけることの名作でないのと同様に。彼女のスカートの下の明るさはどこから来ているのか。燐光は考えられない[光にさらすことが先行する結果として闇の中の赤熱していない身体の輝き]。それはどこから来るだろうか。しかしとても明瞭に見えるのである。それはだから芸術家の道化-服からの光の反射に他ならない。その眼は、この恥ずべき生き物の性格の上に一瞬のあいだ光り、礼儀正しさに一瞬のあいだ同じことをするきっかけを作ったのだ。長靴下をぴんと張るために、彼女は、礼儀正しさの一つの残りから今少なくともこぶしで膝あたりの長靴下の中のクリップ[Handhabe]をつかんでいる。長靴下ベルトはそれが自発的に受け取る優しい湾曲の中から判断すると、一つの古い蠟引き布壁紙から切り取られたように見える。彼女の隣に一人の別のあばずれ女[ein anderes Mensch]が座っている。アイルランド氏は、彼女はエジプトの災い[モーゼ書から。性病の暗示と考える評者もいるが、彼女は蚤をつぶしているとも言われる]の一つに携わっていると言う。それは十分に明白である。両者は亜麻を打つことに熟達しているように見える。それは最初ではないのだ。彼女らの完成した課題は彼女らの上のかごの中にぶらさがっている。彼女たちはだから食事の前に化粧をする時間を持っている。それぞれの仕方に従って。

まったく背景の右手に、窓のよろい戸にあるいはタンスの戸に、番兵詰め所スタイルで白墨[Kreite]で、一人のぶら下がっている人間とともに絞首台が描かれている、その人間は自分のパイプを吸っている。絞首台は良く表現されている。この屋根の下の絞首台を人々は良く知っているのだ。絞首台が、貴族が都市を離れるならば、その貴族[Noblesse]の田舎の領地になることも稀ではない。その人間は単に記号の中にいる。その上に銘, S.J.G (Sir John Gonson) が書かれている、われわれがすでに第三の版画の際に述べた正直な男の名前。白墨を持った悪党の機知ある思い付きが実行されているのが見える。ひょっとしたら彼が似たようなことを短剣[Stilet]でするのはあまりにも臆病かあるいは敬虔であったので。口の中のパイプはわずかの意味しかない。そのようなものを、銅版画に彫られるどの正直な男も承認しなければならない。私は正直な人々の肖像が、とりわけ彼らが若い人の教育に貢献したときには、まさにこの若者によって、稀にはないがパイプとともに、そのうえ口ひげとともに、尊敬されているのを見た。その口ひげは粉を振りかけられたかつらを越えて真っ黒に立っていた。それは悪い思い付きである。しかしもちろん自分を学校の教科書の前で銅版画に彫らせること、そして同時にそれによって自分と教師にひげを付けさせることは少なくともずっと良いというわけではない思い付きである。この図形のようなものが完全に現代

的 [modern] に銅版画に彫られているのを見ることは稀なことである。その図形が千五百年間火山灰の下に横たわっていたならば、われわれはそれについて一言もしゃべらないだろう。

スズメの巣を取りに行こうとしているように見えるその男は本来は監獄の階の中に立っている、そして普通程度の悪党になるために再び正直に働かなければならない。留め金 [Stock] の上の板の上には言葉が書かれている、Better to work than stand thus (そのように立っているよりも働く方がもっと良い) この場面は解説を必要としない。おそらく挟み込まれた男 [der Eingeklemmte] が女教師の下で彼の解放のための秘密の前書きを、ここにまったく快適に同名の極を通り導かれることができる文通の中に挿入したということを除いては。

今はその犬以外に何も残っていない。それは容易な項目ではない、ホガースのような計り知れないほどの道化と関係しなければならぬときには。犬は単に志願兵 [Volontaer] としてそこに座っているのだろうか、彼の主人に対する人間的ではない忠実さの証明のために、すなわち主人に牢獄にまでついていくという証明のために。この道徳はわれわれの道学者にとっていくらか殺風景すぎる、そして実際にすでに第二の [in secunda] エジプト的な災いの際にそうであった。そしてまたここに欠けている教訓の一つの尾 [Schwanz] と一緒に、すなわち世界の中で人が通常は自分の大きすぎる忠誠のために期待 [gewarten] しなければならない報酬とともに。 - これはうまくいかない。だから私は今も思っている、それは美しい羊飼いと女羊飼いの牧羊犬である、その犬は群れの多くの歩みを見張り、守らなければならない、一方その優しい夫婦はカーテン-牧歌 [Gardienen-Eklogen] に従事している。犬は何を学ばないだろうか。犬がそのように彼の主人が指揮している翼の方に耳をそば立てていることは、とても理解できることである。彼はモリーが命令される声を知っている。それはおそらく時おり彼もまた受け取るのとまったく同じ決まり文句である。彼はそれは自分に向けられていると思っている。というのは、ここではすべてが平等であり、そして自由であるから [フランス革命のモットーに対する不吉な暗示]、それが一つの牛革の鞭の下で可能な限り。

第五の版画

ここには最後の発酵への移行がある - 彼女は死につく。とりわけ、疫病流行的な愛の恐ろしい結果において。ここで不安なという言葉を考えるならば、ひとたび言葉を使おうとするとすぐに、それはわれわれの偉大な芸術家の意図を故意に理解しそこなうことを意

味するだろう。しかしこれはここではほとんど必要ではない。すべてはとても明白である。青ざめた頬とこわばった唇から死自体が、技能が外部と内部から課した情婦的な飾りの一番小さな痕跡も拭い去った。口は永遠に閉ざされている、その口からは前の月にまだお世辞や罵りの小片が二枚舌的な流暢さとともに多彩な列をなして通りすがりの男に流れ出てきたのだ、その口が弱くあるいは強くその通りすがりの男の策略に対して戦うにしがたがって。永遠にその眼は消えてしまった、その眼は、見るよりはむしろ見られるために、豊かに装われた火の視線を周りに発射していたのだが。－そしてその眼は今ではもう見ることも見られることもない。死の眺めの際のこの軽蔑的な豪華さすべての完全な展開の際に、彼女は最初の自然な－善良な素質の単純な衣服で死に歩いていき、慈悲を懇願しているように見える。彼女はそれを見出さなかった、われわれはしかし彼女のためにわれわれのものを忘れたくない。*彼女が安らかに眠りますように Quiescat!*

彼女は青ざめて刑務所の中の彼女の今までの女性司牧者 [Seelsoorgerin]、忠実な女同行者、恐るべきだご鼻の慰める腕の中に沈む。このだご鼻の女は今突然、彼女の愛しい飼育の子 [Zuchtkind] を、この子がもっと長く生き、花咲いたならば、いつか絞首台のところの利益とともに司牧する [beseelsorgern] ことができるすべての可能性を失うのである [この女性司牧者は囚人が生きているあいだ利益を得る]。－それは死ぬことの中の慰めである！ 彼女は注意深くベッドシートの中に包まれた。ひょっとしたら、そこのロープで乾くことになっている寝間着は、自然と人工がここに必要とさせる速い変化の際にまだ進行している唯一のものである！ その女 [das Mensch] は右手で、親しげなおしゃべりの最中である二人の堂々とした紳士に静止と沈黙を命じている。これらの紳士たちが誰であるかは今説明されることになっている。その事柄は重要である、そして読者はわれわれにそのためにいくらかの空間を許すだろう。

ロンドンではすでに四年前から一つの週刊誌が出ていた、それは定期的に現れ、世界のなにかの週刊誌よりもっと多く一様な質の良さの論文で満たされている。かつて寄稿者あるいは寄稿論文が欠けていた例はない。その中に報告されるすべては自然自体によって口述されたように見える。深く人間的な技術が筆を導いたということはわかっているのだが。これは不思議に思うべきことではない。人間を知る人にとってとても良く知られている観察である。というのは、天国における出来事 [原罪] 以来－それについてはもはや読まれない古典的な本★の中に詳細な報告が見出される－人間は彼の自然の左側にとっても投げられたので、今右側を再び獲得することは、一つの固有の時期である－どの雑誌 [Blatt] の中にも完全な秩序が支配している、すべてはそこでは自分の一定の個所を持っている、そこで愛好家はそれを見出すことができる。特にすべての雑誌は自分の強さを感動させる

ものと悲壮なものの中に持っている。読者の涙が流れる個所、おののきが読者の存在全体を揺るがす個所は、その中ではまったく稀ではない。この雑誌はタイトルを持っている、*Weekly Bills of mortality* (一週間の死亡率-表)。この小さな導入部は、読者がそこに見る二人の紳士は学者であり、彼らは当時、雑誌に可能な限りの完全性を得させることに従事していたと読者に言うために必要であった。彼らは本来的な理解においてこの週刊紙にとって有名なジョゼフ・アディソン [Joseph Addison 1672-1719] とサー・リチャード・スティール [Sir Richard Steele 1672-1719] が別のもの、すなわち有名なスペクター誌 *Spectator* (目撃者。雑誌名) にとってあったところのものである。彼らなしにはその完全性は存在できなかっただろう。そのことは確実である。しかしたくさんの寄稿者のゆえに - 彼らのうちの各々の人が友人たちを持っていて、その友人たちは彼に名声を手に入れさせようとした、ホガースによって永遠に値するとみなされたという名声を得させようとした - 今これらの有能な男たちの名前はほとんど知られていない。人々が知っていることは、それは、いまヨーロッパの楽園 [フランス共和国] で医者がそう呼ばれているように *Officiers de Santé* (健康-士官 *Officiant*) であったということだけだ。そして人々がそう信じる理由を持つように、おおよそ Profos 位階の士官 [連隊の中で下された軍事処罰の実行者は Profos と呼ばれていた]。というのは、練習のためにこの実験者そして時には著名な実験者の他に、一人の老いた婦人 [Matrone] の他に、週刊誌へ投稿を提供することは誰にも許されていないからだ。一方、ある拒否されない伝統によれば、肯定的な腹を持ったいくらか身体的な男はドイツ人であり、否定的な腹を持ったもう一人の精神的な男は Jean Misaubin [-1734 フランス出身の有名な - 悪名高い奇蹟医者] という名の古フランク人である [アンシャンレジームのフランス人] 彼らの生活状況からはほとんど話すに値しないいくつかの些細なことだけが知られている。最初の人はずなわち少しの間、と言われているように、ハンブルクのファルガツチュ [Fargatsch。人生の日付は不明] のもとでアルルカン [道化師] だった、そこからロンドンに逃げた、彼の人間の頭蓋骨からの歯磨き用粉末 [18世紀の巡回ドクター (歯医者) と宣伝理由からのアルルカンとの結びつきは異様なものではなかった] のゆえに追跡から逃れるために。そこでしばらくの間、生と死をかけて開業した。そして最後に絞首刑にされた。殺人のゆえにと言われている。そうであったとしても、それは医学的な殺人ではなかった、というのは、知られているように、イギリスの医者たちは、他の国と同様に、*下剤*を与える特権、*瀉血*する、*殺す特権*、*purgandi, saignandi et tuendi* を持っているからだ。だからそのようなことが可能であったただ二つの場合が行われる。彼は治療のために絞首刑にされた、彼が任命された [kreiert] 医者でなかったので、*創造*された [erschaffen] 医者でなかったので、そうではなく単に自然の遊び *Lusus naturae* であったので。あるいは彼は公的ではなかった

器具でもって殺したので。おおよそ十か十一年前に一人の有名なロンドンのドクター M' Gennis はこのやり方で絞首台に至るところだった、(彼はそれを宣告された、しかし後に恩赦を与えられた)。彼は彼の大家を墓地にもたらしただけ以外に何もしなかった。しかし彼がそのために合剤 [Mixture] も粉末も使用せず、そうではなくパン切りナイフを使用したので - そのナイフを彼は患者の体の中に突き刺した -, そして薬剤師を無視したので、彼は厳しく見られた。もう一人の人、Misaubin 博士はまったく善良な男である、ただ彼はある種の粉末とある種の錠剤について大きすぎるアイデアを持っていた、彼はそれらの工場を家の中に持っていた。この錠剤は一種の食べることができるノロジカ-散弾 *Reh-Schrot* である。死が彼の客の一人に近づいてくると、彼は患者をそれで、散弾入り砲弾のように装填し、発砲した [Feuer geben]。そのように彼は数年間、すべての可能な病気と小競り合い [plänkern]、戦った [bataillieren]。彼の勝利の公的な知らせを人々は持っていない、しかし粗い火砲と軽い火砲でのかなりの敗北は週刊誌の中に定期的に見出された。人々はこの正直な男に、私が聞いたように、嘲笑から (というのは、嘲笑が功績に欠けているときがあるだろうか) 白ネズミ *Mice-Aubin* の名前を与えた。それはネズミ *Mäus'-Aubin*、ネズミ-アルビーナス *Mäus'-Albinus, Ratzen-Albinus* くらいのことを意味している。その善良な奴は、別の奴が月桂樹-敷きわらの上でのらくら過ごした後年に、時おりネズミやハツカネズミで試みたそうであるからだ。[Albino という] 名前は苦く、人からパンを奪うよう [貧しくさせる brodraubend] である、そしてそれは、とにかく自分で教会ネズミ [Rat d'Eglise] の肥満 [Embonpoint] を持っている哀れな奴にとってあらゆる可能なことである。そのような隣人の食料庫へのネズミ的な非難は常に甚だしく不当である。いったいその男はそんなに不当にふるまったのだろうか。彼はもはや患者の家に行くことはできなかった、しかし彼は粉末を用いずに寝かせておいた、彼はそれをだから、彼の部屋にまだやってきた人たちに試みた。物事は世界においてそのように進むものだ! 多くの美しい火薬や、それでタマウズラやシギが狙いをつけられる鉛のように、帰宅する際にスズメやコウモリが撃たれるのだ [verplatzen]、退屈から、あるいは自分の技術を見せるために、あるいは何ももっと良いことを持っていないので。そしていったい有害小動物狩猟は医学の教区のひどく外部にあるのだろうか。掻く小動物 [Krätztierchen]、サナダムシ、回虫、ギリシア織毛虫 [Trichuriden] とはいったい何か。各々の身分は自分の段階を持っている。私はだから、ジル・ブラース Gil Bras の聡明な著者 [ルサーージュの「ジル・ブラース」1715-35] は彼がより高い医学の実行 [Execution de la Haute Medecine] について語るならば、例えば高い狩猟や宮廷狩猟官業のようなものを考えていたと確信している。

★ モーゼの第一の書

この有名な男たちの物語とわれわれの芸術家がそれを利用したことについてはこれくらいにしよう。その娘はその場所にとどまっている、そしてそのような決闘においては他のようであることは可能だろうか。彼女は死と戦った、そして立会人としてなるほど善良であるが、しかし彼女によってしばしば感情を傷つけられた、どの機会においてもおろそかにされた、疲れた自然以外に誰ももたなかった。しかし彼女はひょっとして23歳の娘★として今度は彼女の敵をやりこめたのだ。しかし彼、そのようなことを知ることでできた彼は、そのために二人の立会人を選んだ、そのどちらの人も一ダースの自然に匹敵するだろう。それ故にまたうまくいったのだ。私は来た、見たそして勝った *Vini, Vidi, Vici* [シーザーが紀元前47年に Pontus の王, Pharnakes に勝ったときのことば], 即座に彼女は横たわっていた。これがその事柄の本当の観念であるということは一目瞭然である。とういうのは、そこで争っているヒキガエルの姿とザラマンダーの形が死の陰險な立会人でなかったならば、そして自然の側から立ったのでなかったならば、それらはまだその娘を再び目覚めさせることを気に掛けるだろう。しかしこれらの人物たちは彼女をゆだねる - 最後の審判のラッパに、そしてただその行為の名誉を求めて争っている。ヒキガエルは言う、このガラスの中の私の水は火の中への本当の油である、そしてサラマンダーは叫ぶ、私の火は君の水を必要としないと。なんという代名詞の戦いか *Conflictus pronominum!* 私 *Ich* に対する私 *Ich*, そして君 *Du* に対す君 *Du*。それは世界の中の過酷な衝突である、とりわけ最初の二人組の衝突。そしてそれはどんなに素晴らしくここで表現されていることか、完全にその衝突の法則にしたがって。ここでドイツ人の私 [*Ich*] はほとんど速度を持っていないが、一層多く質量 [*Masse*] を持っている、そしてそれ故に、それが静止するようになるならば、常に衝撃力である。それに対してその古フランク人の私は速度を持っているがほとんど質量を持っていない、それでそれは机や椅子で、さらに他にまだ付着しようとするもので切り抜けた。ここで同郷人の強力な衝突の際にただ繕って合わされていたフランス的な質量が飛散する様子を見ることはドイツ人にとって魂の料理 [*Seelen-Speise*] ではないか。椅子と机と皿とスプーンとインクグラス、そのすべてが小さな核から離れ、固まって他の人の静かな言葉の方に倒れる。それは私の水だ、その際の彼の椅子は立っている、そしてそれが立っていたように、立ち続けるだろう。

★ この彼女の年齢については次の版画が正しい指示を与える。

しかしこのグループはさらに多くを含んでいる。それは汲めども尽きぬ価値がある。それは可能だろうか、と尋ねることができるだろう、病気の会議、あるいはそのようなものに帰着する何かを、もぐり医者との会議を、ここで水腫や結核に関して起こったよりもっと明白

に表現することは可能だろうか。水腫は満ちていて、重く、粘液質で不透明である、結核は空っぽで、否定的-膨らんでいて、発熱性-活発で、透明である。それがあがままの水腫！水剤グラスと杖 [Stock], まるでそれが血の友 Blutsfreund の器具, 砂時計と鎌 Hippe [自分の表章を持った死神のこと] であるかのようにつかまれて。それに対して鎌と砂時計を同僚に引き渡した結核 [Hektik] は、骸骨の形を手元に残している、缶の中に殺人粉末 [Mordstaub] を持っている。その殺人粉末は友人の砂時計, ネズミ粉末よりももっとよく時間を示す。その二人の眉毛は, ある種の憧れとともに, となりの髪, かつらに近づく。それは, 人々が通常言うように, 内的な確信の記号である。それは印象の不足についてのいくらか正当な不機嫌と混ぜ合わされている。ここで特に水腫の場合に, この髪の湾曲は互いにとっても近づく, 結核の場合よりももっと近づく, そしてそれによって水腫の意味は制限される。私が間違っていなければ, そのような集会 [Zusammenkunft] は自分を意識している不確かさの記号である, その不確かさは慎重さのうしろに挟まっている。水腫の場合, その不確かさは消化されない読書の葛藤 [Conflictus] から由来しているように見える, 結核の決定的な視線のもとでは, 実践 [Praxis] の似たような葛藤から由来しているように見える。「おお, 愛しい, 愛しい妹よ!」と水腫は言う, 「私の言葉を信じなさい」。「いいえ, 何も, 何も, まったく何も信じない!」と結核はあえいで言う [keichen], - 「この缶の中に!」 - そしてこの前方からの爆発の際に後ろへの衝撃は, 鉄砲の場合のようにとっても強く, 椅子とテーブルは倒れる。これは読者が見るように, この部屋の中の革命を説明する第二の仮説である。われわれはその仮説を, すべてをドイツ人の衝撃力でもって理解させようと試みた他の人たちの勤勉さとともに同等に扱う。もしそのような葛藤の際にドイツ人が彼の粘液質を十分長く維持できるならば, 火山性の国家★の敵はひとりでに破裂するだろう, あるいは荒れ狂う [zertoben] だろうと信じている人たちのために。忠実な読者よ, われわれは決して, われわれの個人的な語彙★★の乏しさとわれわれの世界認識の不足にもかかわらず, 君に恒常的な静かな力と同様にここで作用している変わりやすい荒れ狂う力を言葉にすることをあえてしない。それらの力に理性の顔を持っただんご鼻が対置する衝撃-避雷針でもって。そしてホガースがそのように比類のない形で表したものを牧歌の中で完全に表現することをあえてしない。もし私が君のペンを, 卓越したミュラー氏★★★よ [Müller von Itzehoe], 持っているならば, 私はそれをあえてするだろう, そしてそれをとくにしていただろう。 - 彼の様々な小説の中から常に誤解されることのない人間の声が純粹に明るく現れ出てくるのだが, 一方, 他の人たちの大部分はますます悪くなる器楽に墮落してしまったのだ。彼らがまだ自分の Murkey [分断された男性低音8度音程の継続された伴奏] にとどまるなら, それはまだ許すことができるのだが。しかし自分の高い耳のために自分の近代的-高いしきり

に鳴る音に必ずしも満足せずに、彼らはそれをあえてするのだ、自分で古びたおごりかたな民族-歌曲を、われわれの天上的なテ = デウム [ラテン語の神の賛歌。ここでは Graun のテ = デウムが言われている] を、われわれの *Stabat Mater* [母はそこに立った。十字架の下にたたずむ聖母賛歌] を、そしてアレクサンダーの祝祭 [Alexanders Fest, Dryden の頌詩で、ヘンデルによって 1736 年に作曲された] をいわゆる半分小説 [Hab-Roman] の中に、それらのびやばんとポーランド山羊 [polnische Böcke バッググパイプ] の上に置くことをあえてするのだ。本当に醜悪な！ しかし君は、親愛なるミュラーよ、君の道を進め。君はそれから君の名声を確認できる。もちろんこれらの不器用な者たちの作品は君の作品をまだしばらくは伴奏するだろう - 覆い [Enveloppe] として、そして君の永続的な年齢のための飾りの見本として。飾りでもって私は、君の有名な友が古代からこれらのマルシユアース [ファウヌス牧羊神の Marsyas, アポロによって笛の競争で負かされ、木に縛られ、皮をはがされる] の高い耳越しに遅かれ早かれ引きはがすだろう毛皮のことを言っている。

* Dumouriez の一つの表現、彼は彼の国民 Nation を *une Nation volcanique* と呼ぶ。La Vie du Gen. D.T.II
ハンプルク 1795年 p. 24

** 読者がこの表現を許されんことを。というのは、空っぽの宝物庫も常に宝物庫であるから。

*** Zu Itzehoe.

爆発は小さなテーブルをひっくり返した、それとともにスプーン、皿、インクグラス、ペンと広報 [Bulletin] を。スプーンは良く持ちこたえた、それはへこんだ側の上に横たわっている、そしてきれいな床に可能な限りわずかしか触れていない、だからまさしく、常に塗られている側で落ちるバターパンのやり方に反対して。

「壊れた、それは壊れた、美しいつぼ [Krug] は、そこにかけてらが散らばっている」ゲスナー牧歌 [Salomon Geßner 1730-1788, 縛られた牧羊神が繰り返す詩句]

一つの完全な鉢にとっては悲しげな、しかし傷つけられた鉢にとっては単にある程度だけ。少なくとも目に見える断片から、何かを収めることができる皿は組み立てられない、それを隣人の張り紙もできなかつただろう。インクグラスは壊れる、そして地面は、インクグラスが満たされていた黒い胆汁を最短の道で受け取る。その胆汁は処方箋や愛の手紙の中で溶け合わされたならば、ひょっとしたら多くの哀れな奴を同時にさらっていっただろう。それはもう勤めを終えた。立ち襟でもってペンは破滅から救われたのだが、その立ち襟はペンを少なくとも今、破壊から守っている。ペンが、この角度においては重要ではない騒動の中で踏みつぶされると仮定しても、ペンはまだ別の学部のために別の端を持っている。人が自分の書く端 [Schreib-Ende] の他にぬぐい消す端 [Wisch-Ende] を持っていればどんなに素晴ら

しいだろうか。君が作家としてもう教えることができないならば、頻繁に鉄筆の向きをかえよ *saepe stillum vertas* [書かれたものを何度も線を引いて消せの意味。ホラティウス]、君はまだ向きを交える [*kehren*] ができる。自分の精神的な肉体的な能力を富と不死性の扱いにくい南洋泡末事件 [South See Bubble, 1720 年にイギリスの南洋会社が株式発行によって投機の熱狂を引き起こした] の中に作者性 [Autorschaft] によってつぎこんだ若い作家が毎朝自分の乾いたペンによって教えられるべき道徳、彼がペンを、それでもって世界に彼の啓示を説教するために、インク壺に浸す前に。その広報 [Bulletin] は、すべての種類の病気を首輪と首紐によって治す新しい方法についての医学的-実践的なもの (実際的な計画 *practical Scheme*) である。その紐が上に模写されているのが見える。上に右から左に *Anodyne* [鎮痛薬] という言葉がある、そして下に、左から右に、*Necklaces* [ネックレス] という言葉がある。これはオリジナルの中では読み取るのが難しいものだ。それらの行は首輪の形に従って曲げられているのだろう、というのは、それらは本来、一つの書き換えを、一種の首輪の周りの帯を形成している、そして、その計画自体が患者に単に約束している職務を実際に果たすためにそこにある。だから *Anodyne Necklaces* (苦痛を和らげる首輪)。半分ギリシア的な、つまり半分神秘的な言葉の円は、魔よけのお守りのまったく神秘的な円の周囲に引かれて、ある種の人間の階級のもとで自分の目的を当てそこなうことはできなかった。この装置がどのような有益なことをなしたかは本当に信じられないくらいである。私が言うのは、外的な帯 [Band] が内的な帯に★。というのは、内的な帯が患者になしたこと、それについては、われわれが知っている限り、ちょうど考えられた壁を除いて、何も公的には知られなかった。しかしこの版画は、薬の無数の印刷された推薦の言葉への風刺としてそこにあるだけではない - そのような推薦の言葉は毎日ロンドンで一種の特別な郵便配達人によって無料で [franco] 人々の手の中に、とりわけポケットの中に突っ込まれる★★ - そればかりか、その版画の意味はもっと深いところにある。これは将来現れるだろういくつかの証明のうちの一つの証明である、ホガースが彼の作品の中で、自然が自分の作品の中でのように、同じ筆遣いで [mit demselben Zug] 一つの意図よりももっと多くの意図を達成すること、熱することができたという証明。彼は単に輝こうとしたと人々が信じるのが当然であるところ。すなわちこの苦痛を和らげる首輪は最初は単にその発明者によって子供のために考量された、いわゆるイギリス病 (*the Rickets, Rachitis* くる病、骨軟化症) にかかっている子供たちのために。その病気についてはイギリスでも、ドイツの多くの地域におけるように、不可解な偏見が流行した、それらは通常は汚染された愛の結果であるという偏見が。このことはだからその哀れな小さな私生児 *Manser* [Manz, 母の乳房から] に向けられる。その子は暖炉の火のところに座っている、死につつある母の椅子に、半ばひざまずき、半ば座っ

ている、この死によっても、口論する人たちの学識あるほえ声によっても、その際に司会をつとめている婦人の叫んでいる異議によっても邪魔されずに、まったく静かに自分の苦痛を鎮める肩ロース肉を火のところで焼いている。それはだからくる病による [rachitisch] ものである。そしてこの状況にもとでは彼はこの身長に達するのに容易に六年を要することができる。この六年を母の二十三年から取り去って、汚染の際の彼女の年齢を十七歳にすることができる。それくらいをホガースは、二度も破壊された皿のかけらとともにあいまいな形のいくつかの家具の間にある一枚の紙片の上で言うことができるのだ。しっかりした肘掛椅子の上のその太った紳士、この苦痛を和らげる首輪の発明者がいるならば、－それは容易なことだろうが－その風刺は新しい枝を得るだろう。というのは、われわれがすでに上記で述べたように、その博士自身が苦痛を和らげる首輪で死ぬだろう、ロンドンでそれでもって奇蹟を行う司法があなたに処方したロープ (*laqueus, anodynus* 苦痛を和らげる綱) で****。

* アイルランド氏は、1790年にまだロンドンの一つの通り *Long-Acre* の家全部の壁に、それに対してこの首輪が利用されることができ、実際に利用されただろう病気の名前が描かれていたと断言している。

** あらゆる種類の博愛主義者のこれらのそして似たような手紙はわれわれが知っているように、ロンドンで、無料で *gratis* 人々のポケットの中に差し込まれる唯一の商品である。しかし実際にはこの後ろから差し入れる [Hinterstecken] ことは一種の超繊細な引き抜く [Hertausziehen] ことである。それはつまりいたずら [Schalkheit] が信じやすさに出す手形である、それによっていたずらが現金でもって報酬を与えられるのはまれではない。似たような仕方でも多くの新聞記者は医学的な嘘を自分の新聞の最後に見たところ無料で与える。それらが多くの家族にとって、政治的な嘘、私が言いたいのは、前に書かれている政治的な現実よりもっと高いものにつくにもかかわらず。

*** *Manser*, 結婚生活以外の子供たちの種類。彼らについては母親でさえ大きな観衆 [Publikum] 以外の父親を挙げるができない。どこにでもいる子供 [Aller-Welts-Kind]。

**** この奇蹟治療が本全体をいっぱいにしている、*The lives of celebrated Highwaymen* [名高い乗馬による追いはぎの生]、*The bloody Register* [残虐な記録] など。それらはとてもよく読まれる。そのような英雄的な手段を必要とさせる恐ろしい病気をどのように回避するかは注意書もあり、人々はそれを買うが、読まない。

斜め向かい側で一つの小さな手に入れる場面が死の場面と素晴らしく対比されている。ここでは少なくとも確かにひたたくられる。一人の老婆、かつてその娘のために一種の付き添いあるいは彼女と親戚関係にある人、そして笑っている女相続人、あるいはもっともありそうな何か、彼女が利息としてそして出費のために借金をしてたかもしれない彼女の今の女家主、その人がここで小さながらくたを確保している、あるいは少なくとも彼女の気持ちの平静のためそれらを数えなおしている。死につつある女の息苦しくあえぐこと、医者－殺到

[Hatze] の際の息を弾ませていることといびきをかくこと、煮こぼれている鍋の火を消すシューシューという音さえ彼女を邪魔しない。彼女は人間が死すべき存在であることを知っている、医者たちがけんかをしていることを知っている、また煮えて空っぽになった鍋を再びいっぱいにするのにいっぱい詰まった確保されたトランクほど強力に役立つものは世界の中でなにもないことを知っている。そのような顔はそれに属している、もし人がこのような殺人者たちの巣窟の中で数えそこなうことをしようとしなければ。それは原則から耳の聞こえないことの真のイメージである。

そこの女がかき出しているものは、そこの肘掛椅子の上で腐敗がひっそらっていくものと比較して、感情の人間が認識するであろうように、ホガースの天才が通常大胆に、それにもかかわらず少なくともここではとても器用に達成したよりもずっと高いところにあるものを持っている。まるでそれが彼の自然のままの [nativ] 飛んでいける距離の内部にあったかのように。ここには最初に暗い黒人仮面がある、その仮面をつけてそのヨークシアの愛想のよい太陽顔はかつて舞踏会で装われた醜さとともに短い時間暗くなったのだ、隣の部屋の選ばれた人たちをいっそう確実に支払われた好意の印の華麗さでもっと対比的に眩惑するために。扇子は、ここでは炎はもう発射されないで、静かに射撃-鋸壁の狭間 [Schieß-Scharten] の中で眠っている、そしてひょっとしたら模範的-神秘的に恋した仮装によって多くの空想を悲劇的なミュージアのシンボル [アトリビュット] に導いている。そのすぐとなりに静かに晴れ着靴がある。その靴はかつて、形と運動と金ときんきらの飾りときらきらする光によって慎重さ - 歩数計 - を鬼火のように狼狽させ、引き返すことがもうなされないところに導いたのだ。この靴の後ろに、われわれが第三の版画のところでベッドの蒼穹の中に彗星の下に漂っているのを見た帽子がある。帯やドミノ [舞踏会用絹のコート] も包みから出される。その版画をこの片隅を除いて覆ったならば、一人の老いた徳の番人の女が今日の仮面舞踏会のための衣服を彼女の服従している子羊のために一緒に探すのに忙しいとだれがここで思わないだろうか。しかし今覆いを取り去れ、そして視線を肘掛椅子の中の哀れな姿の上に投げよ。きんきら付きの盛装はその哀れな人のものであった！ 公正な天よ！ 今のドミノ服、それは、ここのトランクの中からあふれ出ているさらさらと音を立てている絹のそれに対してなんと緩んでいて、なんとリンネルのようで、静かであることか。今の仮面、ああ！ 死の冷たい手によってなんと白く化粧されていることか、そして眼のまぶしい光、それはなんと永遠の、永遠の夜の中に、沈み戻っていったことか！ それらはもはや見ない、もはや見られない！ ここには仮装はない。青白い顔のこれらの眼を死の真剣な矢は本当に突き刺した。しかし豪華さの黒くされた仮面のもとであの眼の短剣は完全に威厳がある。一つの折りたたまれた扇子、それは形において同様に応用において、剣に似ていないことはな

い。剣でもって私は、アルルカンの鳴子打ちべらのことを言っているのだ。そして今、鬼火—足はどこにある？ 答え、ドルリーレーンのとげのある生け垣 [Lusthecke] の中の飛び跳ね走り回る軽快なコマドリはそれを自分の生計のために必要としている。その肘掛椅子の上の低く掛けられたゴクラクチョウ★は足をもう必要としない！

★翼のある馬 [ペガソス] への解説者の信仰は彼に足のないゴクラクチョウを信じる権利を与える。
[ニューギニアのゴクラクチョウは剥製として 16 世紀にイギリスに持ってこられた。土着の人たちは標本を作るために鳥から足を切断したので、人々は長い間、ゴクラクチョウは常に空中にとどまっているので、足を持っていないと仮定していた。リンネは極楽鳥に学術的な名前を与えた、Paradisea apoda, 足のないもの]

われわれがまさに腐敗の女候補者の椅子から旅行トランクへ比較線を引いたように、絞首台の候補者の椅子から一つの別のトランクへの比較線が引かれる。その椅子は前景の右手に立っている。もちろんその別のトランクはトランクよりはむしろ椅子である、何かをしまい込むための椅子よりはむしろ、あるいは同様に座るためのトランク。そのトランクはあらゆる種類のこまごましたもので部分的には覆われている、部分的には囲まれている、その中では残念ながら、火搔きと化粧のための [schminkend] 石炭がけた違いに一番清潔なものである。おお！ われわれは以前から第五の版画のこの片隅を怖れていた。われわれがしかし忠実な読者をこの片隅から締め出してしまうならば、第六の版画にはまだ一つの片隅が残っていて、それに対してわれわれはすでに今震えているのだ。われわれはこれを喜んで告白したいばかりでなく、また少なくともわれわれ自身のために、前もって、役に立つ意図がないわけではないのだ。というのは、一つのいくらか扱いにくい仕事を、説得が完全でないわけではなく、だから完全に自発的というわけではなく、引き受けたならば、率直な前もっての告白ほどいざずれにしても常に人間的な過ちを許すものは何もない。今度はそんなにうまく経過することは難しいだろうと心配せよ。

そんなに短く事柄から離れないために — それは多くの仕事にとって危険であるし、特にわれわれの仕事において危険となるだろう — われわれは最初にくつもの文を前置きとして述べなければならない、その一つの文の証明を人々はわれわれに好んで与えるだろう、われわれが他の文の証明を与えたいのと同様に。最初の証明は次のことである、すべての自由に生まれた人間は、検閲なしではない人間 [Nicht-Zensurfrei] でさえもすべての種類の椅子について言いたいことを言う自然な権利を持っている、彼が人物たちに触れないままにしておくがぎり。人物たちは椅子を彼らの座る部分でもって栄光に浴させている。そして第二の証明は世界の中にはそもそも完全に軽蔑すべき椅子の種類は存在しないということである。最後の文はわれわれにとって特に重要である。人間たちをそれについて確信させるため

に、人間たちにその事柄を彼らの先祖感覚と家族感覚 [Ahnen-und Familien-Sinn] の前に十分近く動かす必要がある。その感覚を自然はおのおのの人間にとても入念に備え付けたので、とても多くの啓蒙が、太陽を崇拜しないことと同様に、家族のさもなければ取るに足らない人間を崇拜しないことに属している。よし！

私を知る限りこの時間までまだ一人の騎士リンネ [Linné] が欠けている家具の王国全体の中で、椅子の階級 (Classis Sellarum) はけた外れに尊い階級であるばかりか、もっとも広まった階級である。すべての地方で栄えるばかりでなく、自分を必要不可欠にした階級。一言で言えば、それは家具のもとでは、哺乳類の階級が生き感じるすべての存在の中であるところのものである。もちろん椅子と椅子の間には形と同様に重さに従って大きな相違がある、ちょうど哺乳類 [Mammalien] のもとで、主人一家を含めた多くの住宅よりももっと重いクジラと自分の重さをほとんど 30 グレーン [1 Gran は約 65 mg] にまでもたらさないシベリアのトガリネズミの間のように。しかしこれらのすべての動物たちが、自分の子供に胸を差し出すという特徴を共通に持っているように、またすべての椅子は、仕事中の椅子にとりわけ体の一つのまったく尊敬に値する部分が支えられるために差し出されるということを共通に持っている。それには背もたれがあるなしの、そしてひじ掛けがあるなしの通常の椅子の他に、最初にすべての王座や教壇が属している、そこから、知られているように、世界が統治されるのだ、そして器用な指物師によって一つに組み立てられて、かつて神聖な椅子と呼ばれたものを形成した。さらに裁判官の椅子、重い心配の椅子 [Sorge-Stuehl] - それには最初の王座のいくつかが属しているが - そして、軽いクッションつき安楽椅子 [Berger, 結びつけられたひじ掛けのある詰め物をされた椅子, 1735 年にフランスで現れた], それに再び大量の王座やとてもたくさんの教壇が隣接している。これに続いてベンチの種族。ベンチは椅子の体系に他ならない。それには貴族のベンチ [講義の際に貴族の学生のための席] と学者のベンチ, すべての畜殺台, いわゆる怠け者のベンチ [ぬるぬるした岩石は鉱山用語では怠け者の岩脈 fauler Gang と呼ばれる] そしてこの種族のクジラである永遠の長いベンチが属している。これに続くのは椅子かご [Tragsessel 乗り物] と輿 [Fahrsessel] である。それらは古代ローマの象牙製の [古代ローマの] 高官用椅子 [Sella curulis] であると同様に痛風と足部痛風のための椅子とベッドの間の木製のいわゆる部屋郵便馬車 [Kammer-Post] [車いす] である。これらとキャブリエ [Cabriolet, 二頭立て二輪幌馬車] は関連している。イギリスの、家の階ほど高い軽い四輪の馬車パエトン [Phaëton, 父に借りた太陽の馬車を御しそこない, 世界を大火に導いた]。それはその名前をひっくり返す [umwerfen] から持っている。すべてのカレッシュ [Kalesche, 軽快な四輪馬車], すべての馬車 [Kutsche] と旅行馬車と郵便馬車, ドイツの肋骨を折る馬車 [Rippenbrecher] からイギリ

スの鋼鉄バネの中でのゆりかごまで、そして堂々とした帝国行進馬車 [フランクフルトでの皇帝戴冠の暗示] まで。行進馬車のためには門を広く、世界の中のドアを高くする代わりに、謙虚に、最初に門のところで寸法がとられるのである [讚美歌 24 による Georg Weissel 1590-1635 の有名な教会歌の最初の行へのパロディ]★。乗り物用椅子 [Fahrsessel] の向こう側、ベンチのすぐ隣に、引きずる椅子 [Schleifsesel] あるいはいわゆるそり [Schlitten] の種族が多様な形で生まれる、たくさんの鈴の銀の鐘の音のもとで冬のそよ風の翼を急がせる豪華建造物から貧者-罪人-鐘の単純な響きのもとで刑場にそっと近づいていく悲しみのそりまで。それから乗馬用鞍が来る (安楽椅子 [Sessel] の種族 *Genus sellarum* に従って)、すべての馬の中で最も迅速なそしてもっとも誇らしい馬、パガサス [同時代の女性的な作家の暗示] でさえもはや軽蔑しない男性的であると同様にそれほど知られとしない女性的な乗馬用鞍。一つの別のシリーズから神聖な司法と綿密過ぎるプロパガンダの異端審問椅子の線が告白の分娩 [Accouchieren] の方に引かれる、そして医学的-外科的な椅子の線が実体的な誘惑によって巧みに手に入れること [Ablockung] の方にとても遠くまで引かれる。この最後の椅子のうちで一つの最高に稀な変種がローマの陳列室にあるそうだ。その名前はわれわれにとって忘れられてしまったのだが [おそらくヴァティカンの地下牢]。取るに足らないというわけではない中間空間の中に最期に、ここで話題になっている *Desobligeant* [不親切な。ただ一人だけがそこに乗ることができるので、フランスでそう呼ばれた旅行馬車]★★が来る、それは夜の女神からその名を持っている [室内用便器 *Nachtgeschirr* のこと]。 - 「ああ、一つのオムレツについてそんなに多くの騒音 *quel bruit pour une omelette!* [フランスの作家の *Desbarreaux* -1675 に帰せられる言葉] あなたはそれを私たちにすぐに言うことができなかつたのでしょうか。 - 不可能です、マダム - 「なぜできないの? 私はただ言ったでしょう。尊敬の念をもって言うこと」 - だからかなり尊敬の念なしに。否! ただ尊敬の念とともに言われることは、また尊敬の念とともに言われなければならない、そしてこの義務をわれわれはいま果たしたと思う。

★ それはある民間伝説に基づいている、かつて一人の君主が、行進でフランクフルトに可能な限り広く高く現れるために、馬車を作らせる前に、町の門の寸法を取らせた。それは統治の仕事における多くの経験を証言している慎重さであるが、おそらく真ではない。

★★ *Yorick* の馬車 [Sterne の「センチメンタル・ジャーニー」] の暗示。ロンドン 1768 年。Sterne-Yorick は旅を *Desobligeant* [不親切な馬車] である。その中で彼は彼の旅行記のための前書きを書く。その一座席のゆえにそのように呼ばれていた。

この座席の住居性の系譜とそしてそれ故に証明の、古文書的に正確でないにしても、少なくとも古文書的に詳細な表現の後でわれわれはいま親切な読者から読者の同行のための自由

な通過証を希望する。そこには取っ手のついた一つの小さな板金の容器、そのすぐ後ろに一つのとてもあいまいな皿と最後に、一つの同様にあいまいな、錫製の皿で覆われた陶器製のなべが属している。その小さな容器は、明らかにオランダの痰つぼ (*Quispedorje*) である。そして一つ以上の点でその続き部屋 [*Suite*] に良く適合している。それが永遠のロック [Rock] 博士★の通知 [Avertissement] の上にある。その上にあるのは錠剤だろうか。ロック博士の名前と痰つぼのあいだにある錠剤はおそらく水銀の錠剤である [それは当時、性病治療に使われた]。しかしパイプは？ ひょっとしたらそれはただ唾液分泌過多 [Salivation] の美化のためにある。身分が高く、原則を持った火酒を飲む人が弱い人たち [身分の低い人たち] の故に、ティーカップから火酒を飲むように。あるいはまた水銀-安たばこもあるのだろうか。あるいは最後のひいきにされた愛人はひょっとしたら清潔さの国 [オランダのこと] からの船乗りであったのか。

★ 可能ならばわれわれの第一分冊, S. 709 を見よ。

われわれは高いところの皿と低いところの鍋を曖昧と形容した。それらは実際に高い程度にそうである。皿がバター皿あるいはほうろろ皿 [*Schmelz-Schale*] であり、鍋がまさに湿った布切れが火によってつかまれている焼肉鍋であったら、どうだろうか。これはなるほど常に片隅-清潔さを証言しているが、しかしまた、この日には徳の番人のあらかじめの配慮自体も証言している。いずれにせよすでにここでは確かにゆでられ、焼かれる。ひょっとしたらまた死は突然、最後の治癒への明るい希望の見込みの後で現れた、そしてあまりに早く感謝のパーティが考えられたのだ、その感謝のパーティの際にはイギリスでは、鍋と焼き鍋と瓶は、われわれのところの太鼓やトランペットと同様になくはならないものである。その時、人々は、自分を忘れることなく、各人の仕方にしたがって天に感謝するのだ。そしてそれはとても正当である。しかしそれらはまた別の解釈も許す、そしてこの解釈はほとんど、ほとんど真の解釈であるように見える、そしてそれこそまさにこの片隅を、とても危険にしているものである。もちろん問うことができる、痰つぼ (*Quispedorje*) の後ろにあるものが、同じ種類のもっと大きなもの、例えば、原-痰つぼ (*Archi-Quispedorje*) であるならば、どうであろうか。そしてその下の鍋が家族の椅子の単なる衛星であったならば？ その推測は強い、しかしある種の感情にしたがって判断すると、とてもホガースの精神の中にあるもので、われわれはとりわけとても畏敬の念に満ちた導入の後で、そのための理由を読者に知らせずにおくことはできない。ちなみにここではただ連続 [*Suite*] が話題になっている。

われわれは前に、絞首刑にすることが可能な水銀と共犯者たちからこの怪しげな片隅の方に引かれる比較-線について話した。比較理由は次のようである。女性の病人を救うために

すべての可能なことがなされた、しかし無駄であった。死の瞬間においても二人の医者突然、もし彼らとその考えをもっと前に持つことができたならば彼女を救うことができただろう一つの考えを思いついた。それが、彼ら二人が手に持っている薬剤である。もちろん、その各々の医者は、互いの薬を、決して遅すぎる時に与えられることができない薬の中に数え入れていた。二つの容器、新しい薬剤の入ったグラスと缶はまだ開けられていない、そしてそれゆえにその女の病人は死にかけている。しかし古い薬はその結果とともにどこへ行ったのか。その結果とともに？ それらは一部は、暖炉のそばの肘掛安楽椅子の中にある、それから怪しげな片隅の中にある。一言で言えば、この片隅は多様な形で受け器 [Vorlagen] を含んでいる、それらの受け器の中に薬が最初はレトルトの中身の損失とともに、それからレトルト自体の損失とともにむりやり入れられたのだ。人々は手元の一番近くにあったものをつかんだ、そしてある時は端 A で、ある時は B のもついで助けようとした、そして急いで一時的にその容器からその台所の仕事を免除することで満足した、それらの容器を数ハント [Hand, 手の幅] ばかり限界を超えて、椅子が議長を務めている分野の中に押し込んだことによって。そうして人々は少なくとも後についでに [obiter] 自分がどこにいたかを知るのである。鍋の上に一枚の皿がある、その皿の上に Cook (料理人) という名前が読める。それはおそらく隣の料理店のものだ。われわれはそれをそこに静かに横たわらせておこう。

まだこの片隅には本来、有名な形の水入れ [Blase, 浣腸器のこと] が属していた、それは暖炉の上方にいくつかの薬瓶と一つの壊れた甕の間にその釘を見出した。家具にとってそれは部屋全体の中の最初の見せ場 [Schau-Stelle] である。われわれが間違っていなければ、ホガースはこの道具を意図的に高めることと結ばれた食器類を押し出すことによって医者たちが特に催吐剤 [Vomitiv] と浣腸 [Lavement] の道をとったということを暗示しようとした。それを私は認める。しかし彼がそれをもって嘲笑しようとするならば、彼は不正なことをしている。彼はこの方法は唯一の方法であるということを知っているのだろうか。その合目的性がいわば幾何学的にとりわけ優雅さとともに証明される唯一の方法であるということ。その娘がそれで死んだということ、それは何を意味するだろうか。親愛なる天よ！ 人は何で死ぬことができないだろうか。1792年にワルシャワで国の使節 Jablkowsky は三百個のカキで死んだ★。本来はスウィフト博士、有名な医者に由来している病気の魂と病気の政府のためのこの証明がわれわれが知っている限り、とても知られているというわけではないので、われわれはその証明 [「ガリバー旅行記」第四部六章] をここでわれわれの書籍言語にいくらか学術的に翻訳して、与える。一方でスウィフトはその事柄を子供も理解できるように表現している。そのようなことはうまくいかない。そこには書かれている、病気は、誰もが知っているように、身体の中の多くの機能の自然な歩みの向きを反対にすることに他な

らないので、この歩みの向きを再び反対にすること、すなわち、正しい方向にもたらしことは考えられない、人々が古い生のだらだらした仕事ぶりを維持するならば — そのだらだらした仕事ぶりによって最初の向きを変えることが起こったのだ。われわれには思われるのだが、これはとても明らかであって、その完全性の証明のためには一つの先行するセクション [§], 誰もが容易に自分の頭の中に見出すだろうセクションに括弧に入れられた形で戻るように命じること以外に何も欠けてはいない。今彼は続ける、しかし病気になるすべての人間は、彼が病気になる瞬間まで、疑わしい場合には *in dubio*, われわれが *A* と名付けたい口でもって食べた、あるいは撰取したので、そして反対の端 *B* で引き渡し [*Ausgabe*] を果たしたので、この状況のもとで *rebus sic manentibus*, 無秩序が防止されて、健康が再び作り出されることができるということは不可能である。真昼のように明らかである。だから何をしなければならぬか。この問いはおのずと答えられる。人は端 *B* でもって食べ始めなければならない、そして引き渡しを端 *A* にゆだねなければならない、すなわち [*id est*], 浣腸 *Lavements* を与え、吐かねばならない [*vomieren*]。自然は驚く、考える、向きを変える、そうして求められたことが起こったのだ。

★ フランクフルト市適要 [*Riostretto*] 1792 年 No. 22 を見よ。

★★ フィヌムへの旅 *a voyage to the Houyhnhms VI*

今終わりのために家具調度と部屋自身のためにいくつかの視線を。鏡は、鏡が言う真実を人があまりに煩わしいと思いはじめて以来、追放され、片隅の暖炉のそばに退去を命じられたように見える。その片隅はとても快適なというのではない、さらにこのとても組立てられた部屋の中では自分を性格づけ、自分の姿に見とれる場所ではない、少なくとも高められた顔 *Os sublime* [オヴィディウス 変身物語] にとっては。鏡はもちろん暖炉のとなりに掛かっている、もし人が暖炉で数え始めるならば。人が他の仕方で始めると、鏡は再び異なったように掛かっている、など。通常は家の守護神が立っている暖炉の棚の上にここでもまたこの幸福な家族の今のペナーテース [食料戸棚の神々] が立っている、昔の神々のためのいくつかの生贄の血を受け取る皿とともに。前者の家の守護神たちはただ具象的である、彼女のネックレスを持った三つの薬瓶の形のパルカ [運命の女神]。彼の有名なくちばしをもった鳥のトキコウ *Ibis* ★, 一つの泡の形のもとで。ここに上院偶像 [*Ober-Haus-Götzen*] が立たなければならなかっただろう。その鏡は、自分の女性祭司たちに、鏡の祭壇の火が彼女たちの純潔な頬と眼の仲介によって慈悲深い気持ちと白熱と光をいっばいに鏡の方に送る時よりも、もっと慈悲深く微笑む時はない。

★ 周知のごとく、最初の「自分に浣腸を施すひと *ἐάντων χλωστρούμενος*」[テレンティウスの *Heautontii-*

moroumenos のパロディ的な変形」, すなわち *scil ópνις*。

これらの神々の王座の上方に湿ったひよっとしたらまだ滴り落ちている洗濯物の天蓋が漂っている, それは死につつある女の座席を越えて伸び, その影響によって見たところ暖かい場を本当の自由の空のもとに *sub Dio* に変える。乾燥の時と場所と同様に, 乾燥されるべきものの数が深い悲惨を証言している。おお, それは家庭の行動である, その中ではこれらの三つの点が家族秘儀に属しているのである。洗濯ロープの上の下着類がまだ, それが体につけられていた時にはまだ尊敬の念とともに主張していた純潔な不可視性を装わなければならないところで, 少なくとも贅沢は考えられない。仕事の交替 [Dienstwechsel] 全体はそれから通常は, 一つのもの一つのものとの交替 [Eines mit Einem] である, あるいは一つのものとの他の何とも交替しない [Eines mit Gar keinem] ということである。洗濯ロープの右側の最後のものは, ただ風に当てるためにそこにぶら下がっている詰め物をされたものであるように見える。それが何であるのか正しくはわからない, それがどのようにバランスを保っているのかもわからない。しかしそれはオリジナルでは, それが容易に釣合いの重りとして同じものあるいは似たようなものを覆うことができるように描かれている。恐らくこれ自体が詰め物をするために仕えている, そしてそれから偽りの胸 *Trompeuse* [字義では, 女詐欺師] であるだろう。暖炉の向かい側に, 部屋のドアの隣に, 高いところの釘に, 穴ないしくぼみのある一枚の円盤がぶら下がっている, その円盤の意味をホガースの生の中でニコルズ [Nichols] は本当によく保存した。それはユダヤ的な復活祭ケーキである, それはあちこちで *Mazzen* や *Mazkuchen* [パン種で発酵されていないパン。小麦と水から作られたパン] と呼ばれている, それはそこのユダヤ人によって (ドイツの多くの地方におけるように) 毎年彼らの客に, 代理 [Ersatz] のためよりはむしろ代理の見本として発送される, そして後者によってその代わりに食料品としてではなく, ほとんど [kaum] 食料品の象徴として多くの寛容とともに取り扱われる。イギリスでは第四の身分の正統信仰の人 [ユダヤ人の職人] はそこからハエ取り器 (*Flytraps*) を作る, おそらくそれがハエに粘り気を塗り付ける, あるいは少なくとも, 乾燥した糊をしばらくの間, 溶解の状態に保つことによって。ニコルズはそれが幾度かこの階級の人々によってこの用途のために使用されているのを見た。ホガースがそれによってこの部屋の女住民身分一物の考え方を示唆しようとしたのかどうか, — その女のキリスト教精神全体はこの高貴な残余, 少しのユダヤ人軽蔑を除いて溶けてしまっていた — あるいはそれは私にはもっとありそうに思われるのだが, そのケーキは第二の版画におけるかつての栄光の名残りとしてその上にぶら下がっているのか, われわれはそれを読者の判断にゆだねたい。常に小さな月は病床に多くの光を反射しなければならな

かった。そして宵の明星 [Hesperus] として死につつある女のために強く良心の中に輝かねばならなかった。良心は、よく言われるように、人生の夕方の時間にそのような反射に対してとても敏感である。居酒屋、鐘亭で彼女はだまされた、そしてこの運命が指示しているのはポルトガルの寺院 [ユダヤ人のこと] 中の事故！ だった、彼女はだました、そして自分の責任において過ちを犯した、そしてそれは一つの犯罪であった。

しかしこの部屋の中ではもう一度、今よりは、あるいは以前の刑務所の中よりはもっと愉快に経過したに違いないということ、それについては、この部屋の天井にその証明がある。ほとんどベッドの上方に有名な M.H. [Mary Hackabout] がろうそくの炎とともに書あれているのが見える、それをわれわれは第一の版画の中で、居酒屋の中のトランクの上に - そのトランクはいくらか古びてここにもあるのだが - 最初に見た。そのような銘文のもとではそれを作成する文芸家 [Bel-Esprit] が机や椅子の上に昇らねばならないのだが、この銘文は感激なしにはほとんど作られない。しかしこれはまだすべてではない。この M.H. の後ろに一つの言葉があった、その言葉をホガースは大部分再び消し去った、そしてそれによって同様に、それを追憶の中に保存することに貢献した。自明なことに、われわれはそれをもう復旧したいとは思わない、そうではなくただ愛好家のためにその判読不能な銘文について、彼らがホラティウスの第一巻の第三の風刺の中にその翻訳を見出すことができると述べたい [cunnus: 女性性器, 売春婦という言葉のことが言われている]。この小部屋が、とりわけ一人のいくらかアマルガムにされた [verquicken は通常は、金属を水銀と混ぜることによって活性化すること] 女患者にとってはどんなに治癒の力があり、どんなに風通しが良いにちがいないか、それは一目見て明らかである。一つの側で漆喰が壁からはがれ落ちた、そして別の側では、羽目板が部分的に落ちている。そこにぶら下がっている二つの獣脂ろうそくの下では、まるで壁全体が一つの異質な物体で継ぎを当てられたかのように見える。ドアはそう見えるように、その堅牢さを通常のように一つのしっかりした枠 - そこには鏡が並んでいる - に感謝しなければならないのではなく、ただ一つの横桁に感謝しなければならない。その横桁の上には床板が釘づけされている。豚小屋のドアは通常は横桁を三枚持っている、互いに平行の、あるいは Z の形で。それゆえにかなりの銃眼が治癒の力のある空気や慰める視線のために生まれる。その視線は優雅さを顧慮して詰めてふさがれ、貼ってふさがれた。その上、自分の母の運命に対する少年の子供らしい情愛のこもった関心を考えれば、老婆がすべては失われたと見たときに、ひざまずくその寡黙な絶望を見れば、女司牧者が愛情に満ちた医者たちの助けを今も求めているが、しかしほとんど期待していない、その時の疲れていながらも優しい視線を見れば、- モリーの運命はほとんど羨むべきものである、少なくとも多くの人間にとって。私には思われるのだが、私はここで彼女の声を聞いた、

どこで人は自分の家族の圏内よりももっと良くとどまるだろうか

Où peut on être mieux qu' au sein de sa famille?

[Marmontel のオペラ *Lucile* から。Grétry の音楽で 1769 年 1 月 5 日に初演された]

第六の版画

ここで彼女はついに、われわれの女主人公は安らかに静かに棺の中に横たわっている、サー・ジョン・ゴンソン [Sir John Gonson] の衛星, M. スワックム [Thwarckum] の打撃 [Hiebe], D. Misaubin の錠剤から守られて。棺の蓋はなんと強力な防御であることか！ おお、彼女はいまなお幸福だった、というのは、彼女が釘を棺のために铸造したとき、絞首台のための釘が铸造されることは稀ではないから。ふたの上には書かれている、

M. Hackabout died Sept. 3d 1731 aged 23

M.H. 1741 年 9 月 3 日に★, 23 歳で死んだ

彼女はだから、たえず教会もうでをする女になることができる前に、死んだのだ。彼女はとても幸福だった、というのは、この流派からのたえず教会もうでをする女が絞首刑にされた例があるからだ。おお！ 何と多くのことがここで言われないだろうか！ それが言われるならば！ しかしわれわれはたえず教会もうでをする女の祈りを恐れている、棺の蓋を尊重し、そして - 沈黙する。

★ ホガースがカレンダーのすべての日々の中でちょうど 9 月 3 日を命日に選ぶ原因を持ったということをおそらくただ少しだけでもこの風変わりな天才のことを知っているだれもが疑わないだろう。ひょっとしたらそれは、それが当たった家族だけが気付く当てこすり [Hieb] である。ジェントルマンズマガジン 1741 年 9 月号 403 頁に次のように書かれている、9 月 3 日にエンフィールド [Enfield] の Miss Betty Fish が死んだ。私はこれを記載する、ホガースの風刺のための手がかりとしてではなく、私の考えの解説として。そのようないたずらはまったく彼の流儀の中にあるだろう。私は他には何も見出すことはできなかった、おそらくそれを誰かが容易に見出すだろう。ユリウス暦 [前 46 年にカエサルによって制定された] ではこの日は *Mansuetus* [カトリックの聖人] という。ここからは最大の予言者の女もコービーのおりから何もすることができないだろう。グレゴリオ暦 [1582 年に教皇グレゴリウス十三世が制定した現行の太陽暦。イギリスでは 1752 年に採用された] ではそれは *Euphemia* [ギリシア語で、良く語ること、敬虔黙想沈黙、祈り。Caledonien <カレドニア = スコットランド> の *Euphemia* は、ディオクレティアヌス治世下の女性殉教者、聖女] である。これはまだ徳をほめたたえられた処女の何かを持っている。しかしそれはここに持ってこられない。私が少な

くとも調べてみる事ができるイギリスのカレンダーもこの種のわずかの名前を含んでいるだけであり、Euphemia の名前はその中にはない。ロンドンの大火 (1666 年)、その日には通常 9 月 2 日が挙げられるが、それを少なくともヒューム [Hume] は 3 日としている。しかしホガースは確かに火事を消した日を選ぶだろう、— われわれは 9 月 3 日にいるので、暗黙の裡に以下のことを無視することはできない、つまりこれはクロムウェルによってとても悪名の高い、彼自身によって賞賛された幸福な日である、その日に彼は彼の二つの大きな勝利、ダンバー [Dunbar] (1650 年) の勝利とウスター [Worcester] の勝利 (1651 年) を戦い取った。さらにその日に彼の最初の、とても奇妙な議会 (1654 年) [クロムウェルによって定められた新しい憲法に基づいて 1753 年 12 月に選ばれた議会] が会議を開いた。そしてその日に彼は (この熱狂者の本性に従って、彼はいまや病気にかかりながら、自分自身に対して彼の想像を利用し始めた、とてもふさわしく)、ついに死んだ [クロムウェルは 1658 年 9 月 5 日にロンドンで死んだ]。常に十分に奇妙であったその日は知られているようにその同じ日に荒れ狂った嵐によってさらに奇妙になった、その嵐をウォラー [Edmund Waller 1605-1687] は彼の有名な頌詩 [Upon the Death of the Lord Protector] によってとても素晴らしく、ただいくらかひどく hofpoëtice [宮廷騎士の仕方] で利用した。ホガースがそれを考えたということは、ありそうではない、というのは、一人の娼婦が、王位篡奪者が死んだ日に死ぬということは特別なことではないから。しかしホガースがドイツ人であったならば、一つの出口があるだろう、ドイツ語の言葉 Nickel を Nikolaus から導き出すことそしてこの Nikolaus をもちろん νίκη と λαός (勝利と民族) から導き出すことは絶望的な思い付きであろう。というのは、この有益な人間階級の負かす *besiegen* と欺く *betriegen* の中で本当にクロムウェルとモリーはいくらか一致するのである。

この集会をつかの間だけ、あるいはいくらか遠方から見れば、かつて世界の中でそのようなものを見たと思いたい気持ちになる、そしてなるほど悲しいが、つねに誠実なものを期待する。その中に情愛のこもった安らかに眠れが見て取れる棺、多くの喪に服するためのベール、聖職者のような一つの存在、教会用務員のような一つの存在、壁の遺体紋章 [Leichen-Wappen]、深い悲しみの中の子供、ローズマリー [葬式の参加者はかつてローズマリーを身に着けた、民間信仰によればその強いにおいが災いを防ぐので]、涙と白いハンカチ。霊柩馬車が待たれている。いったい誰がそこに邪悪なものを推測するだろうか。しかしながら眼をもっと近づけ、部分を個別に明瞭に見ると、世界の中でまだ決してそのようなものを見たことがないということを人は知る。すべては変化し、部分的には消える。悲しみのない喪のベールがある、涙のない泣きわめきがある。一人の聖職者の痕跡もない、教会用務員の痕跡もない。紋章は匿名誹謗文書 [Pasquill] である、そして棺自体もそのほかに居酒屋のテーブルである — 火酒のための。それは嫌悪すべきことだ。さていったいここには何があるのか。それを読者は一部は聞き、そして一部は推測すべきである。

われわれがここでのぞきこんでいる部屋はそこで女主人公が死んだ家の一番下の部屋か、あるいはいくらかお金ももらって遺体の処理をひきうけている男の部屋である★。教会の用

務員の顔をした男がここでその男である。その集まりの女性の部分はすべて厳格な規則の教団からの修道院の尼僧，女子修道院長 [Priorin]，女子修道院長 [Äbtissin] からなっている。それに故人は所属していた，疑いもなく世界の多数の教団の一つに。しかしドルリーレーンの修道院はロンドンが賃貸馬車を持っているよりもっと多くの尼さんを持っているようだ。賃貸馬車の数は千台とされている。厳格な徹夜の祈り [Vigilien] と殉教者の死が毎年，彼女らの多数を奪い取り，また *Jacksons-Bay*★★ [オーストラリアのシドニーの湾。当時そこにイギリスの囚人が移送された] への伝道がかなりの数を取り去るにもかかわらず，少しの減少も認められない。－ 人々はここで，完全に明確には起ころうとしないようにみえる退去を待っている。通常は旅立の際にはそのように起こるのだ，生からの旅立ちを除いて。その場合にはすべては通常はまったく性急に終わるだろう。この場合しかし墓地へはしばしばとても時間通りではなく経過する，人々が元気で健康であるかのように。－ 一方，人々は自力で何とかするすべを知っている，人々はできる限り良く，楽しむ。

★ これらの有益な人々はイギリスでは *Undertaker* [葬儀屋] と呼ばれる。彼らはある意味では世界から出ていく際に，産婆が世界への入場の際にあるところのものである。しかし彼らはその際にはるかにもっと慎重に作業する，そしてその事柄における一番容易な部分を請け負う [unternehmen]。例えば，誕生の際に洗うこと，巻いて包むこと，秤に持っていくことのようなこと。主要な操作を彼らはまったく自然あるいは学者たちに任せる。

★★ この名誉に達するためには一つの検査－学位 [Probe-Grad] が必要である。かつてそれは次のように得られた。もしある女がこの世界にとってあまりに熟しているが，あの世界にとってはまだ十分に熟していないならば，彼女は一種の中間世界に，いわゆる新しい世界に送られた。しかしこの新しい世界は徐々に古くなり始め，修道院を設置し始めるので，そのために第二の世が準備された，そしてこのまったく新しい世界の中に上で名を挙げられた *Jacksons-Bay* がある。最近，南の北極星 [Polarstern] が水平線の上まったく高いところにあるので，人々はこの女性の騎士団にその名前を与えた，そして女騎士たちを南の星の女騎士たちと名付けた。

この集まりの中には十三人の生きている人物，一人の死んだ女，それからさらに両者の中間存在の一種，鏡の中の像，だから合わせて十五人の人がいる。これらの中では三人が個別に一人で立っている。他の十二人はグループにされている。生きている婦人たちの二組はあの個別の主体たちとあわせて七人を作る。一人の生きている婦人は一人の死んでいる女とともに九人を作る。二人の最高に生きているしゃれ男 [Chapeaux，帽子を意味するが，18世紀に比喩的にしゃれ男を表した] は同性性質の二人の婦人とともに十三人を作る。そして最後に一人の婦人は－ その婦人と同じ容量をもった－ その鏡の中の像とともに十五人を作る。われわれは各々の人について何かを言うだろう，それがただ一言であっても。左の翼部分から始まる。

ここでは同時に、側面に掲げられている大きな火砲が目に飛び込んでくる。それをつかの間でも隣に座っている人物と比較するひとは、それを容易に涙グラスとみなすことができるだろう。しかしそのためにはその形はあまりにも臼砲や榴弾砲の多くを持っている。それは本来は飲酒-砲 [グラス] [Trink-Geschütz] である。少なくともブランデー [Nants, Nante, フランスのリキュール] を装填された六ポンドの砲弾を撃つ大砲グラス [Sechspfünder] である。とても平和な、単に隊列のための祝いのかがり火と熱狂者-射撃のために。そのために反響-部分、小さな臼砲が近くに棺の蓋の上の右側に同じ目的のためにある。翼部分のところの火はわれわれが見るように、中心に並外れた作用を及ぼしている。その時点は芸術家によって素晴らしく選ばれている。それはすなわち、ブランデーによって興奮した老年が青年期の感情に近づき、その集まりが、尾を口にくわえ、一つの円を形成している蛇の美しいイメージに似ている時点である。その蛇のイメージと、世界の中の完成されたすべてのものは多かれ少なかれ類似性を持たねばならない。そのイメージはまた保たれるだろう、— 霊柩馬車があまりに長くともまらなければ、そして棺がためらいのあまりその尊敬の念を失わなければ。しかしわれわれはいま、それらの事柄がどのような状態であるのかもっと近く調べたい。

砲 [Artillerie] はよく操作される。小白砲はわれわれがすでに知っているだんご鼻によって世話される、榴弾砲はスズガエル [Feuer-Kröte] によって世話される、そのスズガエルは片隅で両方の前足を輪の形にし、一つの後ろ足を伸ばしている。悲劇的に泣きわめくこと [Tragicus boatus] が何であるのか知らないひとはできるなら、この顔を見よ。それはいかなる照明にも耐えない、またいかなる照明も必要としない。ただわれわれは読者に、女警砲術下士官 [Konstablerin] の美しい口の中でそんなに魅力的に輝いているものは歯ではないことに気づくように願う。というのは、彼女は歯をただいくつか持っているだけだから。そうではなく、彼女の飲み込む、呪う、祈る器具 — 彼女自身の燻製にされていない舌。彼女は彼女の分野のために生まれたように見える、そして彼女の腰の中に榴弾砲の形は見誤ることのできないものだ、少なくとも、一人の人間のもとで両端 A と B が互いにそれよりもっと近くにあるということはほとんど可能ではない。それらは両方も一人の器用な軍医によって一つの手で片づけられるだろう。ちなみに、彼女が飲まない限り、酒を注がない限りそのように座っているということを、思い出させる必要はない。前の版画の中でトランクの前でひざまずいていたのはこの女だろうか。顔たちは互いにそれほど似ているように見えない、しかし、ラオコーンは彼の不幸の前の日に、彼がこの二、三千年のあいだ見えたのとは異なって見えた。そして腰は？ そうだね [Inun]。そのような日には人間は自分が持っているものを一緒に身に着ける。

個別な顔に属しているこのフェゴ島-顔の隣にわれわれは最初の一組がグループにされているのを見る。ヨーロッパ-ロンドン的な文化の一組が。一人の修道院乙女に悲しみのハンカチをあてがうのを手伝っている葬儀屋 [Undertaker] はこの素晴らしい機会を、彼女にかなり納得のいく内容の一つの小さな請願書を手渡すために利用する。そしてそれをとても多くの礼儀作法ととても多くのうやうやしい真心のこもった仕方ですので、その請願書は聞き入れられないままであることができない。実際にまた既に親切に願いを聞き入れることの反映のようなものが請願者の眼の中にある。その印自体は隠されているにもかかわらず。おそらく彼はハンカチをあてがう際の彼の助けに一つの問いの形を与えたのだ、そしてそれによって一つの答えの機会を与えたのだが、その答えはまったく目に見えないままでとどまらねばならない。この二つの顔の中のコントラストはすばらしい。葬儀屋は眼と口がこっそりと教えていること以外の計画を持っていない、彼はまったく集中している、可能な限り一面的に - 今は少なくとも。それに対して娘の眼からは全体性 [Universalseitigkeit] と計画が見ている。それが濁っているように見えるにせよ、それを濁らせているのは確かにその集まりの指導的精神 [Spritus rector] だけではない。捕えられた哀れな人の盲目性に対する勝ち誇る微笑みの明瞭な痕跡によって、この間抜け [Troopf] 自身ではないすべての人にこっそり教えられる方法がそこにはある。ドルリーレーンの女たちは自分を忘れない。彼女たちのもとでのすべての動きは、それがとても小さなものであれ、彼女たちが公的にそれをもって攻撃する心の外部で、少なくとも一枚のハンカチを密かに狙っている。魔女 [この女のこと] がただ右腕に沿って上のほうで、心臓があふれていることを知るように、彼女はすでに左腕で略奪する。これは葬儀屋にとっていわゆる小さなおみやげ [Souvenir] である。大きなおみやげは見出されるだろう [性病の暗示]。

この最初の混合の一組のすぐ後に今、四組の混合していない組が次々と来る。左の翼から右の翼に進むならば、とりわけ最初に、見物 [Besichtigung] を表している組。両方の部分は、見られるように、中年の人である。両者においてすでに賞賛に値する、最高に理性的な胸-経済 [Busen-Ökonomie] が現れてきた。それについて若い無思慮な畜生 [Geschmeiß] はまだ何も知ろうとしない。一人の女は眼鏡を忘れるかもしれない年齢であるように見える。眼鏡がここに欠けていることが見える。第二の女、やせ衰えた耐え忍ぶ女は指の間に、痛いに違いない何かを持っている、それは最初の女によって外科医的な真剣さで、そして実際に、専門家的な繊細な指使いと微妙さで検査される。それは何だろうか。あるいはそれはひょっとしたらなんでもないものであり [sein], 単に何かを意味している [bedeuten] だけなのか [sein と bedeuten, ルターとカルヴァンの間の字句にこだわることの暗示]。率直に言って、われわれはここでほとんど恐れている - (それはギリシア的なものであるかもしれない) 深

い、秘教的な [esoterisch] 気まぐれを、完全に公教的な [exoterisch] 気まぐれの仮面の下に。その気まぐれについてももちろん、人は言いたいことを言うことができる。おお！ 注釈者が、いくつかのギリシア語の魔法の言葉以外に何も話すことなしに、読者にただドアだけを開いた難しい箇所からこっそり立ち去ることができるならば、それは彼にとって何と快いだろうか。－ その耐え忍ぶ女な指にいぼを持っている、そしていぼを取り除くことに周知のように死者は生きている人よりももっとよく熟達している。眼鏡をかけていない婦人はただ指の間のいぼを死体と接触させることだけを考えているように見える。[絞首刑にされた人間の四肢でこすられるといぼがなおるといふ民間信仰] その問題は容易ではない。鼻がそれをしなければ、何もそれをしない。これについて別の生き物が泣いている。しかしわれわれの芸術家がどのようなたずら者であるかを考えよ。彼のペテンにおいても。彼は悪ふざけの考えを覆い隠す、そして彼の覆いは再び悪ふざけである、この悪ふざけは深い、最初のそれよりはもっとわかりやすい、そして最初のものとの結びつきを持っていない。私は政治について聞いた、深くそして底がきわめがたいと。人々はその政治を別の政治の中に包み込む、その別の政治はまた深い、究明可能で、最初の政治（新聞のための政治）と結びつきがない。しかしそのような風刺について私は聞いたことがない。ここで手術を命令し、指揮している、いぼを取り除く女はちょうど額の前に二つのいぼを持っている、角が生えたように。観察をそのように続けるならば、ここで明らかに破片 [Splitter]、梁、兄弟の眼 [Bruders-Auge]*に接続される道徳 [「他人の眼にある塵は見えるが、眼にある梁は見えない」〈他人の小さな欠点に見えるが自分の大きな欠点は見えない〉マタイ 7,3 から。カレンダー記事では、「リヒテンベルクは吊いの指輪 (Trauerring) とハンカチを娼婦にふさわしくない、国をあげての服喪の表章として言及した」] はもっと容易に経過する。など。

★ アイルランド氏はまだ、ここには喪に服するための指輪がはめられていると信じている。われわれもそれをアイルランド氏のずっと前に信じていた、しかし後に後悔した。

これらの組になった人たちの後ろに、第三の組が立っている。一人の尼が、鏡の中のわれわれが名を挙げたくない一人の尼と話し合っている。疑いもなくすべての中でもっとも幸福な一組。世界のすべての組への結びつきの際に、共有の至福の存続のためには主観の中での不足と完全性の分配が必要である。君が持っていないものを私は持っている、そして私に欠けているものを君は持っている、それは彼らにとって最も堅固な基盤である。しかしここで話題になっている結びつきの際にその基盤はまったく役に立たない。そしてまさしく歓喜に同意しているために二つの党派の一つがすべての可能な完全性を持っているかそれとも、－ それは完全に同じことなのだが － すべての可能な完全性を持っていると信じている

ということは十分である。例えば、われわれの現在の場合には、背中を外に向けているその娘は若く美しい、あるいは彼女自身が少なくともそれを信じている。このことが定められると、彼女は少しも [Bohnenfleckchen, 豆の斑点。リヒテンベルク固有の言い回し] 他の人たちの性格を気に掛けていない、しかしどのような愛情に満ちた感嘆でもって彼女たちが互いを見つめているかを見よ。出会いそして互いを知らない二人の天使に似て。各々が他方の中により高い存在を見ている、各々が賛美し、賛美される。各々がひざを曲げる、そしてその場面は相互の崇拜で終わる。

右の翼を形成しているこの二人についてわれわれは少なからず言うことを持っているが、とても多く沈黙すべきことも持っている。ホガースの名誉はわれわれから前者を要求する、われわれが読者に負っている敬意は後者を要求する。一方、その場面は理解されるべきであるし、理解されなければならない。ただ人々はわれわれに許すだろう、われわれが常に悪魔 [Teufel] と書くわけではないということ、そうではなく、その代わりに *Urian* 氏 [悪魔のこと。「ファウスト」にもその表示がある] あるいはただ T と書くことを。

彼と同様に彼女は今度は公然の肖像画である。その女中はマリー・アダムズ [Mary Adams] という名の評判の良くない人間だった、彼女は、彼女が女中の時に行った数知れない不品行のゆえに、最後に彼女の三十代の時の窃盗のゆえに、新しい世界にではなく、とても重大な状況のゆえにあの世界に送られた。彼女は 1738 年 9 月 3 日に絞首刑にされた。人々は彼女の肖像画を持っている、そしてこれらの肖像画の一つに倣って現在の肖像画が描かれたそうだ。さてこれらの版画はすでに 1734 年に、だから彼女の死の三年前に現れたので [実際にはこのシリーズの銅版画はすでに 1732 年 11 月に別人の手によって銅版画にされた、そして 1733 年 4 月にホガースによって供給された]、そこから少なくとも明らかなる、彼女は自分の著名性を彼女の最後の犯罪と彼女の死に方だけに感謝しなければならないというわけではないということ。それはもしかすると個人的な魅力だったのだろう、その魅力はこの顔自体に欠けてはいない、そこでは**英国的な顔いろ**と**英国的な歯**が競技に加わらない、そこでは、美しい顔の中の生のうちで外の世界に属しているすべてのものが自分自身の中に戻ったように見える。彼女の隣の男は聖職者ではない。[カレンダー記事の中では、「その聖職者、この仮面をつけて歩きまわっていた当時の有名な悪人」]。われわれは読者にこの考えを断念することを切に願います、そのようなことは必然的に芸術家に対して反感を起ささせるだろう、それによってこの作品が作るべき全体の印象が失われるだろう。それは単に上着 [der Rock] である。ここでその上着の中に刺さっているものは、ホガースが当然にも不名誉的な [infamierend] 不死性を認めたわずかの顕著な悪党たちの中の一人である。彼の類のチャーターズ大佐 [Charters] のような人。ひょっとしたらと誰かが尋ねるかもしれない、

芸術家はここでもその衣服を大切にされた方がよかったのではないかと。[神学者に対する風刺についてのリヒテンベルクの憂慮] われわれはこの注意の喚起をとて根拠があるとみなしている。それどころか聖職者の服装でない方がもっと良かったらと確信している。しかしそれは起こったことなので、芸術家の弁明を聞かねばならない。われわれはそれをあたたかい喜びとともに、人々は彼に無罪の判決を下すだろうという確かな希望とともに受け取る。

ホガースは彼の作品の中で三つの場所で説教者の服装の人間に対して非難をした。それは本当だ★、しかし彼が聖職者の身分自体に非難をしたということをわれわれは思い出さない。これら三つの場所のうちの二つは有名な人物の肖像画である [「ポンチ酒の集まり」] の中の牧師の Fotd, あるいは演説者 Henley], 彼らの卑しい性格について大衆の声はホガースが自分の声を与えたときすでにとっくに決定していた。彼はだから、すべての正直な男が彼の前にしたこと以外に何もしなかった、彼はただスケッチし、絵を描いた、以前の人々が話し、書いたところで。第三の場所の表現がまた肖像画であるかどうかわれわれは確実性をもって言うことはできない。しかし肖像画でなくてもそれは良い事柄を害することはないだろう。その間抜けは少し美食家 [Gourmand] である、通例は [regulariter] 七年ごとに回帰する機会 [当時イギリス議会の選挙のあいだの期間はそれほど長く続いた。「残念だがしばしば国民は七年を通して、ここで数分で受けた損害の償いをしなければならない」] の際の美食家である。その上彼は片隅で騒ぎまわっているのではない、そうではなく彼はいわば彼の教区の内部でごちそうを食べている。その教区も彼と同時にごちそうを食べている。それは彼の家族に一ベニヒもかからない。そのようなことは欠損とは呼ばれない。しかしここで状況はすべての描写を越えて行く。ホガースはこれを確かにとても感じた。彼はそれゆえにまた、彼が他の場合には作品の中でわれわれが知っている限り決してしなかったことをした、それどころか彼の風刺の本質と決して一致しないことをした。(だから自分を正当化するためにはそのような並外れた手段が必要である) 彼はすなわち予約注文者のためのこれらの千二百の試し刷り [Abdruck] の上でこの下劣な男を A の文字でもって表した、その文字は版画の下は一つの注 [Note] に関係づけられた、その中では明瞭に、彼が誰であるか、どこでどのように彼が正義から逃れるすべを知っているかが暗示された。今この怪物がどんなに法の恩恵を奪われた存在であったかを考えよ。ホガースのような正直な有名な愛された男がこれを世界の前でそのように描くことを恐れない、そしてその上、いわばそれに対して正義を要求することを恐れないということを考えよ。この仕方では、とわれわれには思われるのだが、彼が聖職者の身分に対して何も反対するものを持っていない、そればかりか、まさに反対に、聖職者の身分の名誉がどれほど彼にとって切実な問題であるかを認識させたのだ。彼

が疲れることなくする風刺のための彼の絵の狩猟の際に、警察や司法活動を逃れるすべを知っていた多くの部分が彼の罠に掛かった。そして彼は正しく行動した、彼はそれを当局に引き渡した、あるいはそれに、当局がそれを不注意から再び釈放するときには、次の機会にとどめを刺した。

★ われわれが見たポンチ酒の集まりで一度、ここで二度、そして彼の選挙宴会 (election dinner) [この版画をゲッティンゲンポケットカレンダー 1787 年は解説している。酔った牧師の描写] で三度目に。

この悪人、明らかに [トランプの] 最高の切り札 [Spadille] は - 他の黒い [トランプの] エース [da sschwarze As] のように、葬儀屋、このハートのエース [Truempfen in Coeur] の中の *Basta* [第二か三番目に高い切り札] のように - *Couple-Beggar* (ならず者 - 結婚仲介者、彼が数グロッシェンで教会を介さないで結婚させるので) の名のもとでもとても有名になった、それでホガースの解説者は彼の本来の名前を忘れてしまった。すでにそれだけでその分野における大きな猊下 [Eminenz] を証言している筆つがい [Zug]。われわれに断言されたように、彼は自分で通常は週に数回、この仕事と並んで、下水溝 [Gosse] と結婚した。ヴェネツィアの総督がアドリア海と結婚するようにはない。わずかばかりのものを投げ入れる代わりに彼は、晩に彼に通常は残っていたすべてを投げ入れた - *自分自身*。彼は自分は神学者であると称したことはなかった。彼はただ典礼 [Liturgie] に熱心な人であった。そしてこの典礼の中でも彼は結婚と葬儀の章についてもったいぶっておしゃべり [salbadern] した。 - 数グロッシェンの値段で。そう呼ばれたように、彼の聖職者的な手は、決してそれ以上のものをつかまなかった、しかし一層頻繁につかんだ - それに対して、彼の世俗的な手は聖式謝礼 [ミサなどの司祭に贈る礼金] を要求した、その手がそれを見出すところで、底のあるあるいはないポケットの中に、果てしなく。それは知られている。ホガースがここでそのようなことを暗示しようとしたのかどうか、今はもう決定するのは難しい。彼のいわゆる聖職者的な手、左手で彼は葬儀 - 火酒をととても悪くつかんでいるので、彼のハンカチを汚している。世俗的な手がどこに突っ込まれているか、今まで、われわれが知っている限り、誰も決定することができなかった。人々はその手を、マニル [Manille. オンバ <Lomber> の二番目に強いカード] がとても慎重に前に差し出しているならず者 - 結婚仲介者 < Couple-Beggar > の帽子の下に探したが、そこにも見出さなかった。われわれはだからこの最高に困難な個所 [locum difficillimum] を好んで、快く放棄した。[「彼の左手はワインをこぼす、彼の右手は見えない <out of sight>」という詩句をリヒテンベルクはカレンダー記事の中で書いている]、そして注釈者の流儀に従って、内的な気楽さとともに、もっと容易なものに移る - だんご鼻 [Stumpf Nase] に。彼女は女友達の棺の足元

に手に空気銃を持って立っている。カウンターの前の従軍商人女のように。それを私は感情と呼ぶ。しかし人間本性の名誉のために、彼女の荒れた視線の中に、隣の二人の振る舞いについての一種の立腹は誤解されることができない。それは、見てわかるように、彼女の注意全体を引き付けている、しかし彼女の口がその事柄の際に多くの平静さを証言しているにもかかわらず、彼女の眼は場、時と時間をそのためにはふさわしくないとみなしているように見える。この感情のないヤマネコ顔の中にもそのような獣性を承認しないという表情を置くこと、そしてその後でそれについて石に叫ばせること〔ルカ伝 19, 40〕は、ホガースの美しい特徴である。通りすがりにわれわれは一度自分で、この人間〔*dieses Mensch*〕が今までしたことと耐えたこと、そしてそれがどのような生であったかを集めて言及することをお願いする、そしてそのような生は、われわれがこれを読んでいる今、数知れぬ人たちによって生きられるのだ！ - しかしわれわれはここに押しかけている永遠の栄光の相続人たちと彼らの家庭教師たちについての考察を先取りしないようにしよう！

まったく後ろのドアのところ、われわれは第五番目の組を見る。ワインで陶然となったということが何であるかを知らない人はそれをここで見る。おそらく完全に悪いわけではないこれらの心が合流するのを見れば、人々はほとんど一緒に溶けるだろう。なんとという至福か！ 彼らは愛と友情の天の方に漂っていくことを信じている、彼らを運んでいる安酒－雲が十五分後には彼らのもとでバラバラになり、彼らを速められた速度で深みへと送るだろうことを知らない、その深みでは群れの番人、さらし柱、やぶ医者、麻をたたく人のクラブが常に彼らを出迎えようと準備しているのである。

第四のそして最後の組、死者の観察に取り組んでいる生きている人たちをホガースは理由なしにその版画の真ん中に置いたのではない。ホガースは人々が彼らを特に見るべきだと願っているのだ。その真ん中が、その集まりが形成している半円、そこでその集まりの両翼が結合する半円の最高の点であるように、芸術家がここで引こうとしている教訓の線はその役割の中で合流する。それ故にその娘はホガースの美の一つである。これは人が覚えておかなければならない何かである、人がそれを見ないということが起こりうるからだ。一方その娘は完全に悪い人というわけではない。青春と花盛りが少なくともそこにある、そしてその青春と花盛りにホガースの教訓は向けられている、その教訓はおそらくもっとも容易に棺の言葉から表現されるだろう、

「私もまたしばらく前に、君が今あるところのものであった、君のようであった。君が歩む道を離れよ。そうでなければ、考えよ、私が今あるところのものに君もまた短い時間になるだろう」

その愚かな娘がその言葉を聞いたかどうかは、その顔からは推測されない。しかし彼女が

それを聞いたにしても、霊柩車が来る前に、それを忘れてしまうだろう。そのことは、私には思われるのだが、推測される。

ほとんどその棺の下に、以前死の肘掛椅子の下でのように、ここでも小さな子孫が座っている、そして鎮痛剤の作業をしている。そこで Manser [母の胸の意味、私生児の子供] が回していたのは豚の肩ロース肉だった、ここで彼 [Manser] は独楽を巻き付けている、それを悲しみの部屋でぶんぶん音を鳴らせるために。若者のところでは、*anodyna* [痛みを和らげるロープ] が良い効き目があるように見える。しかし人が原因とみなすものが本来は結果であったということがありうるだろう。その若者は悲しんでいない、彼が焼肉を裏返していて、独楽を巻き付けているからではなく、そうではなく彼が悲しんでいないので、彼は肉を焼き、巻き付けているのだ。どうして彼は悲しむだろうか。誰も父について知らないの、彼が父を持っていないように、まさに彼は母も持っていなかった、彼がそこに生きていた社会の中では誰も母である時間を持っていなかったの。おお、母と父という言葉は通常辞書の中で書かれていて、多くの頭によって考えられているよりもはるかに多くのことを言っている。ありがたいことに、多くの子供がまだ一人の父と一人の母を見出すように、
 - その両親がとっくに墓の向こうに行ってしまったとしても - 残念ながらも、父のいない母のいない孤児もいる、彼らの両親はまだ墓のこちら側で、一日とすべての日々、本当においしく食べているのである。おそらくその哀れな奴はある片隅から別の片隅に突き動かされたのだ、しかし母の死亡の後で、今明らかにその突き動かす人たちの一人が減った。だんご鼻が今彼を隅に投げ入れると仮定すれば、彼を再び投げ戻す人は誰も手元にはいない。その少年の脚からわれわれはほとんど *anodyne necklace* [痛みを和らげるネックレス] が多くは助けにならなかったということを推測する。 - ホガースがその少年をここで *Chief mourner* [喪主 *Trauer-Chef*, *Chef des Leichenzugs* 葬列の長] 衣装を着せたということは、一つ以上の点でからかいである。子供たちは決してそのために採用されなかった、そうではなく、それはある喪に服している心の名を汚さない外観の男でなければならなかった。その英語の言葉はまた喪に服している人たちの中の最初の男を想起させることができる、そうして事柄はほとんど愉快になる。というのは、一番深く身をかがめた男が、葬列が出発する少し前に彼の独楽を巻いているならば、他の人たちが最初にどれほど深く身をかがめていたに違いないかが容易に推測されるからだ。ロースマリーの入った皿は、狭すぎる [手袋の] 指のための糸巻棒 [Streckspindel] とともに手袋がある小さな机のように、十分明瞭である。しかしその手袋の一組の位置はひよっとしたら完全には見逃されることはできない。それらは感情にかられて引き離されているように見える、再び組み合わせるために、そしてその例によってここに集まっていくらか世俗的なことにかかずらっている十三組の手の中の少な

くとも肉と血の十組の手を恥じ入らせるために。

壁の喪章 (escutcheon (動物) 盾板) をわれわれは義務に従ってなるほど描写したいのだが、しかしそれによって永遠に伝えられることになる要求について説明することなしに、あるいはそれとともに暗示されることになる地方について説明することなしに。一番小さな家族の誇りとともに平和が、われわれが紋章学的な明敏さでもっていずれにせよこの機会に入れることができるであろうすべての名誉よりもっと価値があることによって。 - 青い下地の中に三回立てられているのが見えるその道具は英語では *Spigot and fosset* という名前である、それは *faucet* と書いた方が良いのだが。それは樽のための蛇口の類である。これは見られるように、二つの部分からなっている、そのうちの小さな部分 (*the Spigot*) は大きな部分 (*the faucet*) の中に刺さっている。より大きな部分が樽の中に刺さることになるように。ワインの栓の場合には、ただ小さな部分だけが引き抜かれる、そして瓶がいっぱいになると、再び中に入れられる。それは世界で最も単純な蛇口である。しかし既に与えられている言葉にもかかわらず、われわれにはこの紋章について小さな注釈をすることが許されるだろう。読者がすぐに見ることになるように、その与えられている言葉は本当にそれによって壊されないから。この言葉は単に親戚関係と地方への見せかけられた要求の解釈に向けられていた、しかしわれわれの嘲笑家が一つのそれ自体無邪気な事柄についてすることができた悪ふざけ的な乱用には向けられていなかった。われわれの嘲笑家はつまり、おそらく意図的に、三つの蛇口を、人々がそれらをいくらか離れた距離ではフランス的な三本線 [男性の髪形における髪粉を振りかけられたお下げ髪のための黒い絹の袋] とみなすように描いたのだ。フランスの紋章を棺の上に掛けるといふ棺の娘のための美しい賛美！ 私は、そのいたずら者は、イギリスの三人の紋章王の一人が彼を厳しくしかるかもしれないと恐れなかったならば、喜んでその三本線を自分でそこに掛けたらと思う。ホガースのイギリスの注釈者たちが似たようなことを彼らの解釈のために恐れたかどうか。これらすべてについて誰も一言も言わない。

窓の中にはとてもあいまいな内容と形の物体が挟まっている、とてもあいまいなので、その物体が開口部をふさぐために内部からはめ込まれたのか、あるいは外からはめ込まれたのか、はっきりとわからない。そして後者の場合、その物体自体が、それがいまふさいでいる穴を自分で作ったのかどうかははっきりとわからない。そしてこの後者の種類のガラス手工業のぞんざいに作られた物をロンドンの徳の高い若い下層民は好むのだ、ロンドンでは下層民は部屋の中にとっても多くの悪徳を、特に葬式を、フランス的な紋章でもって推測するのだ。悪徳が投石を、投石がここでのように自分が引き起こした損害をすぐに再び治すように、測定するならば、人は喜ぶことができる★。

- ★ これは投げ入れる際に鉛の枠の中にはまり込んで動かなくなった石であるという解釈をわれわれにとっても本当らしく思わせるものは、ホガースが一つの後の作品のもとの [The election 1755 年] この特徴 [Zug] をもっと明瞭に、それどころかまったく見間違いようのないふう利用したということである。はまったままとどまっているものはれんがである、一方、他の人たちは自由に飛んで通り抜けていく。

最後に、この版画の Roucquet の判断について一つの発言。彼はわれわれによって第一分冊の前書きの中で指示された書の中で、ホガースはその物語を死でもって終えたらもっと良かったらと主張し、現在の版画について言う、*c' est une farce dont la defunte est plutôt l' occasion que la cause* それは茶番劇である、そのために死者は原因であるよりはむしろきっかけである。人々はなるほどフランス人からは、彼らがとてもまじめな事柄をしばしば笑劇のように論じ、とてもありふれた事柄を重々しさとともに論じることに慣れている。これは次のこと以外になにも言っていない、つまりフランス人にとってすべてが可能であると。しかし Roucquet はまったく間違っているというわけではない。彼はただ、そこからこの絵画が見られなければならぬ主要な立場を当てそこなった、そしてそれを別の立場から観察したのだ。その別の立場のために、残念ながら！ 並行してその絵画はまたデッサンされているのだが。それは、別の言葉で言えば、ホガースは実際に間違えたということの意味している。Roucquet がすぐに最初の点を当てたのなら、ひょっとしたらその判断全体は行われなかっただろう。ホガースは議論の余地なく、グレイ [Thomas Gray 1716-71] が彼の素晴らしい悲歌の中で [Elegy written on a country churchyard. 1750] とても美しく言ったことを言おうとした、最も悲惨な男と最も地位の低いものでも、彼らがいそいそ無名で死んでも、幾人かの後に残されたものの敬意でもって自分を慰める、そしてそれを願う。死後の罵倒ばかりでなく（というのは、それは誰にとってもどうでもいいことだろうか）、また笑っている相続人についての考えもとても軽率な人の最後の瞬間を不快なものにするのだ。人々は例えばイギリスでは死刑を、死体が解剖に運ばれるという追加によってとても鋭くされたと思えないだろうか、そして別の場所では、首をはねられた者を絞首台の下ではなく、墓地の片隅に埋葬することによってとても和らげられたとみなさないだろうか★。しかしこのそれはどのような埋葬だろうか。死後のそのような名誉が絞首台の下の埋葬から区別されている段階はほんのわずかである。これは疑いもなくホガースの考えである、そうしてその埋葬の場面は本当によく全体に連結される。しかしどのように彼はその考えを作り上げたのか。－確かに特別にというのではない。そのような状況とともに、まださらに子供、自分の子供である喪主 [Chief-mourner] とともに、紋章付きの盾、棺の蓋の上の銘文とともに、そしてそもそもそのような豪華さとともにロンドンでは一人の娼婦も埋葬されない、あるいはそれ

は一人の身分のある人であったに違いないだろう。ニコルズは言う、そのような列は確かに実現しなかつただろう、とりわけ、警察がとても悪かったその時代には。風刺はもちろんその中にある、しかし統一性が欠けている、そしてもちろん側面から見て、この第六の版画は悲劇の後の後喜劇の名声を獲得する。

★ 解説者の祖国では、これは通常は、憐みに値する子供殺しの女の場合に起こる。彼女たちはまた最後に絞首台の下で首をはねられなかった、本来の死刑執行人によって執行されなかった。

訳者による付記

本稿は、Georg Christoph Lichtenbergs ausführliche Erklärung der Hogarthischen Kupferstiche. In: Gerog Christoph Lichtenberg Schriften und Briefe. Herausgegeben von Wolfgang Promies III. (Zweitausendeins Verlag, Kommentar zu Band III 1961) の翻訳である。第二分冊の本書は 1795 年に出版され、ホガースの銅版画シリーズ『情婦の道』を解説している。(リヒテンベルクの『解説』については第一分冊に記した「後書き」を参照してください。東北学院大学教養学部論集 第 186 号)。本文中の (), ★の注の文はリヒテンベルクのテキストのものである。[] は翻訳者による注である。